# 女人藝術



# 三上於菟吉・長篇小說集 第一卷

# 激流

現下長篇界の覇者三上氏が會心の長篇を集めて傑作全集を作る。第一卷は東日・大每に連載され、更に映畫となつて、目下異常のセンセーションを起しつゝある『激流』となす。

**著者曰く**

これは從來の私の作に比べて、より奔放、より自由に、大に趣の變つた世界を描かんとする決心の下に筆を執つたものである。人間の心の奧に巣食ふ欲望の種々な顯現への探求は、私として止むに止まれぬ熱情で、努めて現實の社會相に觸れ、努めて人情の根柢を突きとめて見たいのが我が本願である。私は此の度こそ死力を盡くす覺悟だ――かう執筆前に宣言した此の『激流』は果して讀者の期待に酬い得たらうか何うか。切に熱讀を待つ次第である。

日活秋季超特作映畫

伊東深水氏畫・四六判最上製全一冊・美本 壹圓五拾錢 郵送料拾貳錢

東京市牛込區矢來町 振替東京一七四二番 **新潮社** 電話牛込・八〇六・八〇八 同八〇五・八〇七・八〇九

## 日活特作連續時代劇

三上於菟吉氏原作
清瀨英次郎氏監督
（雜誌富士連載中）

# 落花劍光錄

澤田清、櫻井京子主演

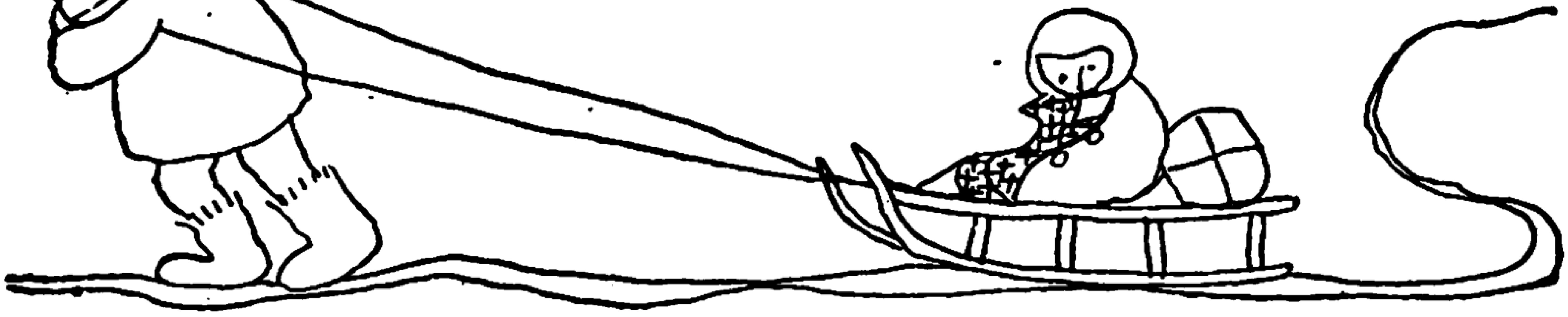
寺島貢・淺香新八郎・中村英雄
常盤操子・中村紅果・實川延一郎
助演

## 第二篇近日公開

# 女人藝術初春號 目次

――禁轉載――


米國と英國……山川菊榮…（六八）
ロシャの農村婦人……神近市子…（七四）
農民自治とは何ぞや……松本正枝…（七〇）
社會時評……大木耳子…（一四九）
■文壇人一月の運勢……（三）
■異國少女―表紙……亀高文子
■春興―口繪……島成園
■椿・蘭―題畫……柿内青葉
戀愛行進曲―長詩……高群逸枝…（二）
男性訪問……西條八十―英美子 安部磯雄―八木秋子…（一三六）
■新らしい支那婦人の服裝……室千鳥…（八〇）
■築地小劇場を見る……岡田八千代…（八二）
■長編書けなかつたわけ……平林たい子…（八五）
■ベルリンの花を訪ねるの記……（八七）
捧ぐる言葉……尾崎みどり…（一〇六）
古創（放浪記）……林芙美子…（九八）
長流記……山田邦子…（一一〇）
言葉・表現……八木秋子…（一〇四）

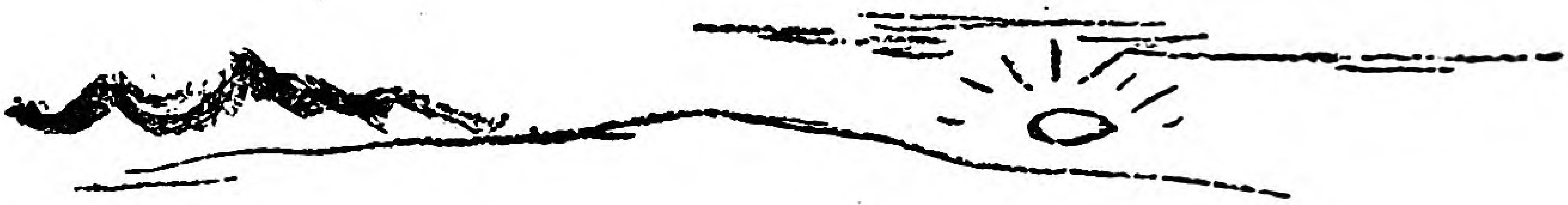



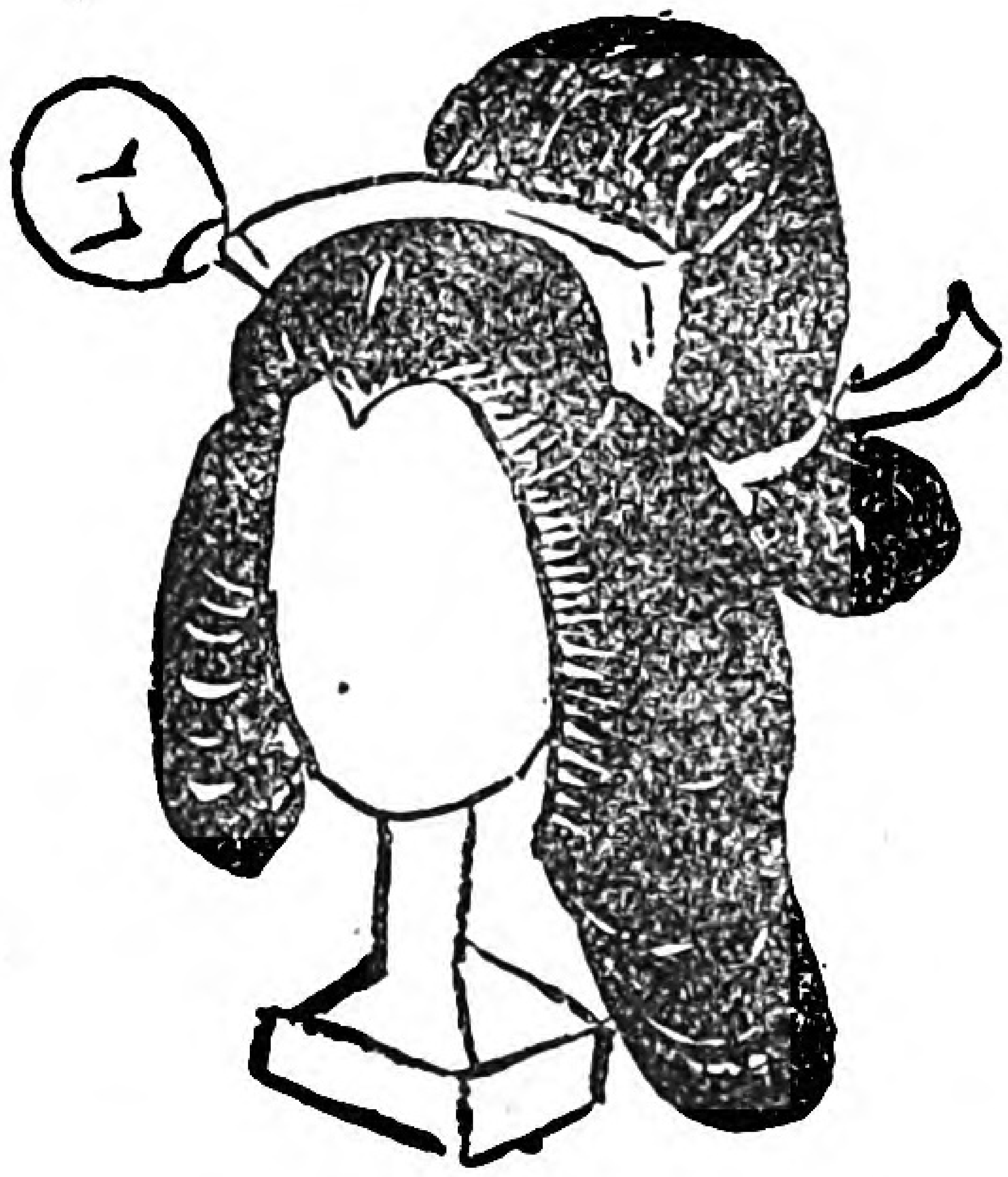
■應　接　室……………………………（六五）
■果物―……………屍……シャルラ・ハルツング
■遠　近……………………シャボー…（八八）
春の鏡―詩……………………生田花世…（八四）
跳舞的上海―詩………………森　三千代…（八六）
みなみのくに―歌……………水谷靜子…（二五）
はね十句―俳句………………川島つゆ…（五九）
■小サロン……■彙報…（一五二）■編輯後記……（一五四）
■カット……深澤紅・篠田ちか・大原あや・岡田かよ子・金子多榮・甲斐仁代…
留置場―小説…………………北山常子…（四八）
赤―小説………………………中本たか子…（四二）
蒼ざめたる家―小説…………宇野千代…（三六）
みちづれ―長編飜譯…………望月百合子…（一二六）
人間料理―シナリオ…………しのたけじ…（六〇）

特別附錄

# 誌上議壇

赤松明子
平林たい子
神近市子…（一三四）
新妻伊都子
金子しげり
漫畫　長谷川春子



かつら調製

# みどりや

東京市淺草區千束町二ノ四二三
電話 淺草四四〇三

歌舞伎座を初め諸大劇場の御用をつとめ常に好評を頂いて居ります

舞踊のお浚ひ、餘興などの御用には新舊とも美しく結ひ上げて迅速にお間に合はせ致します

其の他『はげかくし』なども巧妙にお拵へいたします




MARUBISHI
御買物は
常に丸菱
東京・丸ビル
丸菱呉服店
MITSUO




私には何にも申すことが、ございません。たゞ御らんの通りの顔を持つた人間だと申上げるより外ございません。

―平林たい子―



おぢいさまはあけび色
なぜか墓山のあけび色
お父さまは土の色
雪どけあとの土の色
銀鼠色のお母さま
青空を背にしてゆらぐポプラ色
たそがれ色もお母さま
どんな日かのお母さま
七ツの私は紫色
寺のふとんの紫色
十二の頃はオレンヂ色、のうぜん
かづらの花の色
十七の私は深紅色、山椿のやうな
深紅色
それからもゝ色鳩羽色
次第にあせてくすぶつて
はて、今は何の色ともみわけませ
ん。

――深澤　紅――

# 女人藝術



第二巻第一号、二頁から二十一頁は、高群逸枝著「恋愛行進曲」が掲載されておりましたが、同氏の著作権継承者の了解が得られませんでしたので、本復刻版では割愛致しました。

（龍溪書舎）

# 文壇人一月の運勢



岡田かよ子

里見弴　吉

金錢上の利益もあり、何事に就いても相應に運勢の强い月であるが舊債又は女難について一苦勞する事がある。前もつて多情佛心に注意。

ささき・ふさ　吉

手輕に戀人三人まで出來る月なり、たゞしはらみ月なれば御用心。

岡本かの子　凶

八方塞り。

菊池寛　半吉

氣骨の折れる月で意外の失費がある。物を始むれば龍頭蛇尾にて、資本倒れ、時間潰れ、世間の鼻息を見るべし。

家内によろこび事あり。

武者小路實篤　半吉

月末頃から旱魃の稻田に雨を得たごとく心身爽かになります。月始めは何事も大言をつゝしむべし

三宅やす子　凶

蒟蒻の化物のやうに慄へてばかりゐては駄目な月である。坤の方に力になる男が出て來ます。大慾をつゝしみ男子の言に注意するべし。

吉田絃二郎　半凶

盜難に詐僞に御注意。

徳田秋聲　吉

質素儉約を旨とし外見をかざるべからず。體に女の汚れつきたるを洗ひおとしたと云ふ風にさつぱりした月なり。

三上於菟吉　半吉

裏鬼門に座る月だから何事にも愼重の態度でなすべし。もし秋波を送る女人あらば、危險此上もなし、温順に家人にしたがふべし。

神近市子　半吉

ぼんやりしてゐては何もならぬ、大に準備して大いに戰ふの覺悟が肝心。

佐々木茂索　凶

惡女の深なさけと云ふ月なり。

廣津和郎　半凶

一喜一憂と云ふ月、勝負事に注意。

島崎藤村　吉

靜かに過去を見返へるにふさわしき月である。梅の香などかぐによろし。

永井荷風　凶

暗劍殺にかゝる故注意

前田河廣一郎　半吉

攻勢の態度をとつてはならぬ。

吉屋信子　半凶

極樂見物が地獄見物に變じる月で輕擧妄動してはならぬ。

中村武羅夫　吉

手酌でいつぱい、膳の前は意氣な銀杏返へし、せいいつぱいやるべし。

久米正雄　吉

妻君が子供をはらむ月です。

片岡鐵兵　吉

遠くの地より美しき女のたよりあり。

今井邦子　吉

家庭をよく守れば安全の月なり。

新居格　凶

何事も腹八分。

宇野千代　大吉

ランマンと咲いた櫻の下に立つてゐると云ふ月で、美しい戀人も思

ひのまゝ、青、紅、黄、色々の花をお咲かせなさい。お友達は多くつくらぬがよし。

**堀江 かど江　吉**

苦學で勉強してやつと大學を出たと云ふやうな月で樂になります。

**生田 春月　吉**

心浮雲の如し、身をあやまるもとなり。たゞし、時に酒をのみ時に女を愛するあそびはよし、人生は貯金局にあらず。

**志賀 直哉　大吉**

家内に喜び事續いてあり。

**長谷川 時雨　吉**

自分に重き荷物を脊負ひながら、なほ人の荷物まで脊負される月であるが、少しの無理も通る月故進みて可。

**加能 作次郎　吉**

相談事によい月、たゞし金の相談は駄目。

**里村 欣三　大吉**

性慾に關する事や、女の事に就いて心配事の生じやすい月それだけ注意すれば、何事も急行列車の如く進むべし。

**山田 清三郎　吉**

そろそろ今年あたりより又盛りかへす月で、けつして草臥もうけにはならない。

**藤澤 清造　半吉**

甘い話を申し込む後家さんに注意。

**岡田 三郎　凶**

心が弱いと女につけこまれます。女と見れば仇敵とばかり睨みかへすべし、赤いネクタイをすれば最もよし。

**野上 彌生子　半吉**

日輪の沈むを見て悲しむは早し、明日の東天に昇るがためと思へば一時の苦しみはたへればならぬ。

**黑島 傳治　凶**

花のしぼむ月、舊を守るべし。

**生田 花世　吉**

蝸牛の歩みはのろくとも、つひには富士へも登ると云ふ月。

**宇野 浩二　吉**

思ひのまゝにやるべし。沈香も焚けよ屁もひれ尻もつぼめよ。

**中條 百合子　吉**

破れる竹の如く思ふやうに行きます。

**佐藤 春夫　凶**

海の夢を見るやうになさい、するとこの月は吉に變じます。

**宮島 資夫　凶**

家賃がはらへぬと云ふ月ではないから御安心。

**直木 三十五　凶**

不用のものを買ひためてそんをする月。

**尾崎 士郎　半吉**

此月は火鉢をかゝえて蜜柑をしやぶるのが關の山なり。

**谷崎 潤一郎　吉**

上々吉、たゞし一人旅は凶。

**北川 千代　吉**

旦那さんに脊なかを流してもらへるやうなまことに圓滿な月です。

**瀧井 孝作　吉**

舊を守るべし、この月は女に愛される月である。

**今 東光　半凶**

此月はよつぽど注意しないと女になめられる月なり。

**川崎 長太郎　半吉**

年が變つたから、大いによからうとハメをはづしてはいけない。何かなくては無事に通れぬ月、特に色情をつゝしむがよろしい。

**林 房雄　吉**

女にさへこらなければ、行くところ可ならざるはなし、キンコン一番奮起するによい。水の流れるごとき運勢なり。

**深尾 須磨子　吉**

何事も、急いでやるべし。貴女に結婚を申し込む男あり。ドカンとひじ鐵砲をおあげになつた方がよろしい。

**金子 洋文　凶**

もうこれまでに油斷しきつては何事にも手おくれと云ふ月なり。

**藏原 惟人　大吉**

結婚の話がもちあつがたら御急ぎになつた方がよろしい、はちきれさうな幸運がふりかゝつてゐます

伊福部 敬子　半凶

何事にも少しつゝしんだ方がよい月です。

平林 たい子　吉

久しぶりに空をごらんなさい。

杉浦 みどり　凶

机の塵でもはらつて、心たひらにもつべし。

岡田 八千代　大吉

旦那さんからいゝ相談をうける月です。遠くより貴女に美しいプレゼントがあります。御意のまゝと云ふ月です。

飯田 豊二　半吉

商賣女に御注意！

萩原 恭次郎　大吉

溝の中からお月様が出たやうに、さわやかな月です。貴方の空想は半分は實現します。大勢の友人に呼びかけてごらんなさい。

林 芙美子　吉

今まで荒馬の背に乘つてゐたのが、ぱつたりとしずまつて、足をそろへるやうな月です。

網野 菊　半吉

遠い地に旅立ちますが、元氣を出して行くによい。

森本 巖夫　凶

財布がからになる月。

川端 康成　大吉

迷ふは禁物、思つたまゝやるべし、女の子をもうけます。

中河 與一　吉

進みすぎると、越中褌の外れがち、傳を守るによし。

與謝野 晶子　吉

少し位おやすみになつても、ちやんと仕事のはこばれる月です。

大井 さち子　凶

何事もけばけばしきはつゝしむべし、柿の種を桃の種に見てくれないと怒つてはいけません、つまらない男に一寸ひつかゝりますが、白粉でこく塗つておけばそんな事はわかりません。

加藤 一夫　吉

死んだのか生きてゐるのかつて、お友達がうはさをしてゐる月です。こゝにゐるよッ！つてお叫びなさい。

内藤 辰雄　大吉

貴方の御夫婦は大變相性がいゝので、奥さんの運がみんな貴方にふりかゝつて、今年からは、大變樂になれます。どんどんおかきなさい。

青野 季吉　凶

當分人參湯でもおのみにならなければ、神經衰弱で、この月はせつちんづめの形です。

木蘇 穀　吉

當分女にはもてませんが、此人は少年を可愛がるやうになるかも知れません。此月はどんなにハイカラな地へ行つても當分黒いネクタイをなさつた方が穩當でせう。

城 しづか　大吉

この人には水商賣はむきませんが何でもこの月までやりとほせば、福運がむいて來ます。

加藤 武雄　吉

海邊の方へでもポカポカと子供さんを連れて少し旅行なさつた方がよろしい。あんまりおかきになると、病氣になりますよ。

高群 逸枝　凶

どうもいくら見かへしても、シャボン玉がはぢけた形です。

小寺 菊子　吉

お正月ですから少し旦那さんとのんびり内輪の話でもなさつたら。

山川 菊榮　吉

此月も御仕事でせいいつぱい。

安成 二郎　半吉

此月に變なむらきを出すと、一年中ひつかゝりが出來ます。どうもいゝ女が目について困る月ですから無理もありません。

室生 犀生　凶

ひなたぼつこして、脊筋のゆれるのを見ながら、パッチンパッチン爪を切つてゐらつしやるが、此月は大變忙がしい月で一寸油斷してると、くひちがひになります。

近藤 經一　凶

少し落ちついて御らんになつたら。

眞杉 靜枝　吉

何かにつけてわずらはしい月ですがすべてすらすらと運びませう。

吉井勇　吉
正月はどこでも呑氣なものです。一度町でモダーンガールを見てごらんなさい。又その樣な慾をおつくりになるやうになります。ふところが一寸寒い月です。

鷹野つぎ　吉
舊を守るによし。

藤森淳三　凶
何やかとものの入りでふところの淋しい月。

近松秋江　凶
お炬燵にでもあたつて、過去をふりかへつて見るによい月です。色色と自分の穴が見えます。氣もちを大きくもつ事が肝要。

西條八十　凶
今年は方向を變へてインドの方へでも行かれては、少し世間では飽き加げんになつてをります。

若杉鳥子　吉
噂も七十五日、此月はお家でのこのこと脊のびでもなさつては…。

柳原白蓮　吉
お體にさへ注意なされればいゝ月です。

田山花袋　大吉
いゝもらひものがあります。

長田幹彦　吉
お天氣が惡くても、いつも傘の用意がしてあるから大丈夫でせう。

平塚雷鳥　吉
溫室咲きの色々な匂ひこぼれた花をおくられる月です。貴女の強さが益々發揮されます。

樺山千代　半吉
うしろをふりかへつてはいけません。

久保田萬太郎　吉
うつとしい時には、正月ですから、淺草の八木節でもきゝに云つてごらんなさい。よく笑ふとよくやせるさうです。何事も平和な月です。

菅忠雄　大吉
女の人から手紙が來たつて、喜んでみんなに見せてはいけません。その人は大變はにかみやです。一寸皆におごつてもいゝ月です。もちろん財布がからになるまで、お金もはいるし女も出來るし、秋晴れのやうな運勢ですもの――。

佐々木俊郎　大吉
肩をポンと友達に叩かれて、イヤナニネつて云ひながら、神樂坂あたりを一寸位おごつてもいゝ月です。胸におぼえがあるから…。

北村兼子　半凶
此月さへぢつとしておれば月の末頃からよくなります。一寸人にゴカイされる月です。

中田信子　吉
御主人のおみやげはきつと貴女の好なものです。

米澤順子　凶
机にさへ向つていらつしやれば無難な月です。

望月百合子　吉
何かお友達が仕事をもつて來たら元氣を出しておやりなさい。

江口渙　吉
山間を流れる水も、末は大河に行きます。元氣を出す事です。一番むづかしい月です。

中村吉藏　半吉
もすこし前の方へおすゝみになりましては――。

木村毅　大吉
どうして大變いゝ月です。色々失敗しますが、かへつて、それを愛されます。テンシンランマンがなによりです。
女が出來ますが、やぼな女ですからおよしになつた方がいゝでせう。

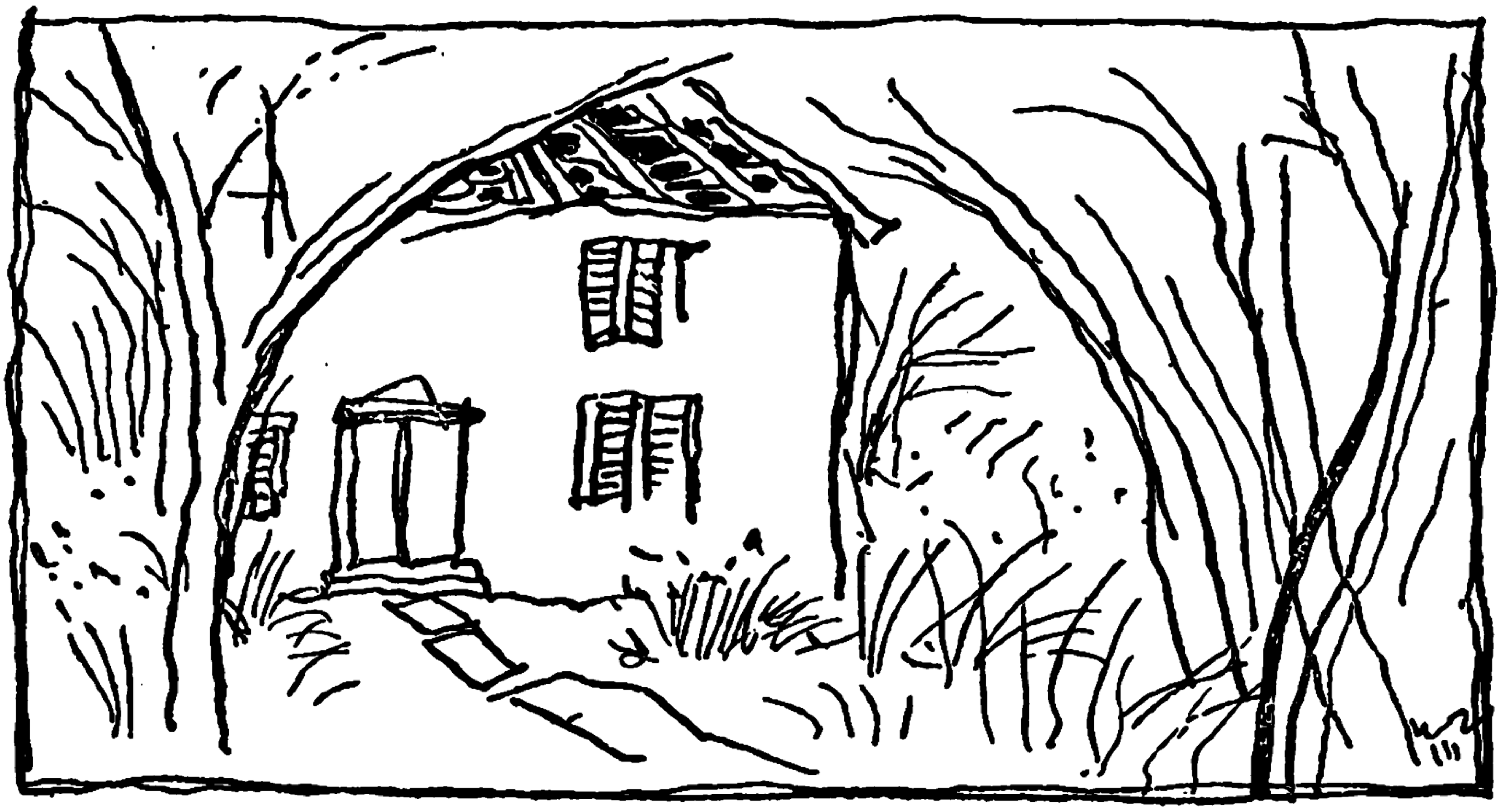
原阿佐緒　凶
ペシャンコに、何もかもが崩れてしまふ月です。

松井綠子　吉
思ふように運びます。たゞし、戀愛に身を燒くやうな事があります。進みすぎてはよろしくありません。

山本有三　吉
爭ひ事のある月ですが、末頃よりよくなりませう。

村山知義　吉
列車に乘りおくれたかたちです。あとの列車まで時間があると云つて、遊んでてはいけません。

宮地嘉六　吉
昔の好な女に、ふと道で逢へるやうな月です。



# 蒼ざめたる家

宇野千代

1

この村に住みつくやうになつてから、直きにもう八年にもなるのです。それだのに私はときどき地代の催促に遣つて來る地主の家の嫁さんか、それからときどき躑躅の挿し芽を貰ひに來たり、ときどきは松葉牡丹のこぼれを植ゑに來たりする植木屋の爺さんかのほかには村の誰とも知り合ではありません。

良人がゐなくなつてからは私はもう長い間病氣の母と二人きりで暮してゐます。どのやうな生活にも人は慣て馴れて了ふものであります。良人の母であるこの母さへも、いまは私と生れ乍らの母と娘とででもあるかのやうに、二人にだけ許された平穏の中に暮してゐます、寢床の中に坐つたきりで、手慰みのお人形を作り乍ら、そしてそのお人形の縮子でこさへたオカッパの中のほうづきほども大きくはない眞つ白なきれの顔に、こまこまと眼鼻だちを描き乍ら、「どの人形もわたしの顔のやうに片びつこに描けて了ふ。」と。さう言ふ母は長い間の病氣から、誰もさうとは氣の附かぬ間に、兩方の眉と眼とが少しづつ少しづ

つ片びつこになつたのです。母の部屋の明るい窓には、このやうな人形が坐つたり寢轉んだり立つたりして、それは數限りもなくひつそりと目白押しに列んでゐます。若しもふいにこの窓の間から顏を見せるであらうかも知れない彼女の息子を彼女は待つてゐるのでもありませうか。とは言へ、私たちはどちらからもそのやうな話をしたことはありません。二人とも何時かはその男が歸つて來るであらうことを知つてゐたからであります。

だが私たちの生活はもはや影のやうなものでありました。私は良人の殘して行つた足跡を拾ふやうにして、この村の丘から丘へのろい勾配に從ひ乍ら、丁度むかし彼がしたであらうのと同じやうな或るまばらなとりとめのない注意を邊りの風物に拂ひ乍ら、散歩するのであります。

朝と晩と、私はきまつたやうに歩きました。私の後には私の影とそれから仔犬のフリッツ――この犬ももう生れてから八年にはなるのです。この村に越して間もなく、私の良人はこの仔犬をどこからか抱いて歸つて來ました。そのときから、犬は少しも大きくはなりません。多分テリアの遠い雜種だと思はれるこの小さな犬は、多分八才以上のお爺さんであらうのに、少し許り淚を溜めた可愛らしい眼をして、いつまでもいつまでも仔犬のままでありました。――とがちろちろと隨いて來ます。私はときどき立ち留つて、用もないのにフリッツを呼びました。犬が近づくと私は道の眞中にしやがみました。

「フリ」

私は犬を撫で乍ら言ふのです。

「お前は小屋をこさへて貰つて、寢るところが出來て、ほんとに宜かつたねえ。」

このやうなことを言ふのです。私はもうこの同じことを何べん言ふことでありませう。ずつと以前私たちは、私と私の良人とはそれは人の眼にも羨まれるほどに仲睦じく暮してゐました。私たちはだから長い間、ただ二人だけのことしか考へず、だから長い間この仔犬のことも忘れてゐました。犬はときどき喰べものを貰ひませんでした。それから長い間寢るところもなしで、私たちの家の丘の上の小笹の生へた叢の中に寢てゐました。夜が更けて誰かの遠い跫音でも聞えると、フリはこの叢の中でけたたましく鳴き乍ら、ざざざざと小笹を搔き分ける音をさせ乍ら疾風のやうに跫音のする方へ馳け出して行きました。その叢のざざざと言ふ音は、私たちのベッドのある窓のところまで聞えました。

「ああ、フリの寢床をつくらなくてはね、」

と、私たちは思ひ出したやうに言ひましたが、それはたうとう、良人がどこかへ行つて了つて、私だけがこの家に殘り、あんまりの所在なさに、丁度母がつくる手慰みの人形でもあるやうな、ほんのビールの空箱を打ちつけてやつと拵へて了ふまでは、そのままになつてゐたのです。

或る雨の降る午後、その寢床は出來ました。フリ、フリと、私は續けざまに呼びました。これがお前の寢床だよ。さあ少し首を曲げて、そうつと頭の方から這入つてごらん。――けれどもフリッツは、疑ひ深く私の顏を見上げました。そして少しづつ後すさりを始めました。私の心には或る憐れつぽい微かな腹立たしさがこみ上げて來ました。私は殘酷な氣持になつて、その犬の痩せた首のまはりに、いつの間にか番號札もとれたまま、ただ針金だけが殘つてゐる安つぽい首輪に手をかけて、ぐいぐいと引張りました。犬までが、長い間の不仕合せにふいに來た仕合せを信じない。私の眼には涙のやうなものが浮びました。

だが、じきに私は手を離しました。そして遠くから見てゐました。すると、フリッツはやつとそれが自分の寢床だと言ふことを了解しました。そして、何となく恥しさうに首を曲げて、尻尾を卷くやうにしてそうつと這入つて行きました。――私のところからは尻尾のさきが少し見えました。――このやうにして、フリッツは彼の寢床を持ちました。いまでは、まるでその寢床よりほかにはどこにも寢たことがないやうな顏をして、のつそりと顏を出すやうになりました。

「フリ！　お前は寢床が出來て」

私はそれを言ひ乍ら、この氣紛れな主人に隨いて來るバカな仔犬と一緒に自分をも憐れみ乍ら、遠くから來る空虛に向つて話をするのでありました、氣がついて見ると、私はそつくりそのまま、むかし良人が好きこのんで歩いてゐたその同じ道ばかり歩いてゐるのでありました。或るときは私も彼と肩を列べて歩いたことがありました。私たちはその道を、遠い村外れの市場から、泥のついたままの大根を抱へて歸りました。また或るときは、二人とはない敵同志のやうに、も早や言ひ爭ふことにも疲れ果てて呼吸をはづませ乍ら歩きました。そんなときの私たちの憎惡に充ちたぎらぎらと光る眼に映つたのは、丘の下の埋立の、そこらからは丁度海の底のやうに低く見えるところに無數に建ち列んでゐる小さな家家のあかりの點いた窓でありました。あれらの無數な家の中にも、どの家にもどの家にも一人の男と一人の女とが住んで居て、同じやうにいがみ合ひ憎み合つてゐるのであらうか。　私たちはそのやうなことを考へ乍ら歩いたこともありました。け

れどもいまになつては、その激しかつた惜しみさへ、何と懷しく哀しいことでありませう。私はそのやうなことを考へ乍ら、一つの丘まで出て來ました。どの道にも、良人のつけておいた名前がありました。その丘の上はいつもいつも美しい栗色の濡れたやうな土が新しく掘り返されてゐて、その土の間には、いま生へたばかりのやうに眞つ靑な素晴しくすくすくと伸び上つた葱が一面に縫ひつけてありました。それは四季を通じて殆んど同じ光景でありました。恐らくそこはその下の低い地面より百尺とは高くはありますまい。それだのに、そのこもとこんもりした美しい勾配のために、何と見渡す限り葱ばかりのその素晴しい畑の上に、すぐに紺靑の空がつながつて、何ものも眼をさへぎるものがないものですから、良人はこの丘の上のことを「葱の地平線」と言ひました、夜になるとまことに、この葱の地平線から、噓のやうにまんまるい月の上つて來るのをさへ見たことがありました。この丘を貫いて、一本の新しい街道が、村から次の村までをつなぎました。靑い草がいつの間にか人の足の下でなぎ倒され、やがて枯れました。石ころが敷かれました。荷車が通りました。それからたうとう新しい電信柱がたてられました。そのこもごもとこんもりした勾配に從つて、一本また一本白い瀨戶物をおいた柱のてつぺんから步くにつれて次第に次第に、まつ黑なコールタールを塗つた柱の根もとまで、まるで幻燈のつづきのやうに現はれて來るのです。だから若し、この丘の道を通りかかつて、丘の下から遣つて來る誰か人と逢ふならば、はじめ帽子だけが見え、顏が見え、帶が見え、やがて、一人の人になつて登場して來るものですから、

「ああ、これは地球の道だよ。」

と或るときのこと良人はそのやうなことを言ひました。そら、私たちは子供のとき學校で敎はつたではありませんか。地球は圓いものだと言ふことの說明に、豆のやうに小さな人が或る地平線に立つてゐて、その地球の下の方からやつて來る船が、はじめは煙だけが見え、帆柱が見え、やがてのことに船體が見えて來る、あの感じにそつくりなのでありました。それは人に「驚き」を敎へる道でありました。ふいに思ひもかけず人が來る、ああ、これが若し、その古い家へ歸らうとする私の良人でありましたならば。

私はけれどもそのやうなことを、さうたびたびは考へませんでした。それは殆んど、いまのこの私にとつて、妄想に近いものでありました。それにこの妄想の中には、或る一つの冷酷なもの、たとへ若し歸つて來るであらうとしても、またもう一度あの同じ生活が戾つて來るのに過ぎないではないか！　さう言ふ考へがひそんでゐて、鞭のやうに鋭く私の心を打つからでありました。さうです。人はもう一度後へひき返すことは出來ません。前へ前へ、それはどのやうな苦しさであらうとも前へ進まなければなりません。

私はそのやうなことをまで考へ耽り乍ら丘の下へ下りて行きました。それからその下の小さな雜木林の蔭の、通りからは枯れ草の蔭に隱れて、よくは見えない、一本のくちかかつた大きな切株の上に私は腰を下しました。ちようどこのやうなことを私の良人もしたのであります。そこに腰を下すと、いやでも私の眼の前には一つの蒼ざめた家が見えます。良人もその家を見ることが好きでした。赤いアメリカ瓦の低い重さうな屋根が、ほどよく繁つたいくらかは暗いやうな椎の木の植込の中に埋つて、その表に向いた僅かな數の窓までも隱すやうに、一面に蔓のからんだ古い家。以前にはこの庭の低い柵の一ところに、めつたには開いてゐることのない枝折戸があつて、何か古びた横文字の標札がかかつてゐましたが、それは誰の眼にも認めないほどうすくぼやけてゐました。私たちは長い間氣もつかずにゐたのでした。それほどにこの家は人の注意の外にあつて、誰をもむりに振り向かせようとはしないのに、或るときふと、私と私の良人とはやはりこの同じ切株に腰を下してゐて、何か微かな、キ、キ、キ、といふやうな音を聞きました。それは夕暮に近いときでありましたが。まだ灯りのない、(一體、このやうな暗い窓にも灯りがつくものでありませうか。)その家の一つの窓があけられたのを見たのであります。それは珍しいことでありました。窓にはいつも重い布の暗いカーテンがかけてありました。そのカーテンの中から、一人の背の高い男の姿が見えたのでありました。高いそれは殆んどその窓の上の棧のところにまで屆いて見えるその黑い顏が、さうです。その男はきつと印度のアリア族かに屬する種族であるに違ひありません。その暗い部屋の中を背景にしてけれども何と端麗なその黑い横顏が、その黑さのために或る暗鬱な愁を含んでぼんやりと窓のそとを見てゐるではありませんか。丁度あの葱の地平線から送られて來る、微かな黄の名殘りのために、私たちのところからはそのやうにもはつきりと見えたのでありました。

「…………」

何か、微かに、窓のそとへ向いて呼んでゐるやうな聲がしたと思ひましたが、ぢきに窓は閉ざされました。私たちは再び、何のもの音もききませんでした。私と私の良人とはまた丘の上へ歩き出しました。あれは、誰の住む家であらう!

それは或る霧の深い夜のことでありました。私たちはその家の前まで來て、ふいに、その家の軒に提燈でもついてゐるやうなぼんやりとした灯りの塊りを見たのでありました。私たちは立ち留りました。するとその灯りの塊りの中から、若い女のはじけるやうな笑ひ聲が聞えて來るではありませんか。近づいて見るとどの窓もどの窓もみな開け放たれてありました。窓のそとの深い霧は、その窓のところからだけはじき返されたやうに遠のいてゐたのでありませうか。私たちははつきりと、その灯りの塊りは明るいシヤンデリアの灯であること、その

高ひ笑ひ聲の主は、黒い髪をオカッパにした、赤い毛絲のジャケツを着た若い娘であること、そんなことまで見たのであります。この暗い家の中に、ふいに來た不調和は、強く私たちを動かしました。何ごとが起つたのか！　それは甚しい變りようでありました。或は朝は高いピアノの音につれて、朗らかな唱ひ聲が聞えました。だが、或る朝私ひとりで見たあのアフリカ族の黒い顏には、以前と少しも變らない暗鬱な憂愁がこびりついて居りました。ときどきはその豹のやうな長い體を所在なく、一人で庭を歩いてゐるのを見たこともあります。ここにも、最早や牢獄が始つたのであらうか。

だが、このよその牢獄よりも、私たち、私と私の良人との作つてゐた牢獄が、軈てのことに破壞されるときが來ました。私の良人は私を殘してどこかへ行つて了ひました。それから間もなく、この丘の下の蒼ざめた家からも人の姿が見えなくなりました。印度人もオカッパの娘もどこかへ越して行つたのであります。低い柵の枝折戶は全く閉ざされて了ひました。はがされた標札は長い間、道ばたの石ころの上に轉がつてゐました。軈てその上に靑い草が生へ、庭の椎の木は繁るに任せてありました。誰ももうこの家へは新しく住まないのでありませうか。——

「フリ！　フリ！」

私は無暗に犬を呼び立てました。呼ばれると直ぐにこのバカの犬は殆んど機械的な奴隷の素速さをもつて馳けて來ます。私はその瘦せた首を撫でてやりました、振りそそぐ陽の中に、何と私の枯木のやうに瘦せた手が、それでも無數の細かい皺の中に微かに黃色い脂肪を浮かばせ乍ら光つてゐるのを眺めまして、期せずして私の眼にはこの私の手と列んであの深い霧の夜見た、オカッパ娘の白いむつちりと肥つた腕が浮びましだ。ぼんやりした、けれども刺すやうな苦痛が、それは嫉妬といふ感情に似た一つの想念となつて私の心を掠めるのでありました。だがどのやうな習慣からも、人は逃れがたいものを感じます。私はこれらの私の散步の中の數多い習慣の最後の一つをまで忘れずに拾ひ乍ら、丘から丘へと步き廻るのであります。

## 2

何と言ふ長い前置きを私はしたのでありませうか。或る晴れた秋の暮れ方のことであります。私はやはり私の仔犬をつれて葱の地平線まで來かかりました、すると、その日暮れの仄明るい空の中から浮き出すやうに、一つ、二つ、三つ、五つと黑い影繪のやうになつた一群の

男たちが、あの地球の道を上つて來るではありませんか。それは珍しいことでありました。誰も、道を急ぐほどの者はここを通りはしませんでした。而もそのやうにおほぜい。あー　危ふく私は聲を立てるところでありました。みんな揃つてゐるのです。むかし、私と私の良人とが仲睦じく暮してゐたころに私の家へ集つて來た良人の友だちたちが、ＡもＢもＣもＤもＥまでもみんな揃つてゐるのです。私は女學生のやうに高く片手をあげました。みなさん、お久しう、私はもうこんなに落付いて暮してゐるのですよ。私はさう言ひたかつたのです。彼等はもう長い間、良人がゐなくなつてのち私を見ることを辛がつて、まるで私の家へは寄りつかなくなつてゐたのですから。――だがその一番しんがりに、嘯くやうに頭をあげて、痩せた肩を聳やかし、いくらか片足を曳くやうにして歩いて來るあの姿は、ああ、やつぱりあの男でした。その刺すやうな鋭い眼がまつ直ぐに私を見ました。私はもう歩いてはゐませんでした。あの男が戻つて來た！

「おうい」

私の上げた手に應へて、殆んど、三本、五本、六本の手が上りました。だがあの男はやはり肩を聳やかし、まつ直ぐに私を見ました。騒がしい、けれども空虚な感情が私の胸を貫いて走りました。私の頬にはぎこちない微笑が上りました。ふいに眼がしらが霞んで、ぽたぽたと涙が溢れ出たのであります。

それは一つの感動すべき光景でありました。その光景を救ふために、或る一人はおどけた身振りをし乍ら、近づいて私の肩を叩きました

「おくさん、野良息子が歸つて來ましたよ。僕たちはみんなで、この男をあの町の停車場のベンチの上で拾つたんですよ。」

「フリ！　フリ」

と或る一人は昔馴染の犬を呼びました。「おや、こいつは、尻尾も振りやがらねえ。櫻井君、――やれ、やれ君あフリにまで忘れられて了つたじやあるまいか。」

だが、誰もこれに續いて笑はうとするものはありませんでした。私は涙の中から昔私の良人であつた男の蒼ざめた頬を見ました。それから、痩せて鋭くなつたその高い鼻と、落ち窪んだ眼窩の中に動かず澄み透つてゐる美しい瞳とを見て、この人の心を稱ふばかりの憔悴にも拘らず、私は私と離れてゐた彼の幾月かの中に、彼が送つて來たであらうよき生活を信じないではゐられませんでした。私はこの男を見失つてはゐませんでした。さうして私はこの男を信じました。そして私たちは一語をも語ることなしにお互ひに了解しあつてゐるもののあることを悟つたのであります。

みんなは晝の地平線の上に立ちました。そこでみんなは、丁度營舍から戻つて來た若い兵卒をその若い妻に手渡したのでもあらうやうに或る裝うた自然さをもつてわいわいと騷ぎ乍ら、「この男」は自分の古い家へ歸る積りらしく町の停車場にぼんやりと立つてゐたのを、偶然に來合せたこの連中が見つけ出し、ここまで送つて來たところだ、とそのやうな説明をしたあとで、

「如何だい、みんな、もう一ぺんひき返して、一晩底ぬけに飲まないか。ねえ、おくさん。フリにも久し振りでまたコロッケを、おやあいつ、どこかへ行つちまやがつた」

恐らく、自分の寢床へでも歸つて了つたのであらうその犬を探すことなしに、私たちは出かけました。これと同じやうなことはよく以前にもありました。あのころからこの日までの中斷された記憶さへも早や私を苦しめはしませんでした。この平穩な有樣はそのまま續いてゐたやうに思はれました。私はうす暗い空氣の中に良人の跫音を聞きました。良人の呼吸をききました。私の心には激しい歡喜の代りに、長い間の病氣から解放されたもののやうな靜かな仕合せな氣持がゆるく流れました。さうです。私たちは、少くとも私の良人はほんたうに病人でありました。私は長い氣遣はしい、それは丁度病氣の治りかけてゐる息子を見詰めてゐる母親のやうな眼ざしで良人の顏を見詰めました。どこの酒場ででも私たちは一番遠くの椅子へ向ひ合はせに坐つたからであります。

酒場から酒場へ、私たちはみんなの持つてゐる財布がすつかり空になつて了ふまで歩きました。そして最後の酒場から往來へ出たときにはすつかり夜が更けて了つて、町には人通りもありませんでした。そこからは裸になつて見えるレールの敷いた土手を、終電車に近い電車が呻り乍ら過ぎて行くのが見えました。直ぐそこのおでん屋の角を曲れば停車場が見えたのです。それだのに誰も、その停車場へは行かうとせず、どんどん村の丘の方へ上つて行きました。私たち私と私の良人とはたゞ二人だけになつて、こんな場合のどんな男と女とでもが醸し出すであらうやうな愚かな悲劇の場面を少しでもあとに伸ばさうとそればかりを惧れてでもゐるやうに、この大ぜいの醉つ拂ひたちの、或る粗野な親愛から逃れようとはしませんでした。

みんなはまた、あの地球の道へさしかかるところまで來ました。すると或る一人が立留つて、あの雜木林の蔭の赤い屋根の家へ這入つて見ようではないかと言ひ出したのであります。借家の札は立ててないが、誰か適當な（さうです。このやうな家にと言ふものは誰でもが住めると言ふ譯には行きません。）住み手があれば借す積りで、誰にでも這入つて見ることが出來るやうに表の扉もあけてある。その中には一切の家具がそのまゝにおいてあつて、それで家賃は五十圓だ。その男はつい昨日、それを人から聞かされて氣紛れに來て見る積りでゐたのだ

がと、そのやうなことまで言ひそへたのであります。

この話の話し出されたとき、私は殆んど反射的に良人の顔を見返しました。暗いただ一つきりの軒燈が、椎の木の繁みを通してうすぼんやりと、微かな青い光りを投げてをりました。私はこの光の中に晒された良人の蒼ざめた頰の面を電流のやうに掠めた一つの感情を見たやうな氣がしたのであります。恐らく彼もこの私と同じやうに、この長い月日の間ただ外からだけ眺めてゐた家の中へ、いまは何のはばかりもなく這入つて行かれると言ふことに對する微かな好奇心に混つて私かに、私たちだけの馴染であつた家が、まるで晒しものにでもなるやうな、何のゆかりもない他の者たちにまで踏み込まれると言ふことに對する微かなもの惜しみの心と、それからもう一つは、これらの考へとはまるで別に、かつては彼もまた私も平安な氣持の中に同じ切株の上に腰を下してこの同じ家を眺めたのだと言ふ回想のほろ苦さとが、同時に來たからに違ひありませんでした。ほかの大勢の者たちはこの見馴れない空き家に、こんなに夜遅く這入つて見ると言ふことを茶目な子供らしい大仰さで騒ぎ立て乍らみんな直ぐに賛成したのであります。

みなはその白いペンキを塗つた低い木棚を跨いで越えました。私も私の良人も同じことをして越えました。一ぱいに蔓にからまれたポーチの前に立つたとき、一人のおどけた男がおどけた作り聲をして

「もしもし、お寢みですか、もしもし。」

と呼びました。

すると、その聲は奇妙な風にこだまして、あの地球の道を遠くまで辿り落ち、それからまた、思はぬところに返つて來ました。同じ男は指をあげて、玄關の小さなボタンを押しました。ジジジジと長く電鈴の鳴る音が奥の方に聞えました。それをきくと私たちはこの家の中にはほんたうにまだ誰かが住んでゐて、いまにも長いパジャマの裾を引き乍ら起きて出て來るのではあるまいかと思つたほどでありました。けれども、そのあとでは何のもの音も聞えません。その男はもう一度ボタンを押さうとしました。

「よせよせ。お化けが出るぜ」

どつとみんなが笑ひました。心には何か子供の世界の中にある鬼ケ島へでも來たやうな或る浮きうきとした氣持が浮びました。一番背の高い男が何かかけ聲のやうなことを言つて、扉のハンドルを廻しました。音もなく扉はあいて長い間人の住まない家の中の澱んだ空氣が流れ出ました。誰かがぱつとマッチを擂りました。その光りの中にすぐ玄關の片側に四つ五つ行儀よく列んだエボナイトのスキッチを見つけ

ると、ぺぺぺぺと音を立てて順序よくその一つ一つが押されました。ぱつぱつぱつと、それは遠い花火でもが上るやうに一つ一つの部屋に灯がともりました。われ勝ちにとみんなは中へ這入つて行きました。だが、これが家具つきの家？　どの部屋にも敷物のない裸の床の片側に申譯にさへも過ぎない貧しい家具が、それがために却つて言ひ難い荒廢を感じさせる、そのやうな整頓さをもつて押し遣られてありました。人々は大びらで這入つて來た泥棒のやうにみな足を踏み鳴らし、椅子や卓子をがたがたと言はせました。

「あ、ここにピアノがある。」

みんなその方へ集りました。それは貧しい廢兵院の廊下にでもあるやうな、恐しく古ぼけたものでした。けれども、あ、ここにピアノがある。みんなは宇頂天になつて、まるで太皷をでも叩くやうに上から鍵を叩きました。ぼん、ぼん、ぼん、――その音はしやぼん玉のやうにとび上つて、天井ではじけました。ぼん、ぼん、ぼん。

ふいにこのとき、私はいまだ眞夜中であることに氣がつきました。眞夜中にピアノが鳴る。――もしもこの音が、あの雜木林を越えた他の家家まで聞えたなら、そして、この空き家の中にふいにともつた灯りがその家家から見えたなら――私にはそれらの家家の窓がこちらへ向いて開かれる音を聞いたやうな氣がしました。

「およしなさいよ。そんなに叩くとお化けが出てよ。」

だが、わは、わは、と笑ひ聲ばかりで答へて、誰もその惡戲をやめようとはしませんでした。私はこの醉つ拂ひどもにさからはないために、そうつと一人でほかの部屋へ退きました。ピアノのある廣間から廊下へ出て玄關をぬけるとつき當りに、洗面所、風呂場、臺所、女中部屋とそれでも型どほりの設備があるらしいのです。私は仕方なくそれらを見て廻りました。するとその洗面所の横の方にまだ一つの部屋があるらしいのに氣がつきました。閉じきりらしいカーテンが黑く垂れ下つてゐるのです。私はそれにそつと手をかけました。キ、キ、と微かな鐶の鳴る音がして、けれどもその眞つ暗な中に、丁度私のあけたカーテンの幅ほどに廣間の方からの灯りが、ぼんやりと流れ込みました。その瞬間、私ははつとして立ちすくみました。私はそこを立ち去らうとする一人の若い女の姿を、――さうです。私ははつきりと見たのでありました。かつてこの家の中であのアリア族の男と一緒に住つてゐたあのオカッパの美しい娘が、まるで、輕業の女のやうなだんだら編みの赤いジャケツを着た後姿を見せ乍ら、ふいに後の暗い中へ消えて見えなくなつて了つたのであります。その無關心な後姿の表情から私はその女が去つて了つたのは私がそのカーテンを開いて見たからではなくて、丁度そこを去らうとしてゐたところを、私が知らずに

開けて見たのでもあつたやうな、それどころか私のあけたことさへも氣がつかないやうな、そのやうな或る無心な平靜さを感じたのであります。

私は聲を立てようとはしませんでした。このやうなことのあり得る筈がありませうか。廣間ではまだピアノの騒ぎが續いてゐて、誰も私の驚愕に心付かうとする者はありませんでした。私は私の上についに來たこの夜の仕合せのために心が轉倒してでもゐたのでせうか。そのために、この暗い中に現れたカーテンの幅ほどのうす灯りにふいに現れた自分の影を、さう思ひ間違へたのでありませうか。この疑問を確めるために、私は急いでこの部屋のスヰッチを探しました。それから灯りをつけました。

灯りの中に浮んだのは、ほんの六疊とはない、三方とも窓のない陰氣な壁にかこまれた暗い寢部屋でありました。部屋の中一ぱいにただ一つの木製の寢台が、裸の藁蒲團の腹を見せてゐるばかりで、私の立つてゐた間じきりのカーテンのところを除いては、どこからも出這入りの口はないのです。私はやつぱり如何かしてゐたのでありませう。自分で自分の影におびえたのかも知れません。それは丁度、お化けの話などには恐れることのない子供が、けれどもいつの間にかお化けの影をこしらへてゐて、ふいに、心の不用意さで、その影を見る、そのやうなものであつたかも知れません、私は自分で言つた冗談の、そのお化けを自分でこしらへて見たのでした。さう思ふと私は何だか少うしおどけた氣持になりました。ほんたうにお化を見て了つたぞ。――私はさう獨り言を言ひました。それからその裸の寢台の上にひとりで腰をかけました。ふと見ると、私の足許に何か赤い紐が落ちてゐるのです。それは女の、赤いゴムの靴下止めでありました。

これは、さつきのお化けが落して行つたのだな、――私はまたおどけた氣持で獨り言を言ひました。恐らくそれはほんたうに、あの若いオカッパの娘が、引越しの荷物をすつかり出したあとで、ほつと一休みこの同じところへ腰を下し、あのむつちりと肥つた白い股の上にばちんと留めたものであらうのに、またうつかりと落して行つたものでもありませう。

だが、このおしまひの想像は、ふいに私の心の中に眠つてゐる或るものを呼び醒したのでありました。私の空想の中にはこの裸の寢臺の上に列んで横つてゐる一組の男女の姿態が浮んで來ました。あの西洋の風習の中の、薄い絹の靴下をぬぐ若い娘の有様が、ふいに刺すやうな呼吸苦しい感情を私の胸に湧かせました。それは長い間孤獨でゐた尼僧ででもが持つであらう嫉妬に似た感情でありましたので、私は、このどこから來たのか分らない恐しい妄想を追ひ拂ふために、われとわが兩手を掻き合せるやうにして立ち上りました。

廣間では、今度は、誰かが何か幼稚な歌曲を彈いてゐました。も早や私にはあの私の見たお化けの話をしてみんなを面白がらせようとす

る氣輕さはありませんでした。それにもう私たちはこの用もない空き家の中にあんまり長く居過ぎました。私は一時も早く、家の方へ歸りたくなつたのでありました。私はひとりで一先づ、さきに外へ出ました。それから

「みんな、もう出ていらつしやいよう。誰かに聞かれたら叱られるわよ。」

と、私は小さな女の子のやうにみんなを呼びました。暫くそこに立つてゐる中に、單調な惡戯に飽きた一人が出て來ました。軈てまた一人また一人とみんな外へ出て來ました。私は殆んどさきへ立つやうにして、どんどんと私の家の方へ歩いて行きました。

ものの二町も歩いたでせうか。ふいに一人が立留つて、

「おや、櫻井は？」

と言ひました。みんな立ち留りました。ほんたうに、この暗い道を歩いて來る連中の中には良人の姿は見えないではありませんか。如何してみんなは、いいえ私は、そのときになるまでそれに氣が附かなかつたのでありませうか。みんな、闇をすかして葱の地平線を振り返りました。暫くそこに立つたまま待つてゐましたが、その地球の道の底からは誰の帽子も現はれては來ませんでした。

すると、誰かが、ふふふふと忍び笑ひをするのが聞えました。

「僕、櫻井さんの草履を穿いて來ちやつたんだよ。あの男仲々出て來ないんだもの。」

「じやあ、君の履物は？」

と、他の一人が、その忍び笑ひに吊られ乍ら聞きました。

「緒が切れちやつてるのさ。」

「おやおや、そいつをあそこへ置いて來たのかい。ずるい奴だな、——奴さん、じやあ一人で困つてらあ。」

それは連中で一番若い、かつては私の良人から弟のやうに可愛がられてゐた男でした。そのやうな惡戯をすることが、却つて親愛を現はす方法だとでも言ふやうに甘へてゐるのであることが分りましたので、私はわざと白眼めるやうな眞似をして、

「駄目よ、早く取り換へに行つてらつしやい。あの男は、あれで誰か代りの履物を持つて來るまでは夜の明けるまで待つてるわ、それやあ不精なんですもの。」

「可厭だなあ。」

とその若い男は甘つたれて言ひました。それから二足三足歩き出し乍ら、「馬鹿見ちやつたなあ、」

とまた言ひました。

軈てその男の姿は丘の下へ消えて見えなくなつて了ひました。私たちはまた暫くそこに立つてゐましたが、氣の附かぬ間に夜更けの冷氣にあてられて、ひどく肩さきに寒さを感じました。そこで、どうせあとから來るだらうと言ふので、みんな一先づ私の家まで引上げて歸りました。

私は家の扉をあけました。それから、昔の習慣通りに、かつては私と私の良人との居間であつた部屋にみんなを通しました。ああこれは何と言ふ賑やかな豐かな光景でありませう。誰もゐなかつた部屋が、いまは灯りに溢れ、人に溢れ、そして談笑の聲に溢れるのです。

みんなは一つの火鉢を圍んで長い間話し合つてゐました。だが、良人もあとから行つた若い男も仲々歸つては來ませんでした。

「奴さんたち、好い氣になつて話なんぞしこんでるんかも知れないぜ。それとも、二人で古木の家へ行つたかな、バカバカしいぜ待つてるの、俺たちや兎に角一番電車で歸らうよ。」

おしまひに或る一人が云ひました。あの若い男は、この村の外れに住んでゐましたから、或ひは二人でその家へ行つて了つたものかも分りません。私は良人の古い習慣を思ひ出しました。ほんたうにそのやうなことは珍しくはありませんでした。氣紛れだと言ふよりも、何か浮世の人の持つべき欲望を少しも持たないやうにさへ見えるあの男は、これと言つてどうすべき心の定りと言ふものを知りませんでした。だから二人であの空家の中に殘つてゐる間に、ひよいと氣が變つて戻つて來ることを止めたのであらうかも知れません。或ひは、その始めからこの古い家へ歸つて來る氣は少しもなく、ただ偶然にみんなに逢ひ、曳き摺られるやうな氣持であそこまで來ただけであつたのかも知れません。――私の心には激しい悲哀の代りにまた靜かな諦めが生れました。さうなのです。このやうに幾月振りかで逢ひ乍ら一言も言葉を交さなかつた二人なのでありました。私は、このまま良人がどこかへ行つて了つたのであつたとしても、二人の間には何か言ひ難い了解のあることを知つてゐたのであります。

軈てみんなはもう一ぺん見て來ると言つて出かけました。私は一人で殘つて長い間待つてゐましたが、誰ひとり歸つては來ませんでしたので、あの地球の道でのみんなとの思ひがけない邂逅のときの呼びかけの言葉のやうに、私は心の中で、歸つて來ないみんなの方へ手をあげて、――みなさん、どうぞご心配なく、私はこんなに靜かな氣持で諦めてゐるのですもの、――と、さう言ひたい氣持でした。すると私

ひとりの寢臺のある部屋の中は、丁度その日の朝さうであつたのと同じやうな或る靜かな空氣に充されました。私はうとうとと眠り始めました。私の淺い眠りの中で、仔犬のフリッツが遠くへ向いて吠えてゐるのが聞えました。ああ、犬は戾つてゐるな、だが、如何して彼奴は、あの男を見忘れて了つたのか知ら、そんなことを思ひ乍ら私は眠つて了ひました。

淺い眠りだと思つたのに、私が眼を醒したのは陽が高く上つて殆んど午近いころでした。私の頭にはゆるく昨日の記憶が上つて來ました私は自分の寢てゐる側らに手を擴げました。居ない、良人はまだ歸つて來てゐませんでした。——このやうな、朝になつても寢床の中に良人の體を見出さないやうなこともそれは幾度かありました。以前には苦しかつたこのことにも、いつの間にか馴れて了つたのです。微かな落莫たる感情ののちに水のやうな諦めの心が湧きます。丁度その感情が古い習慣のやうに私の胸を通り拔けました。も早や私は良人を待たうとはしませんでした。却つて私はもう一度私の上に始まつたこの孤獨の中に自分の身をおくことの安易さを懷しいものにさへ感じました。

「お母さん、」

私は母の部屋へ這入つて行きました。秋の午の乏しい陽ざしを食り乍ら、母は寢床の上で餘念なくいつものやうにお人形をつくつてゐました。「ゆうべ、仁吉さんに逢つたんですのよ。」

だが、母はすぐには返辭もしようとはせずに、沈默つて私の顏を見上げました。私はまた續けて、「ほら、あの葱の植わつてゐる丘の下んとこでね、あの雜木林の蔭んとこの家でね、」

けれどもこの母が如何して、そんな丘や家のことなどを知つてゐるものでありませう。ここへ越して來たときにただ一度自動車で體を運ばれたきりで、母はその病氣のために一度も外へ出たことがありませんでした。私はその母によく分るやうに、昨夜の出來ごとを話して聞かせました。私と母とのこの幾月と言ふ生活の中で、どちらからも話し出されることのなかつた彼女の息子の話を、私は憑かれた者のやうな熱心さで語りました。私の頰には歪んだ微笑が上りました。私の眼はぎらぎらと輝きました。私にはそれが自分で分りました。

「じやあ昨夜は、みなさんがお前の部屋にいらしたんだつて、」

だが、母は私の話の間中、憐れむやうなまなざしでじつと私を見詰めてゐましたが、軈てゆつくりと言ひました。

「ええ、そりやあ長い間、みんなで待つてたんですよ。いろんな、そりあ賑やかなお話をしてね、」

「お前はどうかしてお出でなのじやあないかえ。私は昨夜は苦しくて、夜通し眠れなかつたんだよ。眠れない晚には尙更何でもよく聞える

それだのに、みなさんが這入つてらした樣子もきかなかつたし、お話聲くらゐ聞えさうなもんだけれどね。お前の氣のせいじやあないのかえ。何にも氣にしないで、もつと休んでゐた方が好いのではないかえ。疲れては不可ないよ。疲れが一番毒だからね。」

私は穴のあくほどにその母の顏を見ました。ああそのやうなことがあり得るだらうか。それでは、あれは、すつかりたゞ私ひとりきりの妄想であつたと言ふのか。――名狀しがたい恐怖の感情が私の頭から足の爪先までを走りました。このやうに平靜な諦めの中で、私は氣が狂つたのか。――私は悄然と自分の居間へ退きました。それからもう一度ベットの上へ横はらうとしたときに、ふと私は、私の着物の裾に夥しい數の薊じらみがくつついてゐるのを見たのであります。これはあの空き家の白いペンキ塗りの柵を越すときに、それからあの蓬々と繁るに任かせた前庭の草の中を跨いだときに附いたのでなくて何でせう。だが、私にはもうこの自分の判斷を信じる力はありませんでした私はその薊じらみの一つ一つを端念に取り除き乍ら暫くの間はうつけたやうにぼんやりして坐つてゐたのです。

「もしもし、」

そのとき誰かが窓のそとから私を呼びました。この庭の方へひらいてゐる低い大きな窓はどうかすると立關の替りになることがありました。私は殆んど終日その窓の側で暮してゐましたから、私はそんなときのいつもの癖のやうに庭の植込をすかして外を見ました。門のところには二三人の脚絆がけの人たちが、それからつい私の窓の近くにはこの村に駐在してゐる若い巡査が立つてゐたのであります。

「こちらは櫻井さんですね、」

私は窓をひらきました。何か、起るべきことがあるならこの窓の中へうけ入れよう、――微かにそのやうな心があつたのです。

「まことにお氣の毒ですが、どなたかご一緒に來て頂きたいのですが、實はあそこの赤い西洋館の中で、こちらのご主人が――」

あは！　あの男は死んで了つたのではあるまいか、――私の想像は正しかつたのです。あの家にはもうまへから新しい借り手が定つてゐたのです。そしてその新しい借り手は、偶然にもその朝の中に荷物を車に積んで越して來ました。手傳ひに來た人たちが、その荷物を運び込まうとすると、思ひがけなく奧の寢部屋のあの裸のままの寢臺の上に一人の男の横つてゐるのを見ました。もしもし、と、その男に手を觸れようとして、(私にはその指さきから傳つた氷のやうな冷たさが分りました。私はそれを聞き乍ら、われとわが手がしびれるのを感じました。)ふいに大聲を立てました。――いまこそ私は氣が狂はなければなりません。私はそれを昨夜から知つてゐたのではなかつたでせうか如何してそれを私が知らう。私ではない私の中の眼にも見えない何者かゞそれを知つてゐたのでした。

だが、私は少しも自分の心の騒がないのを不思議なことに思ひました。私はひどく落付いてゐたのです。そこで、この私たちの話し聲が母の部屋からも聞えるであらうことを惧れて、それからまた私がそとへ出て行くことを知られるであらうことをも惧れて、私はそんなときいつでもしたやうに、その低い窓からそうつと體をすべらせました。そのやうなことをする私を、門のそとに立つて待つてゐる人たちや若い巡査は沈默つて見てゐました。私は裸足のままで、そうつと芝生の上を歩き、それから裏庭の方へ廻つて庭下駄を探しあて、みんなのあとから從いて行きました。

もしもし、――私には私の前を歩いてゆくこの大勢の人たちに聞きたくてならないことがありました。――櫻井はどんな風な方法で死んでゐましたか。櫻井はひとりきりで死んでゐましたか。――

けれども私にはそれを言ひ出すことが恐しい。私たちはみんな一言も言はずに歩きました。私の眼には赤いゴムの靴下どめが浮びましたそれから、あの霧の夜、あの家の窓から見えたむつちりと肥つたまつ白な娘の腕が浮びました。いまになつて私は、むかし私と列んであの家の窓を見たときの、私の良人のぎらぎらと燃えるやうな眼の輝きを知りました。――いまこそ私は、昨夜あの寢室で見たあの娘の幻影を信じます。可哀さうなお前よ。たうとうお前は一人ぼつちになつて了つた。でも、しやんとして前を向いてお歩きよ。何も彼もみんな過ぎ去つて了ふからね。――私はわれとわが手で自分の體を抱くやうにして、人人の後からついて行きました。

――一九二八、一一、一二――



# 赤

中本たか子

やつと家内の用事を終へたので、しげは、三つになる末の機嫌を見計つて、仕事臺を取出した。彼女はこれから内職の一厘狀袋を貼るのだ。

鼻向ふの障子は頗る歴史的な色彩を持つて、浮世の荒風を紙一重で遮つてゐる。が、その棧の一枠毎に、浮世を展望するに都合の好い小窓を持つて冷然と控へてゐる。秋の陽が、この小窓から斜に幾筋も光の縞を投げ込んだ。

しげは仕事臺に向つて坐ると、癖のやうに頂度眼の高さに當る孔から路次の樣子を覗いて見た。上水の龍頭のあたりで子供が數人、何か饒舌りながら遊んでゐた。末のすぐ上の友も、その側で汚れた綿ネルのエプロンを當てゝ立つてゐた。しげはふつと深い息を吐くと、側の子供を振返つて仕事に手をつけた。末は母親の側で、鳴らない鈴を舐めて機嫌よく遊んでゐた。

はつと氣附いてしげが頭を擧げると、友の泣聲であつた。彼女は手を休めて、例の障子の孔から覗いて見た。友が兩手を顔に當て悲鳴をあげて家へ歸る後を、數人の腕白小僧が礫を投げつけてゐるのだ。彼女はかつと頭に上り來るものを感じて、急いで屋外へ出た。母親の姿を見た友は更に高く泣聲を打上げて、母親の手へ縋つた。しげは友を手で掩ひ乍ら、改めて眼前の腕白どもを睨みつけた。彼等は逃げようともせず、反對に彼女の方へ近づいた。しげの眼が強く彼等を睨むので手にした石をそつと落して、中で一番脊丈の伸びた洋服を着た子が、口を尖らせた。

「をばさん、友が惡いんだよ。僕が白犬にやらうとしたパンを、橫合からひつたくるんだもの。」

子供達を睨んでゐたしげの頰が脹らんで、彼女の眼の中が熱くなつて來た。彼女は腕白達へ頭を下げるのは厭だつた。さりとて友の爲に辯明する言葉はなかつた。

垢と埃で汚れた頰へ、涙が新しい道を附けてる蒼い子供を見ると、彼女は急に憤ろしくなつた。自分を見てまだ泣き續けてゐる友をぢつと眺めてゐたが、物も云はず、その平手を子供の頰へ見舞はせた。友はけたゝましく新たな泣聲を絞り立てて、火のつくやうに喚きたてた。

側に立つて、しげを取り圍んだ子供等は、口を空けてぽんやり彼女の樣子を眺めてゐた。しげは泣き叫ぶ友を抱へて、走るやうにして家へ連れ歸つた。上り框にぶつ倒れて聲低く慟哭してゐる友は、長く動かうともしなかつた。兄の泣聲で末も急に泣き出した。しげは末を抱いて友の側に腰を下し、的のない瞳を遠くの一點に預けてゐた。

友が、犬にやるパンを欲しがつた心は解る。彼の胃の腑は今朝食べた粥を完全に消化し、無聊に苦しんでゐるのであらう。併し、頑是ない友の欲望を滿す爲に、唯一片のパンを買つてやる金さへもない生活狀態だ。それだけにしげの心は苦しく、その苦しさのはけ口として先づ友へ憤りを發したのだ——

動かない彼女の頰を傳つて、冷いものが緩つくり流れて來た。

今宵も、兼作は醉ひどれて、朦朧とした濃霧の中を歸つて來た。表戶に突き當ると、彼はぐたりと其處へ崩れた。この音に飛出た妻のしげは、良人の樣子を眺めて暗い眉を顰めた。舌打ちし乍ら兼作の肩を打つた。

兼作の腰は容易に浮きさうになく、どろんとした眼で、眼前を遮る黑い個體を見究めようとした。

「何だ、こりあもう家へ來てたのか。」

彼はつるりと顏を撫でゝ、酒に腐つた息を吐き出した。しげは默つて、良人の手を引いて家の中へ引摺り込んだ。そして、彼の隱袋へ手を入れて、殘金を探した。彼女の手へ觸れたのは、僅かに三十五錢。日給一圓八十錢の殘金だ。彼女はそれをぢつと瞶めてゐたが、その視線を今度は良人の醉眼に射た。上り框へ腐つた鮭のやうに靑服の儘で倒れてゐる良人に憤怒と輕蔑を催すと、彼女は忽ち、その金を良人の顏へ投げつけた。

「何だね、これつぽち。お前さんにや、家のことが解らないのかい。」

不意な霰彈に打たれて、兼作は跳ね起きた。

「馬鹿ッ、やつたな！」

彼の眼は鈍く緊張して、妻の上に据つた。しげはその赤く爛れた眼に出遇ふと、瞬いて視線を反らした。そして、今にも頭上から降

つて來るであらう相手の鐵拳を待構へた。が、粂作は振り上げた拳を力なく落した。兩手を組んで頭の下へ敷き、ごろりと其處へ横たはつた。そして、妻の腹部の隆起した線をじろりと睨んだ。

しげは散らばつてゐる銅貨や銀貨を拾ひ集めると、力なく仕事臺の側へ行つて、先刻迄し續けてゐた狀袋を貼り出した。

少時、沈默が續いた。六疊一間にいぎたなく重り合つた五人の子供の寢息のみが規則正しく聞える。

しげにとつては、實際良人の醉態が毎日續くのが情なかつた。一日働いたゞけを皆飮んで來るので、家の者は三度の飯さへ滿足には通らないのだ。五人の子供の父親としては餘りに無考へ過ぎるではないか――彼女の頭に、まざ〱と今日友が子供に石を持つて追はれた情景が浮び上る。それに、又一つの生命が彼女の體内で新しく活動し出したのだ。この人は一體、家内の者をどんな目に遇はせやうと云ふ積りなんだらう――

粂作の發する酒臭い呼吸が室内に滿ちて來ると、まだ言ひ足りない憤懣が、もぞ〱と彼女の喉を擽つた。彼女は狀袋の臺を突き附けて、粂作の側へ寄つた。その兩手は早くも良人の胸倉を搖つた。相手は煩さげにその手を拂ひ除けて、座敷を一轉して向ふへ移つた。しげは尚も執拗にその後を追つて、又彼の胸倉を搖つた。

「手前には、俺が何故酒を飮むか、その氣持が分らねえんだな。」

粂作の手が扇に開いたと見ると、しげの背に降つて來た。涙を含んだしげの瞳が、切ない憤りで良人の額の下を睨めて動かなかつた。粂作は妻の態度を見ると尚數回平手を見舞はせた。彼の右手が妻の脊からやつと離れると、彼女はその場へ一枚の煎餅のやうにへたばつてゐた。

反抗もなく肩を波打たせてゐる妻を尻目にかけて、粂作は臺所へ走り込んだ。手探りに求めた土瓶を耳にあてた。瓶の底の冷笑を耳に知覺すると、突き上げた喉の上へとその口を傾けて行つた。

その翌日から、粂作は製材工場へ出なくなつた。それがやつと監督と爭つてその頭を毆つた爲だと知ると、しげは菓子折を持つて監督の家を訪づれた。勿論その菓子折は、彼女が嫁入る時持つて來た怪しい丸帶が代つたのである。

しげには良人の氣持が吞込めなかつた。彼の行爲が忽ち一家の者の上へ降つて來るのは餘りに明かだつたのに、何と向ふ見ずなことをして呉れたであらう――彼女は獨りで愚痴をこぼした。

監督の家では、監督はゐなかつた。彼の代りに出たのは、そばかすの多い一寸垢拔けのした女であつた。以前酌婦でもしたのではないか、としげは思つた。

監督の妻君は玄關の格子戸を八寸許り開いて、外に立つてゐる女を頭から爪先まで見下して調べた上、いやに警戒的な角度のある眼でしげを眺めた。しげは努めて親愛を見せる表情を、その瘦せて巧

く働かない筋肉に命じた。彼女の誇大に笑はうとする口の邊りの筋肉は泣いてゐるかのやうに見えた。

しげは、監督の妻の前に菓子折を差出して、吶り乍ら口を開いた。良人の罪を詫び、一家の困窮を述べ、更に良人の復職を嘆願した。監督の妻は眉を顰めてきいてゐたが、菓子折を抱へてその厚みと重みを檢べた後、ともかくも良人の歸宅した時に言つて上げよう、と云つた。しげは、そばかすの女を慇懃に三拜して、その家を出た。

家へ歸つて見ると、粂作はゐないで、子供達が五月蠅く泣いてゐた。刑事に引かれて行つた後なのだ。彼女は折角自分が企てたことが餘りにも早く徒勞に歸したので、上り框に腰かけた儘、茫然自失した。

虎の子のやうにして今迄かくまつて置いた丸帶が代つた菓子折を足を返して行つて取り戻したかつた。今迄堪へてゐた空腹が、一度に弛んで來た。

假令、日給をその儘酒に代へたとて、粂作のゐる生活は、まだ張り合のあるものだつたのに、彼が全然彼女の眼界から姿を沒してしまつて見ると、生活の中心を引き拔かれたやうだつた。彼女は氣を取直して家の中を眺めたが、毀れた豆腐のやうに、何處をどう處理して好いか解らなかつた。

やがて又、彼女は監督の家を訪れた。良人の罪が輕く、一日も早く釋放されんことを、監督の力に縋りたいと思つたので。だが、今度は、監督の家では立關拂ひを喰はせ、てんで顧みようともしなかつた。他分、彼等はかの丸帶の代つた菓子を平げた後であらう。

しげは、菓子折をやつたにしては、餘り情ない仕打だと齒軋りして歸つた。睽り、薄暮の地を踏んで歸る自分の足許を瞶めて、氣の違はないのを不思議に思つた。そして酒を飲んで氣持を紛らしてゐた良人の方が、まだ幸福だと思つた——

早速迫り來る生計の問題に、彼女ははたと困惑した。六人の口を養ふのは彼女一人の手にかゝつて來た。今迄やつてゐた一風狀袋を貼る內職では到底駄目だ。

そこで、上の方の子供は周旋屋に賴んで、子守奉公と丁稚に出した。下の方の子供は養子にやらうとしたが、誰も人の子を貰つて迄暮さうとするものはなかつた。彼女は三人の子を抱へて、新道の開さく工事へ出ることにした。新道は街の外へ四間幅を示して通ずるのである。

赤い蹴出しを見せた女達の仲に交つて、しげは、荒々しい勞働に終日從事した。彼女はかうすることによつて、一つには生計を立て、他には胎兒に與へる、變化を期待してゐるのである。この上一つの生命が殖えるのは、彼等の悲劇の渠を益々複雑にするより取柄のないものだ、としげは考へたのだ。

小春日和のよく磨いた硝子のやうに澄んだ空氣へ、日光が量的に

浸透してゐる。風は死んで、四邊の風景を壁畫のやうに動かないものとした。

半裸體やシャツ一枚になつた男達は、赭土にハンマーを揮つた。彼等の逞しい筋肉の上で、ハンマーの鋭い刄先が秋を削る。單純なメロデーの勞働歌が、彼等に神聖な魂の握手を與へた。

丘の中腹から掘り出す赭土をトロッコに滿載して、道路迄送り出したしげは、下腹が强直して立つてゐるのが苦しくなつて來た。で、柔い赭土の上へ縮つて轉んだ。胎兒の腹壁を蹴りつけるやうな運動を感ずると、堪え難い壓力が腹皮をしめつける。彼女は間歇的に起るこの苦痛に唇を咬み、兩手をそこへ當てゝじつと抑へてゐた。

「こら、どうしたんだ?」

霜降りの洋服へ黄色いゲートルを卷いた足がしげの肩にかゝつてゐた。監督だ。

「は……はい。一寸、お腹が痛むので。」

「戲談云ふな。怠けたら爲にならんぞ。」

監督は尙も足で、しげの肩を搖つた。しげは仕方なく起上つたが、前へ足を出す努力が臆腔であつた。彼女は眼前が昏んで、べとりと盛上つた土の上へ腰を落した。監督の足は彼女の臀部にしたゝかに加つた。

「さつさと行くんだ。まだ日が高いのに、何だつてさう愚圖附くんだ。」

兎のやうに摘み上げられたしげの身體は、空になつてゐるトロッコの邊りへ投げ出された。彼女はトロに攀ぢついて、緩つくりそれを押し上げて行つた。

異常な腹部の壓力が、彼女の身體に戰慄を齎した。連日の激動がこたへたのだ。彼女は眼を閉ぢてトロを押した。

次にトロが下る時、しげはその上へ寢てゐた。加速度に激しくなつたトロの勢は曲り角へさしかゝつた時、調節者のない爲に車體が少し左へ傾いたと見ると、しげの身體はトロから滑つて空間へ落葉のやうに浮いた。そして抛物線に從つて、崖下の稻田へ落ち込んだ。

トロは脫線した儘、數間先に走り過ぎて崖の上でとまつた。滿載した土を吐き出すと、痴呆の大口を開いたきり、稻田へ落ちた赭土を望んで動かうともしなかつた。

少時して、人々はトロが停つてゐるのを見て、やつとしげの墜落を識つた。

やがて、彼女は附近の枯草の原へ助け起された。やつと意識を恢復して眼を開いた時、秋の陽がじつと彼女の瞳孔を覗き込んでゐた。後頭部と臀部をしたゝかに打たれたらしく、霧が晴れるやうに徐々に痺れが解けると、痛みを訴へ出した。右手で土を壓して、起上らうとしたが、どうしても隨意筋が動かなかつた。彼女は眼を閉ぢて意識の消えて行くのを覺えた。

「おい、起きろ。起きられるだらう。」

靴がしげの肩を搖つた。

彼女は徐ろに上下の瞼を離した。

「起きて家に歸つて寢ろ。」

監督はさう云ふと、莨の煙を空へ吹き上げた。煙の向ふで秋の遠山が徐々に山襞の影を深めてゐる。

しげは起きて蹣跚きながら歩き出した。彼女の姿勢は一陣の微風が來ても、直ちに倒れさうであつた。

しげが寢床へ這入ると、腹部で胎兒が跳躍を始めた。絞るやうに、掻き廻すやうに。地上を求めて狂ふ胎兒の運動が、終夜彼女を呻らせた。

曉の脚が窓にほの白む頃、しげの月經は五ケ月目に開放された。紅潮の中に咲いた一片の肉塊が、愼ましく縮まつて、運命に流眄を送つてゐる。此の世に一つ悲劇の種が減つたのだ。誕生と墓場……開幕と幕切れ……。

赤の歌が始まつた——太陽の歌が始まつた。赤だ……

赤だ……

赤……

赤……

……

……

## 書かなかつたお詫び

平林たい子

私は所謂文士的氣質を持つて居りません。健康、或は病氣、立腹以外に、原因不明な感情の變化を來たして、「今日は書けさうだ」とか「けふは書けさうもない」とかよく言ふ、文士のデリケートな神經生活は私にはわかりません。

さういふ私が、この度だけは、ほんとうに「書けなかつた」んです。

たとへ一人でも、先月號の豫告を見て私の小説を讀む爲にこの雜誌をお買ひになつた方があつたとしたら、私は、ほんとうに何ともお詫びのしやうがありません。

私が書けなかつた原因は、私の逆上の爲です。この二三ケ月その爲になやんで來たんですが、氣候の變化で、十二月に入つてからは頭痛を覺えない日がないんです。耳の上のあたりが割れる樣に痛むのです。

それに、私にははじめての長編小説で、第一回目に於いてかなり準備と、過去からの飛躍が必要なのに、かういふ生理狀態では、とても覺來ないんです。お約束にそむいた事は幾重にもお許し下さい。

私が試みる長編小説に於いて、私が、もし私達の階級の意志にそむいてゐたとしたら——その時には私を責めて下さい。

今度だけは許して下さい。

一九二八年十二月一日夜

# 留置場

北山蘭子



森田ちか子

夜であつた。

眞夏でも、コンクリート建ての厳めしい留置所の深夜は、足の底がうすら寒いやうに感ぜられた。狹い廊下には天井の眞中に十六燭光の電燈が、薄暗い光を投げてゐた。

足下は暗かつた。そして穽の中へでも下りて行くやうな氣持であつた。

こつこつ、こつこつ、おきわを連れて來た刑事は持つてゐる扇子の要の方で厚い曇り硝子の扉をノックした。扉の曇硝子は中の明るい電燈の光りを受けてぼんやりと黄色であつた。中からは、コトン〱と、入口の方へ近づいて來るらしい重い靴音が鈍く聞えて來た。

がち、がち、がちやん！　金屬性の尖つた音響は、夜更けの空氣を異樣にふるはせてひゞいた。そして重さうな音をたて、扉はがらくと開けられた。

「おい、這入れ！」

おきわを連れて來た私服の刑事は、かう怒鳴つておきわの後を肩子で突きながら扉の中へ押し込むやうにした。

扉を開けたのは見慣れた看守の顏だつた。白い制服を着て、帽子を被つてゐた看守は、右手を帽子の縁まで上げて刑事に輕い目禮をした。そして再びガラくと扉を閉めて、大きな錠前に鍵をかけてからおきわの方へ向き直つた。

「こら、また來たのかッ！」

脊の高い、蒼い四角な顏をした看守は、脣を厚くして、恐ろしい目で睨んだ。おきわは四日前に二十九日をつとめて此處を出た許りだつた。おきわは默つて下を向いた。

留置所の中は入口から這入つて行くと、丁字型の廊下の眞中へ出るやうになつてゐた。そこに四角なテーブルがあつて、帳簿と硯とがおいてあつた。震災後に建てられたそこの警察はまだ新らしかつた。石造りの廊下に沿うて三疊づゝに仕切られた檻房が六つづつ並んでゐた。檻房の天井は高かつた。周圍は厚い板で仕切られて水色のペンキが天井まで塗られてゐた。高い小さい窓があつて、晝はそこから明るい光線がはいつた。窓からは靑空が見えた。廊下に向いた檻房の扉は、下の方は二寸も厚い木でつくられ上は太い鐵棒の格子の上を鐵條網で張り詰めて上から水色のペンキで塗つてあつた。扉の中央には黑い大きな錠前が魔物のやうにブラ下つてゐた。扉の下方には正方形の鐵板があつて、食事の時にはそこを開けて辨當を一つくく入れるやうになつてゐた。

おきわはテーブルの前に立ちながら前の檻房をみた。狹い三疊の檻房に男の連中が七八人も押しこめられて寢てゐた。おきわは震災の時の被服廠の燒跡を思ひ出した。それ程男達は狹い檻房の中で毛布も浴衣も體からすべらして折り重つて入り亂れて寢てゐた。寢苦しいうめきが聞えて來た。そこはこの世のドン底であつた。

おきわは帶を解かせられた。浴衣一枚になつた。看守は、おきわの後へ廻つて、櫛やたぼ留を拔いた。二十五錢で買つた黑塗りに貝細工をしたかうがいがテーブルの上に投り出された。看守はおきわの小さい蟇口を調べさした。三十八錢這入つてゐた。

看守は日本紙を細長く切つて筆で村井きわと書いた。先の方をかんじよりにして、すり切れた日和下駄、白に蠟色の鱗模樣のメリンスの半巾帶に一々紙片を結びつけた。頭のものや蟇口は、纏めて封筒に入れた。看守はそれを一々帳簿につけておきわの拇印を取つた。それから、毛布一枚に帶代りの細い紐を渡した。

おきわは看守から渡された黑い新モスの三尺紐で前を掻き合はせながら毛布を持つて看守の後について行つた。

第七の檻房は四日前までおきわの這入つてゐた檻房だつた。おきわは又そこへ入れられた。

「行儀よく寢ないとブン毆るぞ！」

看守は錠前に鍵を掛けながら外から怒鳴つた。室には三人這入つてゐた。二人の女はおきわの四日前の知り人だつた。女達は格別驚いた顏もしないでこの慌ただしい新入者を迎へた。おきわは無言で横になつた。看守は格子の外に立つて女達を見下ろしてゐた。

看守の靴音が向ふへ遠ざかると、二人の女達は眠さうな曇つた目をこすりながら頭を下げた。

「へまをやつたんだね」年老いた方が云つた。

「今日こそ何にもしないのに引つぱられたよ。おら、娑婆にゐるよりこの方がいゝや」おきわは吐き出すやうに云つた。

暫くしてからおきわは若い方に聞いた。

「新らしい人はやつぱり同じかね。」

「何だか違ふらしいわ」

「泥棒かね」

「さうでもないらしいよ」

「高等かね」

「私達とは違ふらしいよ。看守さんが社會の事〃つて云つてたよ。」

「へえ、すりでもないんだね。」

看守は二人のひそ／＼話をきゝつけた。不意に格子を力まかせに叩きつけて眠らなかつたら立たせるぞと大きい聲で怒鳴つた。

三人は默つて寢た。

然しおきわは眠れなかつた。背中を丸めて、膝を抱いて見たり、チリ紙でかんじよりをよつたり、鐵網の目を幾度も繰返して算へたり、靜かな檻房に響いて來る廊下の時計のカチカチを數へたり、而もそれすらお終にはまるで無感覺になつて行く恐ろしい退屈を思つた。町の電車の軌りや自轉車の鈴の音が微かに響いて來た。然しそれはコンクリートで仕切られてゐる別の世界の出來ごとであつた。

おきわはもう三十になつてゐた。震災後、淺草の場末のスキトン屋で一緒に食べ合はした名も知らないよその男が今の夫だつた。二人はお互に名も知らずに一緒になつてしまつた。

南千住は工場地帶だつた。瓦斯會社の巨大なタンクは勞働者達の目を驚かした。紡績工場や皮革工場や陸軍の鐵工所などの近代的な大工場が隅田河畔に密集して機關車のうなりと、ベルトの辷りの下に幾萬かの勞働者達は彼等の勞働力を吸ひ取られるのだ。

さうした大工場附近には勞働者も密集してきた。そして工場の裏門から一歩外へ出ると屋根の低い貧民窟が軒を並べてゐた。そこには失業者、淫賣婦、肺病と梅毒、あらゆる悲慘が生み出されてゐた。

おきわは、さうした町に住んでゐた。六十軒位並んだ長屋で三疊に二疊が一軒の家だつた。家賃は七圓五十錢であつた。おきわの夫は脚氣のために時々仕事を休んだ。そして雨が降ると砂利運びが出

來ないので休まねばならなかつた。脚氣が惡くなつて藥代が少しづゝ嵩んで來た。七圓五十錢の家賃も滞り勝ちになつた。

夫は働きに出掛けた日には自分だけ顏を赤くして歸つた。それをおきわに隱さう〳〵としてゐた。そんな日におきわの手に渡されるお金は四十錢位だつた。夫婦の食膳には黒くなつた澤庵の外に滅多に變つたお菜が上らなかつた。味噌を十錢買ふと五朝位汁が吸へた。

少したつと、おきわは貧民窟を出てうろうろ歩き廻るやうになつた。大橋の川向ふにも橋の手前の町々にも自由勞働者がうよ〳〵してゐた。おきわはそんな人達を相手にかせぎをする樣になつた。おきわが稼ぎ出すと、あべこべに夫は毎日仰向けになつて寢ころんで許りゐた。おきわの留守には時々二合德利が横になつて夫はだらしなく寢込んでゐることもあつた。夫婦は、二疊と三疊で睨め合ふやうになつた。

二十九日拘留される日の出來ごとであつた、夫はいつになく朝早く起きて飯が濟むと股引を穿いて腹掛をかけ始めた。藍の剝げた印絆天の塵を外の方へ向いてはたいた。雨は久しぶりに霽れて、裏隣りとの一尺位の空地には金蠅がブン〳〵飛んでゐた　細かい糠のやうな蚊がぬる〳〵した地面にもつれてゐた。何日か降りつゞいだ雨は、流れるところもなくて、溜つては腐つた。三疊の續きの緣側の便所はカッと日に照らされて臭かつた。おきわは食卓につく金蠅を團扇で追ひながら夫の身繕ひを内心嬉しく思つた。夫は無言のまゝ水が這入るゴムの破れ靴を穿いて出掛けた。

夕方の七時頃夫は歸つて來た。おきわは久しぶりに八十錢位持つて歸る其日の夫をあてにして、うどんでもゆでゝ食べやうと待つてゐた。然し夫は赤い顏をして歸つた。ゴム靴をぬいで上へあがるとゴロリ横になつたまゝ一文もおきわの前には出さなかつた。

「お前さん。お金をくんな。」

「金なんかあるもんけえ。」

「二十錢くんな。うどんでも食はなきや腹がすくよ。」

「うどんどこぢやねえや。藥も飲めねえぢやねえか。」

「そんなら何だつて酒なんか飲むんだよ。脚氣だつて、病氣なのはお前許りかよ。おらなんか腰を絞られるやうだ。女房に淫賣さして、それでも男かよ。」

「ぐづ〳〵云ふない。そんなにうどんが食ひたきや勝手に食つて來やがれ。」

おきわはかつとなつた。表のすり切れた疊の中から茶褐色の藁屑を夢中になつてむしり取つた。涙が熱く頰を傳つた。袖で涙を拭いて荒々しく外へ出た。

外は何となく重苦しい賑やかさだつた。そこいら邊は自轉車に乘つてゐる人も、歩く人も、鈴なりの北千住行きの電車の人も、大てい過勞と生活苦に喘へぐ暗い顏をした勞働者だつた。みんな泥まみれの股引に絆天を着てゐた。おきわは狂はしくうろ〳〵歩き出し

た。電車通りを横切つて大橋の方へ歩きながら夕食で滿員の酒場を次ぎ〳〵覗いてみた。どの酒場にも、白いシャツが、泥と油に汚れた勞働者が一杯だつた。一皿五錢の馬肉の煮付が勞働者達の何よりの御馳走であつた。勞働者達は鈍重な赤い顏をしてゐた。

おきわのお腹は舟のやうにぴたりと脊にくつついてゐた。ヂリヂリと干るやうに苦しかつた。お腹の底から波のやうに食慾がこみ上げて來た。

肉皿の臭は、おきわの身に泌み入るやうに感ぜられた。おきわはつばを飲み込みながらその邊を行つたり來たりした。そしてやつと一人の男に話しかけることが出來た。その男は、赤く日に燒けたこわ張つた顏に薄い鬚を生やした鮮人勞働者だつた。男は目尻に皺を寄せて卑しく笑ひながらおきわに早口で何か云つてゐた。おきわにはよく解らなかつた。鮮人は五十錢玉一枚おきわの手に握らせた。二人は大橋を渡つて暗い道に消えた。

三十分も經たない中に、おきわは空地から××署に連れて行かれた。密行の私服刑事に捕へられたのである。

おきわは、その夜の中に高等係の手から、刑事係に引渡された。中年の太つた刑事は口汚なく罵りながらいきなり立上つておきわの右の頰をぴしやりとぶん毆つた。それは取調べ前の脅威の爲だつた。

刑事は、原籍、現住所、家族關係、姓名等を次ぎ〳〵尋ねた。おきわは空腹と恐怖のために兎もすれば吃り勝ちになつた。その度に刑事は嘘を吐くとためにならんぞと云つてはぴしやりとぶん毆つた。おきわはぶん毆られてゐる中に少しつゝ大膽になつて來た。

おきわは、内緣の夫の名を云つた。厚い手垢のついた帳簿にペンを走らせてゐた刑事はペンを止めて瞬間おきわの顏を睨んだ。そして一應の訊問が濟むと亭主と共謀の上脅喝をやつて金を取つたらうと云つた。おきわは抗辯した。刑事は紐を持ち出しておきわの手と足を後でくゝつた。そして正直に白狀しないと市ヶ谷へ送ると云つては顏を打つた。はづみを食つておきわの體はころ〳〵轉つた。おきわは泣きながら打たれてゐた。

翌日おきわは二十九日の拘留を云ひ渡された。

おきわが二十九日留置所にゐる間、殆んど毎日高い窓から見える空は曇つて硝子に雨のしぶきが俘つて流れるのが見えた。おきわは仰向けに寢ころんで絕食をしてゐる夫のことをちよい〳〵考へた。

おきわは拘留される晩かせいだ五十錢と自分の蟇口に殘つてゐた十四錢と合計六十四錢のお金を持つて××署を出た。

二十九日ぶりで家へ歸つてみると夫は蒲團を着て寢てゐた。

「いま歸つたよ。」

夫は一寸顏を横にしておきわを見上げた。一言も口をきかないですぐ目をそらした。おきわは腹が立つた。二十九日の間、浴衣一枚差入れてくれるでもなし、洗濯した腰卷一枚入れてくれる親切氣のない夫の仕打ちが口惜しかつた。

「お前さんは、女房に淫賣さして、ひとが二十九日留められてゐるのに差入れ一つしてくれないじやないか。」

おきわは白い目をむいて夫を睨んだ。夫はパッと布團をはね除けて傍に坐つてゐるおきわを足で蹴つた。おきわは夢中で足へ噛りついた。夫は拳を堅めておきわにかゝつて來た。そしておきわは散々打ちのめされてしまつた。

暫くおきわは泣いてゐた。

食に飢ゑてゐた夫は性にも飢ゑてゐた。彼は今まで散々打ちのめした妻に挑みかゝつて來た。おきわは反抗した。然し間もなく組伏せられた。おきわの體は梅毒のために腐爛したやうな臭を放つてゐた。然し野獸のやうな男は夢中だつた。荒々しい男の息づかひと苦痛にみちた女のうめき聲とが入り亂れた。

夕方おきわは疲れ切つた體で町へ買物に出掛けた、六十四錢でお米とお茶とを買つて來た。

翌日はもう食べる物がなかつた。一文の金だつて殘つてはゐなかつた。おきわは、堅くなつてザラ〳〵する白粉を水で解いて頸に塗つた。絞られるやうに痛む腰をさすりながら翌日の夕方から場末の道を歩く勞働者達の顏を見て強いて笑みかけながらかせぎを探して歩かなければならなかつた。

三日目には思ひがけなく壹圓かせいだのでおきわは魚の切身を二切買つて歸つた。食事をしながらチラ〳〵夫の顏をみた。然し夫は喜ぶ素振りもなく不機嫌に默りこくつてゐた。おきわはどうかして一軒の家を根城にかせぎたいと思つた。急に思ひ立つて玉の井の友達を訪ねて何處かよい家でもあつたら世話をして貰はうと思つて淺草行きの電車へ乘つた。淺草橋で降りてから角の大きな菓子屋で鹽煎餅を三十錢程買つた。それを前に抱へて驛の方へ歩いてゐると後から袖を引張られたので振返つて見ると空地からおきわを擧げて行つた××署の私服刑事だつた。おきわは袖を振切つて二三間駈け出した。然しすぐ追ひつかれて此處へ入れられてしまつたのである。

その日その日を五十錢一圓と稼いで生きて行くおきわにとつては、檻房は恐ろしく退屈で一日に四度しか便所に出して貰へなくても、三十になつて梅毒のために痛む腰を我慢しながら道ばたの暗に男を探すよりは樂に思へた。然しこんなにまでしなければ生きて行かれない自分の不幸が恨めしかつた。その不幸につけ込んで來る警察の力や目に見えない世間の恐ろしい壓迫に腹が立つた。弱い者は何處までも足蹴にされ、ドン底にうごめく自分の運命が狂はしい程悲しかつた。目に見えない大きな重石のために押し潰されるやうな恐怖を感じた。おきわは、毛がすり切れてちく〳〵肌を刺すやうな堅い毛布に顏を埋めて泣いた。

夜が明けた。天井の高い窓から明るい光線が差し込んで室の中も明るくなつた。看守は一々扉を力まかせに搖り動かしながら大きな聲で起して歩いた。第一の檻房から順々に洗面所に出された。囚人

達は扉の格子につかまつて前を通る人を見ながら自分達の順番を待つた。

まことに、そこは、この世のドン底であつた。すり、强盗、殺人、賭博、淫賣婦、狂人、それらは資本主義社會に於ける被抑壓階級の土壤に咲き出でる毒草であつた。彼等が彼等の貧窮と無智と、飢餓のために追ひ立てられて落ち込んだ道には裁きと牢獄とが常に網を張つて彼等を待つてゐた。警察、裁判所、官憲、牢獄は貧乏人のために張られた網に過ぎないのであつた。

囚人達は洗面所で水をこぼしたと云つて看守に叱られてゐた。びしやりと二つ三つひつ叩かれる音がした。

みんなは默々として顔を洗つた。看守は顔の洗ひ方が丁寧すぎると云つては又怒鳴つた。七時には朝食だつた。小使はさゝ立つた木の小さな箱に詰めた黒い麥飯の辨當と、アルミの剝げかゝつた大きなバケツに味噌汁を持つて來て皆に運んだ。味噌で湯を濁したやうな薄い味噌汁の中には若芽が、二切三切這入つてゐた。食後の白湯には塵が一杯淀んでゐた。暫くそつとして置いて茶碗の底に薄黒く塵の沈むのを待つて上側の方だけ飮んだ。

十時頃おきわは刑事室へ呼び出された、刑事は二十九日の拘留を云ひ渡しておきわの拇印をとつた。おきわは看守から二十錢下げて貰つてチリ紙を入れてくれるやうに賴んだ。間もなく小使が買つてきてくれた。手拭はなかつた。汗臭い半ケチを手拭の代りに使はうと思つた。

格子に頭をもたせておきわは眠つた。他の女達も眠つた。看守の靴音をきゝつけると女達はお互に起してやつた。水色のペンキで塗つた室の板は、二尺五寸程の上のところが油垢のためにぐるりと茶褐色にくまどられてゐた。膝を折ると膝頭が痛かつた。足を横にするとお尻から背中へかけて骨が痛んだ。頭が重くて支へるのに辛らかつた。立つと膝頭の骨ががくがくと鳴つた。看守に見つけられると行儀が惡いと云つて叱られた。女達はチリ紙で毎日かんじよりを作つた。高い窓から靑空を眺めた。少しも見えない外からは砂利の上を步く巡査の靴音がざくざくと聞えた。時々威勢のよい點呼の號令が聞えた。豆腐屋の細いラッパの音が遠くから響いて來た。然しそれらは、留置所とは別な世界の出來ごとであつた。囚人達はたゞそれを聞くだけであつた。

三日過ぎ四日過ぎた。恐ろしい退屈が皆を憂鬱にした。着物は汗でびつしよりになつた。疊の表までが濕つた。體は汗と疊の臭ひでプンと異臭を放つやうになつた。顔は靑ざめ、目が落ちて唇が血の氣がなくなつて白ずんでいつた。髮帶をふるはすには腹に力がなかつた。又云ふことも出來なかつた。

人々は滿たすことの出來ない瞬間々々の時間に苦しめられた。

十日過ぎ十五日過ぎた。おきわの腰は刻まれるやうに痛かつた。後頭部めがけて體中の血が逆流するやうに思はれた。あたりは眞黑

だつた。鐵の格子も見えなかつた。看守も見えなかつた。大波の砕け散るやうな音をおきわは自分の後頭部で聞いた。そしてその音の中へその體もくるくると巻込まれてゆくやうに感ぜられた。

おきわは朝から留置所で眠るやうになつた。看守は時々寢てゐるおきわを毆つた。おきわはむつくり起きた。看守が向ふへ行つてしまふと、崩れるやうに又寢ころんだ。

看守はまたやつて來た。手に褐色の古い木槌をもつてゐた。看守は錠前を明けた。おきわは看守の手の屆かない方へゐざり寄つた。散々脅しつけて木槌の柄を檻房の名札の針へ掛けて看守は向ふへ行つた。おきわは室の隅へぴたりと身を寄せてしくしく泣き出した。

女檻房にゐるおきわと他の二人の淫賣婦たちは、看守の目をぬすんでは猥褻な話をした。然しもう一人の若い女は目をつぶつて膝を折つたまゝ口をきかなかつた。時々大きな息をしては手を上の方へ延してゐた。その女の人は毎日々々取調べを受けた。看守の當りはこの人には違つてゐた。どの看守もさんづけに呼んでゐた。四人の看守の中で一番囚人におとなしく當る背の低いやせた看守は、時々檻房の前に立つて若い女に勞働者の賃銀のことや勞働組合のことを話してゐた。

おきわがしく〱泣き出すと若い女は何處か悪いかとたづねた。

「私は梅毒だから腰と頭が痛いのよ。」さう云つて、おきわは體の痛みを訴へた。「梅毒が悪くなると頭へのぼつて馬鹿になつてしまふわ。」

おきわは眠いのもそのためだと云つた。人の居ない廣い廣い原つぱの中に寢たいと云つた。

おきわの體は堪らなく臭くなつて來た。下の汚物が着物を通すこともあつた。頭が鈍くなるやうな厭な臭だつた。看守は石炭酸の大瓶を持つて來て時々おきわの體と疊を消毒して行つた。

「どうせおらなんか疊の上では死ねないだらう。こんなとこに來て苦しむのも小さい時の罰が今當つてゐるのさ。」

ものう氣に頭を肩へもたせておきわは吐き出すやうに云つた。

おきわは六つの時母親に別れた。父は若い母親を貰つた。若い母親はおきわに不親切だつた。遊び過ぎて家へ歸るとおきわは飯が食へなかつた。臺所の何處を探しても飯の這入つた鍋はなかつた。ひもじかつた。然し母親に睨まれるのが飢じいよりも怖ろしかつた。

何時の間にかおきわは村で飯盗人と呼ばれるやうになつた。おきわは手當り次第に他の臺所を荒し歩いた。おきわは子供心に自分を悲しいと思つた。大きくなるに從つて止さう止さうと幾度も決心した。然し飢ゑには勝てなかつた。十二の春から十六の春まで五年間信州の紡績工場へ賣られた。父は二百圓の金を受け取つた。おきわは盗まなくても飯が食へると思つて喜んで國を離れた。

工場の仕事は辛らかつた。然し飯は盗まなくても食へた、そして盗んで食ふ飯よりは甘かつた。

十六の春おきわは五年振りで國へ歸つた。家には小さい妹や弟が三人も殖えてゐた。流石に父親は喜んだ。母親も親し氣な笑顔を見せた。翌日からおきわは野良へ出て働いた。草取りや土堀りの仕事は、工場の仕事よりも辛かつた。それでもおきわは今度こそは善い人間にならうと思つて働いた。

國へ歸つてから一週間の日がたつた。おきわは野良の歸りに昔なじみの友達に會つた。紡績工場の辛らいこと樂しいこと、酷い監督のことや、活動の面白さを色々話して聞かせた。白い手拭を姉さん被りにして、短い着物に紺の股引を穿いた若い二人は春の日の暮れるのも知らず娘心の樂しい空想も語り合つた。家へ歸つたのは夕食後だつた。おきわは一人後れて夕食の膳に向つた。心のせいか冷たいご飯は少し變な臭が鼻についた。今朝は飯を炊かなかつたのだらうか？さう不審かりながらやつと一椀を食べ終つた。おきわは立つて臺所の戸棚を明けて見た。眞黒い鐵の鍋が三つ並んでゐた。一一蓋を取つて見た。一番奥の鍋に溫い御飯があつた。おきわはかつとなつた。

その夜おきわは母親と喧嘩をした。冷たい御飯の這入つてゐる鍋を、臺所の流し下へ持つて行つて力まかせに投り出した。母親はリスのやうに飛びかゝつておきわを打つた。おきわは爪で母親の顔を引掻き廻した。父親は拳を堅めておきわの頭を打つた。おきわは大きな聲を立てゝ泣いた。

眞夜中におきわは家を拔け出した。そして再び横濱附近の或る紡績工場へは入つた。

おきわは十八の時に同じ會社へ出てゐる男工と一緒に世帶を持つた。長吉と云つた。長吉は丈の高い立派な體格をしてゐた。淺黒い面長の顔は眉の濃いのと鼻の高いところに特長があつた。美しい妹と母親とがゐた。おきわは夫に比べて自分の醜さを恥ぢてゐた。それだけ餘けいに氣を廻して夫の氣に入るやうに仕へた。

長吉の臺所は苦しかつた。おきわは自分が働けばもつと樂になるだらうと長吉に話して、銘酒屋の女中になつた。おきわが働き出してから暮し向きは少しづゝ樂になつて行つた。妹を裁縫學校へ通はしてやつた。

おきわは九年間男のために働いた。長吉は月末になつても暮し向きの費用については知らん顔を極めこむやうになつた。おきわは長吉の歡心を買ふために身を賣つて金を持ち歸るやうになつた。おきわは長吉が自分の月給を一體何處へどんなに使つてゐるかを突つ込んで聞く勇氣もなかつた。おきわは何時の間にか梅毒に犯されてゐた。稼ぎの方も休み勝ちになつて行つた。藥代が掛るやうになつた。臺所の暮し向きは又苦しくなつて來た。長吉は毎日不機嫌な顔をしてむつつりしてゐた。おきわが寢込むやうになると、長吉は益々おきわに邪見に當つて來た。夫婦は毎日喧嘩をするやうになつた。九年間の辛らいつとめがおきわの魂に喰ひ入つてゐた。然し男の

ためにおわきは一切を捧げて自分は泥沼の中へズル〳〵と落ち込んで行つたのであつた。その中にあの大震災があつた。長吉は姿を隱してしまつた。おきわの手に殘されたものは梅毒と、夫の裏切りと孤獨とであつた。

おきわは狂はしくなつて毎日長吉を探し歩いた。見つけ次第殺してやらうと思つて橫濱の裏通りの家を覗いては暗に佇ずんだ。そして毎夜場末の道端に十五錢から稼ぎをしなければ生られなくなつた東京へ出て來て現在の夫と一緒になつてもおきわの生活は益々悲慘になつて行く許りであつた。後頭部に時々大波の碎け散るやうな騷音を感じては倒れた。それは上面は眠つて居るやうに見えても、おきわに取つては呻きすら出來ない程苦しいことであつた。

現在の夫と一緒に暮すやうになつてからも、おきわは一日も長吉を忘れることが出來なかつた。長吉に對する愛着が深ければ深い程、九年間の陰慘な生活が身にこたへて憤りと恨みのためにかつとなつて物狂はしく興奮した。そして、おきわは益々捨ばちになつて白い目で世間を呪ふやうになつた。

留置所にゐてもおきわは自分の體が臭いので他の女達が顏をしかめることを知つてゐた。然し皆に疎んぜられる程おきわは遠慮もなく、女達の鼻先で股を擴げたりした。手拭をチリ紙の代用に使つては皆を厭がらした。然し三人の中の若い女だけはおきわに親切にした。おきわも機嫌を直して小さい時からのことをこの女の人にだけは話して聞かせることが出來た。

「私なんか世の中で一番惡い所へ時々來るやうになつたからお終だわ。どうせ人間の屑なんだから明日にも往來の眞中で野たれ死をするかも知れないし、これもみんな小さい時飯を盜んだ罰が當つてゐると思つて諦めてゐるわ。」

おきわはさう云つて力なく目を落した。若い女は云つた。

「飯を盜んだのはあなたのお母さんが惡かつたからでせう。罰なんてそんなものはないのよ。金持本位の世の中は、貧乏人が一番苦しんで働いて一番不幸で一番いじめられるのよ。」

若い女はさう云つて默つた。若い女の言葉でおきわは紡績で働いてゐる時のことを思ひ出した。新潟で小作をしてゐる貧乏な父や兄弟達の生活を今更思ひ出した。

立入禁止の札がおきわの父達の耕してゐる田に立てられた。農民組合の人々は村民大會を開いて地主の無道な仕打に反對した。血の氣の多い村の若衆達は自分達の苦心して育てた稻が鳥につ いばまれ田に倒れるのを見て堪りかねて刈り取らうとした。然し彼等は直ちに繩を打たれて牢獄に引かれた。おきわの弟も牢獄へ入れられてしまつた。

おきわの働いてゐる工場でストライキが始つたことがあつた。三百人首切りの會社のたくらみを知つた勞働者達は、ストライキを決行した。おきわ達は毎日寄宿舍で炊出しの手傳ひをした。然し、一

週間もたゝない中に組合の幹部はみんな總檢束されて了つた。反動ゴロの會社の奴等はホースでおきわ達に水を掛けた。警官が會社をかためるやうになつて爭議は慘敗した。

おきわは、それと同じ力が自分を段々と絞めてゐることを知つた。それと同じ力が自分から食を奪ひ留置所に投り込んでゐることを知つた。

おきわが這入つてから二十日目の日だつた。午後から看守が一人增員された。今晩はお客さんが來るぞと云つて看守は女檻房の前を通り過ぎた。そして辨當を二十も多く注文してゐた。その夜十二時頃×××方面の各銘酒屋で淫賣狩があつたらしかつた。十八人の女達が夜更けの留置所をざわつかせて這入つて來た。おきわ達のゐる檻房に九人も入れられた。

翌日、淫賣婦たちは檢黴をさせられた。十八人の中九人までが病院へ送られた。殘りの人達は皆二十九日の拘留を云ひ渡された。

女達は口々に不幸を云ひ出した。

「淫賣を追つ拂ふつもりなら、私たちをいぢめないで主人を追つ拂へばいゝぢやないかみんな主人に取られて、借金で苦しんでゐる弱者をいぢめたつて仕樣がありあしない。働かせられて、病氣になつて、積るものは借金ばかりさ」

「どうせこんなことなら、出たらうんとやつてやるわ。」

おきわは、自分よりは若くて綺麗な人達の前に自分の醜さを恥ちた。體臭のもれるのを氣遣つて堅く膝を抱いてゐた。然し何時の間にか例の睡魔がやつて來た。正體なく頭を左右に振つてあたりの人にもたれかゝりながら眠つた。

看守はそれを見つけた。扉の上に掛けてあつた褐色の木槌を持つておきわを毆つた。おきわは大勢の人の前を恥ぢて顏を歪めて笑つた。然しまた眠り始めた。看守はまた毆つた。看守は若い美しい女達の前で醜いおきわを毆ることに誇りを感じてゐた。

おきわは血の氣の失せた薄い唇をふるわして、氣狂ひのやうになつて、看守に毒づいた。

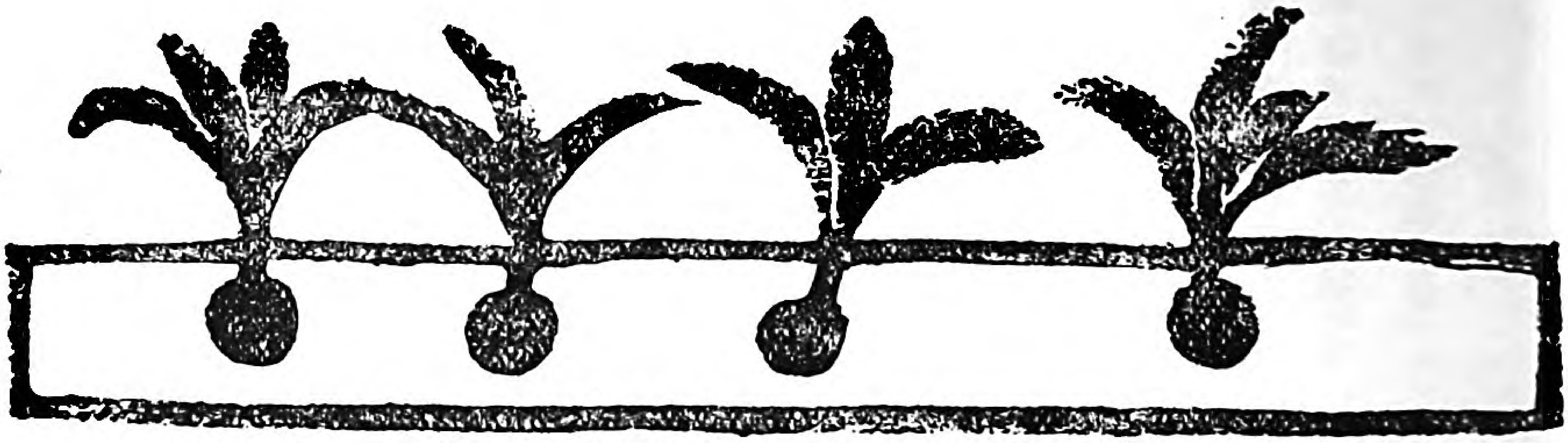
「何するんだよ。畜生め！いつそ一思ひに殺してくんな。警察も刑事も留置所もみんな私達を苦しめるためにあるんぢやないか。いつそ殺してくんな。」

看手は二つ三つ續けて毆つた。おきわは大きな聲で泣き出した。時計の音だけが大きく響いてゐた靜かな留置所の中に金屬性を帶びたおきわの泣き聲が益々高くなつて行つた。

——(一九二八、九、五)——

×　×　×　×　×

×　×　×　×　×



大辰アヤ子

# 羽子十句

川島つゆ

揚羽子の餘りに高し雲の晴れ

お降りや小砂利に交る羽根一つ

禰宜の子が獨り羽根つく羽根の唄

口紅をいとふて嚙むやさくら羽根

替え羽子の前髪にある雛妓かな

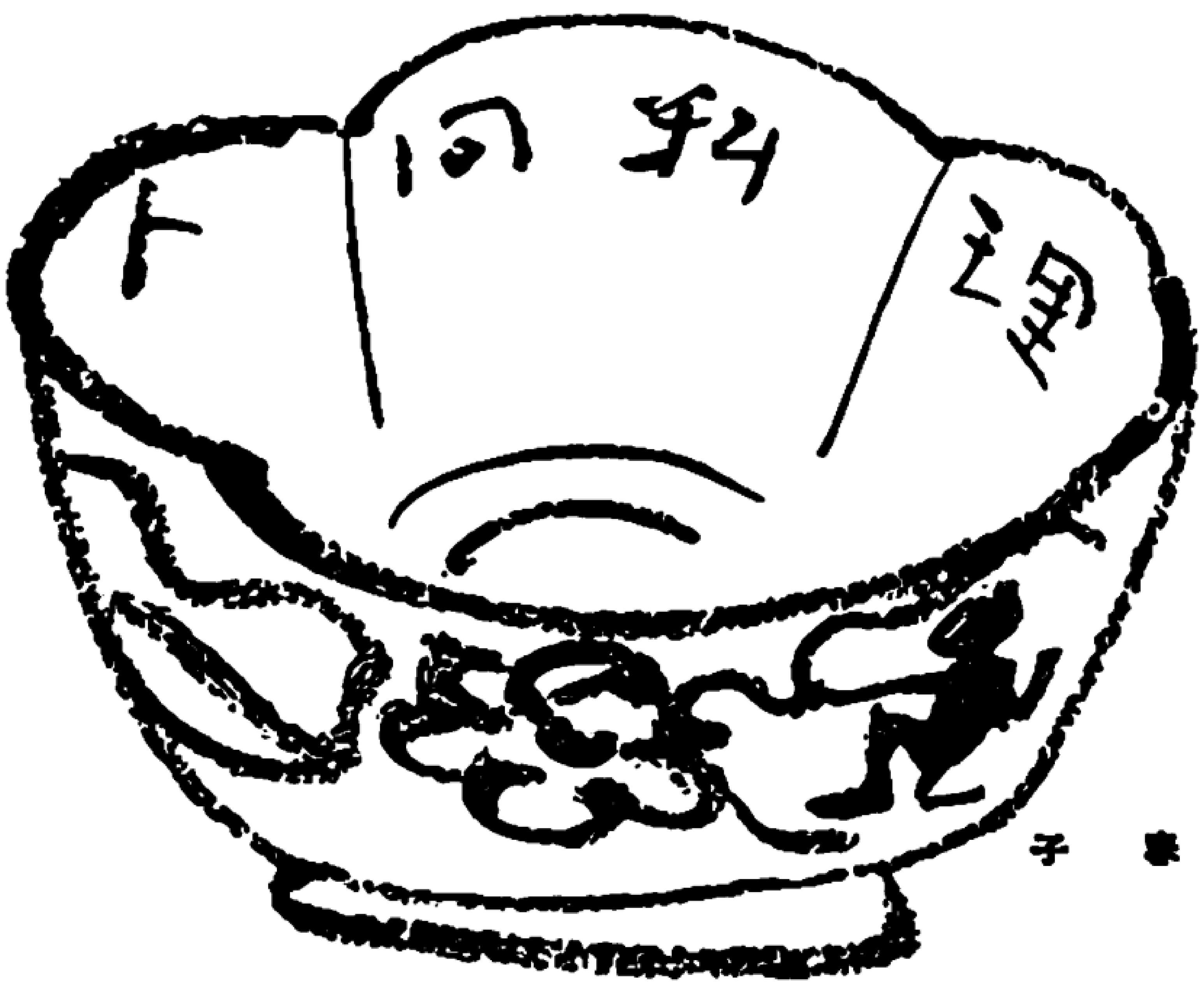
球數玉の羽子乘せて見る掌

外れ羽子のほさと落ちけりかなめ垣

落ちなんとして吹かれ居り檐の羽子

二階から羽子見下すや懷ろ手

下燃えて妬きもあらめ羽子の順



## 3 シナリオ

しの・たけじ

「あなた何時から隣家の子になつたの？」

例の獰猛な秋田犬イチ君と散歩して——散歩といふより引つぱられて、裏門から歸つてくると、ニグロ爺さんが片肌ぬぎで、エイッと、居合腰で太丸太を、ザクリ、ザクリと割つてゐるので見とれてゐると、これも垣根の破れ目から覗いてゐた隣家のおかつぱ令嬢が聲をかけた。

「僕、昨日から來てるの。」

H少年、やつと子供同士の話合手が出來たので悦んで答へた。

「まあ、昨日から？　あなたのお家何處なの。」

「あめりか。」

「あめりか？　まあ、なんて遠いの。どうしてそんなところから來たの。ああ、わかつたわ、見物にいらしつたのね、日本を。」

H少年はコックリと頷いた。

「でもあなた、日本人なのでしよ。」

「そりやさうさ。」

## 小サロン

中村武羅さんが雛妓にオヘソをおされた。

（といふのは昭和四年女人藝術正月號に發表する初夢で、その夢たるや社同人生田花世女史がマザマザと見たのだ。どうもその夢のコンキヨは、阪東彦三郎の「粗忽な使者」の芝居を見て、大釘抜きで尻を捻りあげられたのがをかしくつて堪らなかつたからだらうといふのだが、それが武羅夫氏のオヘソへ廻つていつたのだから面白い）夢の主人武羅さんを取り廻いて、舞妓八人がオヘソをいくら押しても「なんともない、なんともない」といふので、そこで舞妓連、赤襷白鉢卷きで、アリヤリヤ、アリヤリヤと黄色い聲を振り絞つておせどもつけども、いつかなこと「なんでもないなんでもない」の一點張りで大盃できこしめす。見物の大勢が妙なヘソもあるもんだと一人一人覗き込みにいつたといふ、おめでたくも珍妙な夢物語。ところがその話を聞いた一人が、その晩武羅さんのお腹が大きなお閻魔さまの顏になつて、オヘソが大きな口になつて、その口から雛妓の振袖や、赤いたすきがブラさがつてゐる夢を見てうなされた。又、も一人が見たのは、大江山の酒顛童子になつて、赤い袴をはいたおしやくたちを一つヅヽ口の中へ投りこんでムシヤムシヤ食べてしま

少年は力を入れて言つてすこし赤くはにかんだ。威張つて見たものの、日本人にほんとに馴染がすけないのだから――

「あなたの家どんなとこ?。あめりかつて。」

「僕のところは田舍だよ、牛だの羊だのがどつさりゐる。」

「まあ、牛が、そんなに澤山ゐるの? お乳をしぼるの。」

「うん、種々するさ。牧場をもつてるのだもの。」

「まあいゝわねえ。行つて見たいわねえ、あたしんとこには、たつた一匹野羊がゐるのよ。でも、お乳が出るのよ。來て見ない?」

「ほんとかい、野羊も可愛らしいね。」

「さうよ、ミューミューつてなくわ。」

「でも、其處へ行けないぢやないか。」

「あら、ここがいいわ、丁度いい位穴があつてよ、這つてらつしやいよ。」

ヤッといふ掛聲で、大きな根株が二つになつた。子供たちは屹驚して薪割りの方を見かへつたが、なんでもなく斧が日光にぎらりと光つただけだ。

垣根の下の――寒竹の藪だたみの下の方の穴から、いつでも隣家へもぐり込んでは、イチ君に吠へられてゐる小さなハッピイ君が、鼻の頭へ土をつけて顔を出した。それと見ると、大きな姿でも、まだ成人しきらないイチ君が、とてもデッカイ手首を出して、チビのハッピイの首根つこをおゝへつける。ハッピイはあがきがきかないでキャンキャン悲鳴をあげた。

「こら、イチ、なにをするのだ。小さなものをいぢめちやいけない。」

H少年が、尻つぽを引つぱつたつて、首環をひつぱつたつて、イチ君は面白がつて、三人に――この場合巨物イチ君には、ハッピーもとるにたらない對手なら、少年少女の兩君だつ

---

つたといふのだ。きつと中村氏今年はうけにいつて好い事があるに相違ない。

×

話はちよつと舊冬のことになるが、大佛次郎東日に赤穗浪士を書きあげて心祝ひに一杯兄者人三上於菟吉に獻ぜんと口をかける。於菟さん早くもオトソに醉つて例のごとく歸宅の方向を失念、彷徨幾日行衛不明、カプレちやいけませんと於菟吉を漆あつかひにして警しめられると、大佛次郎エヘンとイギを正し「戯言いつちやいけない、僕ときたら品行方正大丈夫、げに貞夫の龜鑑よと修身(教科書)にも殘るべし」と(このところ大見得)しかるところ、惡たれ兄貴於菟吉後日それときいて口惜がり「羽織が承知しねえぞ〳〵」とどなる。その羽織の由來は、次郎の黑い羽織に白いものがついてゐたのを、よひどれ達は白粉だといふがキンゲン次郎はペンキなりと堅く主張。どつちか知らぬがキハツでふいて、その香ひのぬけるやうに、自動車にステッキをたてて羽織を風に吹かせてドライブしたといふだけのこと。おくさま、讀者諸孃御安心あつてしかるべし。

×

男性訪問第一番の里見弴氏、どうもあれから何處へいつてもからかはれて困ると仰しやる。大井さち子さんも困つちやつたといつて

て遊び仲間の弱蟲に違ひなかつた。彼は大きな躰をシナシナさせて、いい遊び對手になつてやつてゐる。」少年が潜り込まうとすると、イチ君痛くないやうに尻を嚙んでふざける。

「ほんとにいけない犬ね、こら、こらこら――」

奇麗な、白い手が出て、代つて潜り込まうとするイチ君の頭を、優しくプンナグる。

エイ！ ザクリ――

薪割りはまた、老軍人の一つの遊戯である。ほどよき薪ざつぼになつた木のキレが宙に飛んで、くる〳〵と舞ふと、具合のよい場處に歸つてくる。子供たちが感心してワツと聲をたてると、老人(おいびと)はニコリと會心の笑みを子供たちに贈る。

イチが今日は妙にハシヤイで、飛んでいつて木ギレをくはへてきても叱りはしない。子供たちの穴潜りも咎めはしなかつたが、そのかはり譯の分らない、むづかしい事を呟やいた。

「こら〳〵、掟(おきて)の垣を今から越えてはいかんぞ。」

◆

或日の淺草見物。

サーカスに入場すると、案内役の書生さんの方が夢中になつて、

「どうです、素晴らしいでせう。あの馬を使つた奴は。」

「なんでもないよ、あんなもの、あめりかのカーボーイなんか……」

「シッ！ だまつて――あの口上をよく聞かなければ面白くない。」

口上が終つて、美しい娘の眞劍白刃渡り。

---

ろからどうしてときいたら、あたし里見さんが好きになつちやつて困つたといつてましたといつたら、そりやあ好い、そりやあ好いれだつて――どうも今月のゴシップはおめでたいことばかりです。

×

「誌上議壇」席上で金子女史、なぜ斷髪になさらないのと訊かれて、だつてまだ丸髷に結ひたいんですものと答へる。傍にゐた新妻さん、あたしもさうよ、丸髷は好いわ。御承知のごとく新妻さんはミセス、金子さん、今はミス。おめでたいことを祈ります。

×

女性愛喫家夢二竹久癡伯、ある夜電車に乘り合せたゴシップ子をとらへて、あなたの方のゴシップ欄で訂正してもらひたい事があると口説かれる。曰く、吉屋信子が僕に結婚を申込んで拒まれたといふのは嘘で可哀さうだ。昔、あの人が女學生で、僕がみなとやといふ店を出してゐた時分、上京したいといふ、とても令女界式な手紙をよこしたから、美しい娘に店番をしてもらつたらいいなとすぐ來てくれと言つてやつたら、心の準備があるからといつて來た。お嫁にくるのちやなし心の準備はをかしいと思つてたら其内に來てくれたが恐ろしく眞黑な田舍娘さんでれ、僕ごのみの美術文房具みなとやの店へ座らせたらお客が

H少年は息を吞んで、一生懸命な見物だつた。終るとホッとして、握つてゐた掌をひらいて見せた。爪のあとがキッシリついて汗がにぢんでゐる。

書生さんは大自慢でいつた。

「これにはないけれど、見せたいのは（火中の術）だ。とても凄いよ、炎々と燃上る焰の中を、今のやうな娘が、白い素足で薪を踏んで渡るのだからね、これはとても大變なものだ。今のは一つ間違へば足の裏が斬れるだけだが、火の方はさうはいかない、グズ〳〵してゐれば、體にだつて、頭髮にだつて火がついてしまふでせう。それをね、なんともなく通つてしまふんだ。そこが、とても、たいした業だ。何處かで見つけて、今度見せてあげませう。」

少年は有難うと首をさげた。もう問答をしてゐられなくなつたのだ、紙細工の花から水をふいたり、玄妙不可思議な曲獨樂がはじまつてゐる。

曲馬團から出た二人は、ぶら〳〵歩いて——通りがかりの地方から見物に來た人達が、少年には珍らしくつて仕方がなかつた。

八木節の小屋の前へ來ると、書生さんの足は動かなくなつた。けれど、少年は、その隣りの、山雀や猿の藝をする、小さな小屋の方に心をひかれて停んでゐた。猿が女の髮をかぶつてゐて、それを自分でとつて頭をボリ〳〵かいたり、裾の長い着物を着て歩いてゐたりするのを見ると、滑稽でたまらなかつた。よく馴らされた山雀が、紙に包んだ錢をもつていつて神社の祭錢箱に納め、鉦をならして、山寶に積んであるおみくじをもつて來て開いて、それを見物の方へ見せたりする、客引きの藝を感心して眺めてゐた。

でも、さかんなる肉聲に眩惑された書生さんは、とう〳〵二人分の木戸錢を拂つて八木節のなかにはひつた。

---

逃げだしさうだつた——とにかく、こんな譯で何となく懐かしい思出の對照なのですよ。

×

正月になると寢る間も惜しいといふ程歌がるた好きな癸イッ子、而してそのイッ子のその時の氣分なるものを知るに最も便利なのがそのまた歌がるただから面白い。もし彼女の膝の一番近くに大切に守られてゐる札が「われても末に逢はんとぞ思ふ」であつたなら彼女は戀愛に煩悶してゐる時で、それをとられたら凶に暗示をうけたやうに淋しくなるといふのだ。だが、百人一首の戀歌を持札にするほどのをとめは、みんな、そんな人知れすこそ思ひ〳〵の氣持ちに頰摺りしてゐるといつても間違ひはないであらう。片戀の男共よ、戀人たちよ、汝が愛する女人の、膝の前の札に注意せよ！

×

十二月に讀んだものの中で愛敬のある見出しは、全國藝妓屋同盟本部の同盟新聞といふのに載つた、菜花柳病博士の「眞の藝妓道復活は破壞の後の建設へ」

×

上の欄の「談話室」で話してゐる三上於菟吉があとでいふには、何處の國でも大屋の爺といふものは嫌なことをいふ奴なものだよと。

×

いつぞやの「女流教育家見立」に臙濆の色

H少年は舞臺になにがあるのか、まだそれに目をひかれないうちに、

「痛い。」

と低く叫ぶ聲を耳に入れた。

自分では決して蹈んだ覺えはないのだが、傍の者は凝と白い眼で、下から彼を睨んでゐた。それは少年だつたが不敵な面がまへだつた。

だが、その少年は、別段惡意で睨めたのではないのか、無言で身を退らせて、H少年のために座席を與へてくれたので、彼は遠慮なく腰をおろした。書生さんは最早見るに夢中で、彼のことなどは忘れはててゐる。

H少年は舞臺のダンサーよりも、よつぽど隣席（となり）の少年の方に興味がもてた。このごろ遊び友達になつたチイちやんは女だから、おなじ年頃の男の友達がほしかつた時だ。しかし、その少年はどうもあんまり好い遊び相手にはならない樣子ぶりだつた。彼も舞臺はそつちのけで、ジロジロH少年の方ばかり流し目に觀察してゐた。

彼はみなりの汚ないわりに、懐からいろんなものを出して食べた。長いものを出してくはへてゐたが、だまつてH少年にも一本くれた。噛み味つて見るとうまい味なので、

「これは何だい。」

と聞くと。

「するめだ。」

といつて、また違つた細長いものをくれた。こんどは妙な味で、木の皮を噛むやうだつた。

「ニッケだよ。」

と彼は説明したが、H少年が、ペッペッと舌をふいてゐるのを見て、チヨコレートの小包をくれた。そして親密のしるしとでもいふのか、自分もおんなじやうにチヨコレートを食べはじめて、ニヤリと笑つた。

（つゞく）

の黒い大ラッキヨに見立てられた河崎夏子先生。丁度その號の雜誌を滿洲視察旅行の東京驛出立のきはに手にしていつたから大變、同行の新妻いと子さん、金子しげりさん、吉屋信子さんからラッキヨ先生とあがめられて笑ひ通し、御機嫌のよいままに玄海灘の船上にあつても衆客を笑はせ通して「瀕死の白鳥」を演じたが、その實黑鳥なので、爾來「瀕死の家鴨」との武名？舞名高し。

×

自選百人一首下の句

人づてならでいふよしもがな　若杉鳥子
晝は消えつつものをこそ思へ　林芙美子
さしも知らじなもゆる思ひを　時雨
聲きくときぞ秋はかなしき　八木秋子
うしと見しよぞ今は戀しき　宇野千代
もみぢの錦かみのまにまに　生田花世
みだれて今朝はものをこそ思へ　城しづか
霧たちのぼる秋の夕暮　素川絹子
燒くやもさくの身も焦れつつ　佐々木ふさ
ぬれにぞぬれし色はかはらじ　堀江かど江
戀にくちなん名こそ惜しけれ　北村兼子
今一度の逢ふこともがな　大井さち子
いでそよ人を忘れやはする　望月百合子
むべ山風を嵐といふらん　長谷川春子
なほ恨めしきあさぼらけかな　今井邦子

他選百人一首下の句



# 應接室

## 女人藝術社の大家さん三上於菟吉の雜談

○僕あまだ女性が男性と對等に立つてゐるとはどうしても思はれんよ、なぜつて男性は長い間、一家一門、少くも親、妻、子供、その外澤山の人間の扶養の義務を負はされて、惡戰苦鬪の苦痛に堪へることに慣れてゐる。所で女性は、家か良人にたよるか、えらいところで自分一個の生活費をかせぐ位が大よその場合鬪の山じやないか。彼女等はこの種の苦痛を怺へるに慣れてゐない。所が世間に立つにはこの修業が第一なんだ。男性は遺傳的にこの點で立派なものさ。石川主婦の友社長が、女性は雜誌記者としてもあまり向いてゐないといふ意味のことを言つてゐるが、贊成だ。除外例はある。婦女界の太田菊子さんとか、曾つての松田鶴子さんとか、僕の見聞の範圍でも、男子を凌ぐ生活力を持つてゐる人もあるが一般にこの意味でなつてないね。どうですね、女人藝術社諸氏、ひとつ諸氏の力で御亭主や、戀人や一家一門を養つて苦勞して見ては——なか〳〵身の爲めですよ。

垢附きばかり憂きものはなし　藤澤　清造
からくれなゐに水くぐるとは　平林たい子
人こそ知られ乾かぬ間もなし　太田きく子
ふりゆくものは我身なりけり　近松　秋江
長々し夜を一人かもねん　徳田　秋聲
戀ぞつもりて淵となりぬる　山田　順子
戀しかるべき夜半の人かな　深尾須磨子
世を思ふゆゑにもの思ふ身は　神近　市子
はげになれとは祈らぬものを　三上於菟吉
乙女の姿しばしとどめん　三宅やす子
おきまどはせる白菊の花　眞杉　静枝
くだけてものを思ふころかな　直木三十五
雲井にまがふ沖つ白波　中村武羅夫

×

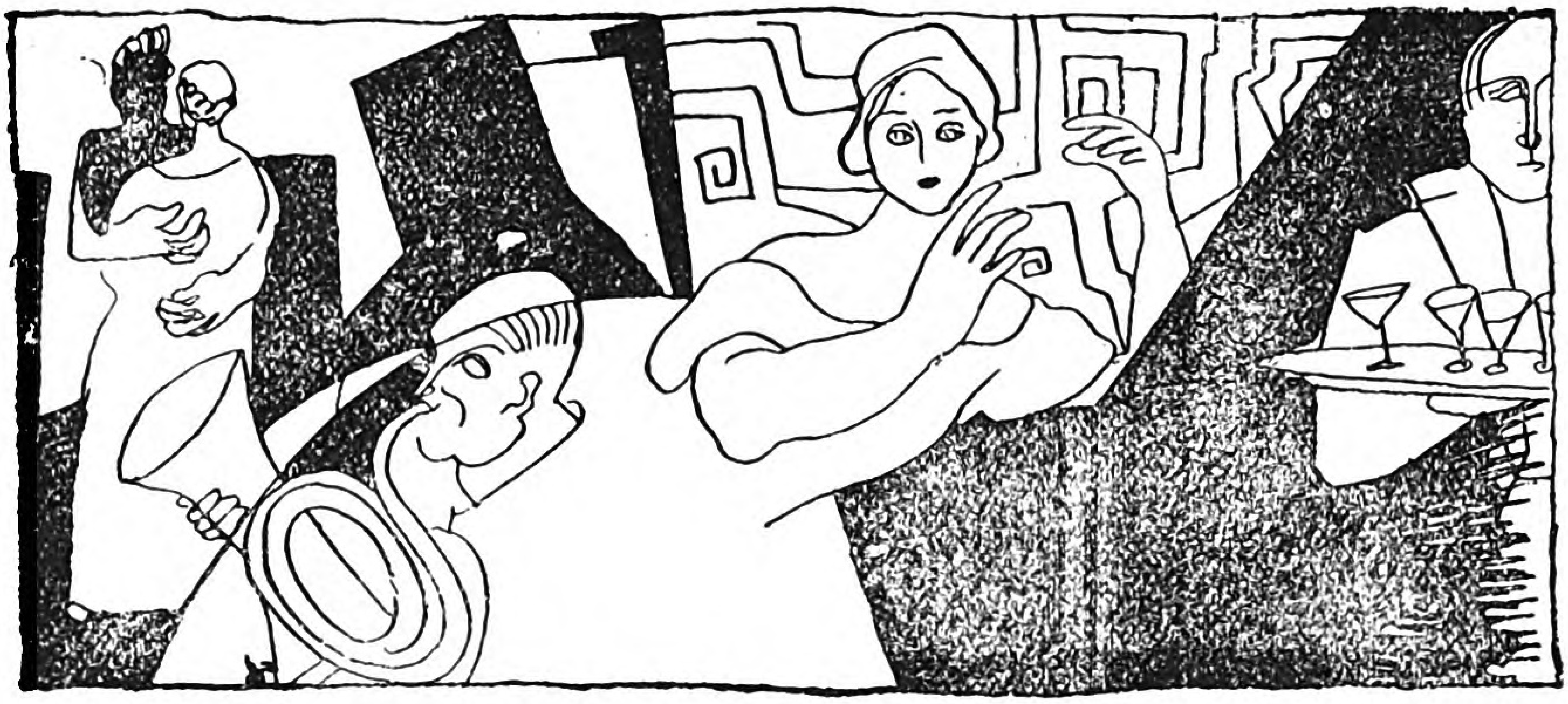
猫の美術家河村目呂二氏が、時雨女史のマスクをとつておきたいといつてゐるが、その對句が振つてゐる、紅蓮さんの死顔をとつた俺だ。素張しいのをとるといふのだが、いやだあ、あんなお馬のやうな大きな顔に似ちやあと女史はおびえてゐる。

×

百人一首追句

きみがため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな　島崎　藤村

もろ共に哀れと思へうばざくら花よりほかに知る人もなし　加藤　武雄



深澤紅子

# 跳舞的上海

森三千代

花の雪が降る。
虹色の金柱のまはりを
金の刺繍した支那靴がをどる。
紅錫包の大看板のある街



瑪頭通りを、蘇州河の岸を
苦力と黄包車のあかぎれのきれた足がをどる

DANCEといふものの眞實の意義は何か。
それは熱狂である。
歡樂の熱狂も、苦しみの熱狂も
人生のたゞ一つのELEMENTから抽き出される。

月の光が妙に明るい黃浦江の波の上にも
澤山な舞踏病者
それは戎克(シャンク)船の群れ。



大原アヤ子

# 米國と英國のこと

山川菊榮

## 米國の婦人勞働

北米合衆國の女子賃銀勞働者(職業婦人をも含む)の總數は約一千萬を超えてゐる。そのうち既婚者の數は二百萬である。こゝでも、他の工業國と同じく、農業及び傳統的な婦人の職業に從事する者は減少し商工業に從事する者が增加してゐる。

一般に婦人の賃銀は男子のよりも遙かに廉く、工業勞働に從事する二百三十一萬人のうち、九〇%は半熟練工の部類にはいる。婦人勞働者の平均賃銀は、同一産業に屬する男子の、最も平均賃銀の廉いグループ以下である。最も賃銀の高い州(ロードアイランド)の中位の賃銀は一週一六・八五ドル、一番廉い州(ミシシッピ)では八・六〇ドルである。黑人勞働者が非常に多い南方諸州は一般に賃銀が廉い。

黑人勞働者を益々多く搾取することによつて、資本家は北方勞働者の賃銀を引さげようとする。南方では棉花の農場及び紡績工場に、北方では洗濯所、被服工場、食品包裝工場、ホテル、女中等に黑奴の婦人が非常に多く使用されてゐる。

十八州の婦人の勞働時間の調査によれば、三分二以上は一週四十八時間以上働き、一日九時間以上働く者が半數以上を占めてゐる。この點でも最惡の狀態は南方諸州において見出され、勞働時間は十時間ないしそれ以上である。

米國の失業者五百萬人のうち、少くとも半數は婦人である。

社會保險(失業、疾病、養老、母性等)は事實上存在しない。現に存在してゐる保護法規は、最低賃銀制といひ、幼年勞働の制限といひ、それを無效にする巧妙な法律上の拔道によつて、全くの空文となつてゐる。

米國勞働婦人の中には、まだ殆んど組合運動が發達してゐない。婦人組合員は僅かに二十萬人(2%)にすぎない。A・F・Lは單に組合の發達のために努力せぬのみならず、多少なりとも組合員が鬪爭的な態度に出る時は、傭主や警察と協力してこれを粉碎するのを常

としてゐる。ニウヨーク製箱工(三萬人)、パサイック織維工(一萬六千人)、ニウベットフォード(二萬八千人)等において、A・F・Lと組合の右翼とは常に全力をあげて降伏を强要した。これらの鬪爭を指導し支持したものは、常に勞働者黨(共產黨)と左翼であつた。そして自分自身の鬪爭に於ても、又夫を助ける働きにおいても婦人の發揮した勇氣と頑强な抵抗力とはすばらしいもので、米國資本主義に對する一大强敵の出現を證據立てたものであつた。

勞働組合以外に勞働婦人の約二%が二種の團體に組織されてゐる。その一つは同一民族の勞働婦人のクラブから成立してゐる國語別の團體、今一つは母親同盟、主婦の會、借家人同盟　勞働組合婦人會(男子組合員の妻の團體)等である。

女權の國といはれてゐる米國では、いふまでもなく强大なブルジア婦人團體が發達して居り、それらの團體はアメリカ帝國主義のアマゾンとなつて、全世界の無產者と植民地民族征服のための侵略戰爭を、キリストのため、平和のための十字軍であるかの如く想はせる幻影をふりまいて步いてゐるのである。しかも世界の富の半分を占有するといふ成金王國アメリカでも、勞働婦人の生活の苦しさ、みじめさは貧乏な日本と何の變る所もない。

かゝる事實を前にして、米國勞働婦人の間における第一に必要な仕事は、未組織婦人、特に工場婦人の組織であり、それがためには賃銀値上げ、時間短縮、社會保險、婦人勞働者保護法規等に對する要求を中心とした大運動を起し、かつ戰爭反對の氣運を高めると共に、黑人女子の啓蒙と組織に力を盡さねばならぬことが認められてゐる。

## 平等参政權と不平等賃銀

英國婦人は約半世紀餘りの惡戰苦鬪の後、やつと今年から男子と平等の參政權を認められるようになつた。三十才以下の靑年婦人が、新たに獲得したこの權利をどう使用するかは、英國のみならず、世界の注意をひいてゐる所である。各ブルジョア政黨はもとより、勞働黨でも少からぬ婦人候補者を立てゝ戰ふらしい。

平等參政權は勿論結構だが、勞働婦人に取つて一番痛切な賃銀について平等の權利の認められないことは、英國とても資本主義國の御多分に洩れない。それどころか、最近には、在來勞働婦人の奮鬪によつて平等賃銀率の採用されてゐた所でさへ、流行の資本の攻勢といふ奴で、女の賃銀をへらしにかゝつてゐる有樣である。

ウールウィッチの市會では、一九二〇年來、市廳の雇員に對し、男女同一賃銀率を實行して來た。一九二五年に至つて賃銀は男女を通じて一樣に引下げられたが、其時もその率には變りがなかつた。然るに保守黨は會計檢査官を表面におしたてゝ、自分は「原則としては」男女同一賃銀率に贊成であるが、現在、市廳で女のやつてゐる仕事は、男の仕事よりもズッと下らない、又は骨の折れない仕事なのだから、男と同じ賃銀を支拂ふには及ばぬと主張させて女の賃銀を引下げにかゝつた。元よりこれは町の大小資本家の御機嫌取政策にすぎない。

勞働婦人の方では、現に婦人の從事してゐる仕事の骨折と責任とが少しも男子のそれに劣らぬ許りでなく、却つてより多くの苦痛と責任を伴ふことよりある事實を指摘して激烈な反對運動を起してゐる。平等參政權で淺はかな女達を釣つた氣でゐた保守黨は、不平等賃銀で尻尾を出したといはれてゐる。

# 農民自治とは何ぞや

松本正枝



ブルジョア意識を暴露した。——勞働運動に、社會運動にまで見當違ひの認識をもつて代議士になつた水谷長三郎氏は「婦人運動」十月號に於て、その心にある泥を自ら吐いた。そして彼等が民衆の支持によつてなさんと意圖する欲望の裏書をした。そしてあらたに民衆の侮辱を買つた。

先づその曰ふ所を聞く、「三千圓の中千八百圓は本部へ納め殘りの千二百圓の大部分は所屬地方聯合會の費用にあてる。これでは代議士唯一の收入であろ歳費が全然フイになる。ムサン代議士でも三度の飯は喰はねばならぬ、汽車がたゞだけでは旅も出來ぬ、歳費の大半をとり上げるのは殘酷だ」といふ泣事以外何物もないのである。(本來この様な意見なり論文なりは勞農黨本部に提出さるべきで婦人運動の如き雜誌の頁をさくべき性質のものではない。この事は編輯者も考へてほしい事である。)

無産大衆を常に生活の脅威におとし入れて恬として恥ぢないブルジョア政治家は云はず、いはゆる無産者の代表として乗りこんだ無産代議士は何をしたか！ 議會に於ける彼等を見よ、只ブルジョア政府と妥協してばかりゐるではないか！ (我等は議會に我々の代表を送つて政治と闘はなければならないんだといふ政治主義者よ、かういふのが政治と闘つてゐる事か伺ひ度い) 投票の數にばかり依つて定める代議制機關に五六人の議員を送つたとて何になろう！社民黨の安部さんは、「無産者は人口の九割五分を占めてゐる、だから我々代議士を百人の中九十五人まで出せる、そこで我々無産者の都合の好い政治がすぐ出來る」と、いかにも出來さうなうそをついて民衆をまんちやくしやうとする。日勞黨、大衆黨は「勞働者農民の政府を作れ、さうすれば解放される、だから我々に投票しろ」といふ。これおためごかしである。勞働者農民の政府をつくつて誰がそれを運轉するのだらう！云ふまでもなく集産主義者である幹部連が勞働者農民の名において切廢勝手の獨裁をやる事は火を視るよりも明かである。婦人參政權論者は云ふ。「婦人公民權及び參政權を獲得すれば濟涼劑を泥水に入れた如くこの腐敗しきつた政界は濟まつて行

く、何故なら女性は男性よりも清廉潔白だから)と、果して女性がどれ程男性より深い心を持つてゐるか！また、現在の經濟組織、政治組織の中でその聖い心と力を働かせうるかあやしいものである。(それは不可能だ)

私は政治と我々が日常どんな關係にあるかといふ事は他日くわしく述べようと思ふが、最も革命的であり、無產者の味方だと稱してゐる左翼無產黨の立脚する基本精神であるマルクス主義を檢討して私共の進むべき道を明かにしたい。

マルクス派社會主義が科學的社會主義といふ名稱をとる所以は社會の變動は生產力の變動に基くといふ法則の上にそれが打ち樹てられてゐるからである事は疑ひない。それによれば、或る社會の經濟組織といふものは或る生產力の發展段階に相應ずる生產關係の調和である。例へば資本制社會といふものは、卽ち一定の生產力の發展段階に相應ずる組織であるから若しその生產力そのまゝに變動が起れば必然にこの資本制社會は變動する。また逆に其の生產力そのものに變動がない限りいくらさわいでも蹴つても打つても資本制社會は多少歪める事が出來るかもしれないが、決して變動はしない。資本制社會と云へば當然そこにはブルジョワジーとプロレタリアが存在するが、その關係 資本制社會の基礎となる生產力とそれに照應する生產關係の所產であるからやはり生產そのものには變動がない限り、この關係もまた永遠に變動がない。プロレタリアにもブルジョワジーにも、この關係を變へる力はない。これを變更し得るものは只生產力である。ブルジョワジーがプロレタリアを壓迫し支配し搾取してゐるのは彼等の意志に依存するものでなく生產力の作用によるのである。故にプロレタリアがブルジョワジーと衝突するのは。プロレタリアが壓迫を憤り支配に反抗し搾取を厭ふが爲でなく、ブルジョワ的生產關係が生產力のより以上の發展に對して桎梏となり矛盾に陥つた結果である。それ故に階級闘爭といふ事實は古い生產力と新しい生產力との衝突以外の何ものでもない。新しい生產力が古い生產力に相應じた生產關係を桎梏と感じそれを破壞して自らに相應ずる生產關係を準備しなければならなくなつた時、そこに腕と腕との摑み合ひ殘虐な闘爭が起るのである。そしてブルジョワ的生產關係は社會的生產道程の最後の敵對形態であるからこの生產力の發展は必然に共產社會を齎らすことは明かであるが、こゝから共產社會への過渡時代にはプロレタリアの獨裁が出現する。此のプロレタリアの獨裁は、そのものとしては直接に階級を廢棄するものでも、階級闘爭を消滅せしむるものでもない。それを廢棄し消滅せしむるものは唯生產力の發達あるのみであるから、プロレタリアの獨裁は一意生產力を高める爲に努力する組織でなければならぬ。そしてマルクス主義者はアナキストと同じく國家は階級對立の所產、征服の結果である事を認めるがしかしその對立、その征服は當事者の意志によらない關係であつて生產力に基づく關係であるから國家は廢棄すべきものでなくて眠りに落つるものでなければならず、國家の消滅にはそれだけの經濟的基礎を要する、といふのである。

それ故にマルクス派社會主義の運動は生產力の發達の爲の意識的な運動である。然し我々がブルジョワや地主に搾取されてゐるのは本當に未だ生產力が一定の段階にしか達してゐない爲だらうか！農民や勞働者が奴隷であり、地主、資本家が支配者であるのは何人の意志にも依存しない關係なのであらうか！ 我々が彼等に反抗し、彼等の壓迫や支配を斥け、搾取を忌むのは、要するに自治を欲する

のは、我々の中に綿々として盡きざる人間の發露、我々が自覺した爲だと思つてゐたら、生産力と、生産關係の矛盾に陷つた作用に過ぎないといふのは本當だらうか？　我々が支配を廢棄し、搾取を根絶するのには、先づ農業が電化されてゐるか否か？　支配搾取社會と無支配搾取社會の分れ目となるといふのは本當だらうか？　我々自身の中にはブルジョワジー、地主、其の他一切の特權階級を倒す力がないといふのは本當だらうか？

レニンはラッセルにプロレタリア獨裁は略ぼ廿年間續くであらうといつたが、旣に十年以上獨裁治下にあるロシアは何等生産力を增加せず、資本制に向つて廻れ右をしてゐるのはどういふ譯か！　同じレニンは西班牙の社會主義者にはプロレタリアの獨裁は四五十年續く、その上外國資本家に對する利權の讓渡は必然にそれを延長させるかもしれぬ、と云つたがプロレタリアが政權を奪取して後尙五十年以上ブルジョワジーを階級として廢棄出來ぬ樣な生産力の狀態ならその生産力と現在の生産關係とは決して矛盾に陷つてゐるとは云へない。何故なら佛蘭西大革命は勃發と殆んど同時に封建制度を廢棄し、明治維新さへも數年を經ずして數百年の武士階級を廢棄してしまつた。そこでロシア革命は生産力と生産關係との矛盾によつて起つたものでないことは明である。

見よ現在の農民や勞働者が如何にその反抗心に燃えてゐるかを！　そして支配と搾取を憎惡し一意自治を目がけて突進せんとしてゐるかを！　こゝにおいて田中反動內閣は御機嫌取りにも婦人に參政權を與へようなど〻考へ出したのだ、が現在の婦人は空手形の參政權一票を得んとして奴隷權を欲するものではない。婦人がその本質の自治に向つて眞しぐらに進みゆく意氣はすさまじいものである。此の情勢に於て田中、濱口、床次輩の下ではブルジョワジーがこれから五十年以上もその階級としての存在を許されてゐるなど、いふ事は想像さへも出來ない。然るにレニンはプロレタリアの名に於てブルジョワジーに對して尙五十年以上の存在の保證を與へたのである。

宜なるかな、今日のロシアに於ては、プロレタリアなり農民なりがブルジョワジーの所有「權」卽ち搾取の源泉を侵しはしないかと眠りに落つべき筈のプロレタリア國家は生産力の名に於て晝寢もしないで見張つてゐるのである。なるほど、ロシアにおいてはブルジョワーには選擧權がない、然し選擧權などゝいふものは一人一人の意志を代表する事が出來ぬ以上、いつもごまかしであつて、社長や地主と同じく我々が一票持つたとて平等にはなれない。社長や地主が失格して我々にだけ選擧權があつたとて平等にならない、何故なら平等の根抵、彼等の優越の根抵は彼等の所有「權」にあつて、政治上の權利にあるのではない。投票とは凡てを委任する委任狀を出すやうなもので政治を動かす力はない。政治とは常に支配、搾取「權」の擁護の爲に存在するもので、その存在を必要とするもの〻爲にのみ動く。故にプロレタリアが政治權力を奪取して支配階級となるには、ブルジョワを追ひ出して自らブルジョワとなり、今までのブルジョワがプロレタリアとして使ふか、プロレタリアの名においてブルジョワジーの搾取權利を確認するかである。

そこで我々がブルジョワジーの支配と搾取とを拒否せんとするなら、當然政治權力の「奪取」でなく、「×棄」でなければならぬ。ブルジョワジーを階級として廢棄しなければならない。それはプロレタリアの「獨裁」でなく、「社會××」でなければならぬ。眞の社會××は×府を否定するものである。

前にも述べた如く、農民、勞働者の隷屬の原因は生産力によつてゞはない。階級社會の成立、政治發生の原因も生産力によつてゞはない。國家は自然作用によつて生れたものでもなく、征服と强權の所産である。故にその消滅は生産力の發達によつて眠りに落つるのを待つても駄目で、階級の廢棄、××の否定、我々の自治への意識的躍進によつてのみ實現するものである。

自治とは何か？ それは「生産及び消費の自由」といふ事である。生産及び消費の自由の伴はない自治とは架空の自治、名義だけの自治、政友會が騷いでゐる地方自治、東京市の自治といふ如き自治に過ぎない。我々はこんな自治を目的として運動してゐるのではない。我々がいま農民として、勞働者として我々の周圍を觀察する時に、階級社會の特徴、搾取組織の特徴は、各人に「生産及び消費の自由」がないことであるのを發見する。生産及び消費の自由のないところに隷屬があり、そこに强權のよつて立つ根據がある。故に我々の欲するのは生産及び消費の自由である。萬人に對する生産及び消費の自由である。（生産においては資本制の延長であるマルクス主義は、分配の公正と云つて消費の自由は確立しやうとするけれど、生産の自由を顧みない所に消費の完全なる自由は得られぬ、我々は今後五十年以上もプロレタリアと農民の名においてブルジョワジーの存續を許し、それに朝貢しなければならないか！ 農民の存在は生産力を發達せしめないといふ事で、プロレタリアの指導の下に「農業に對する産業的軍隊」を編成し、土を離れてその一兵卒とならねばならないか！ 命令によつて生産し、收穫を國庫に收め後に勞働劵によつて分配を受け、我々は解放されたと泣笑ひする義務があらうか！）

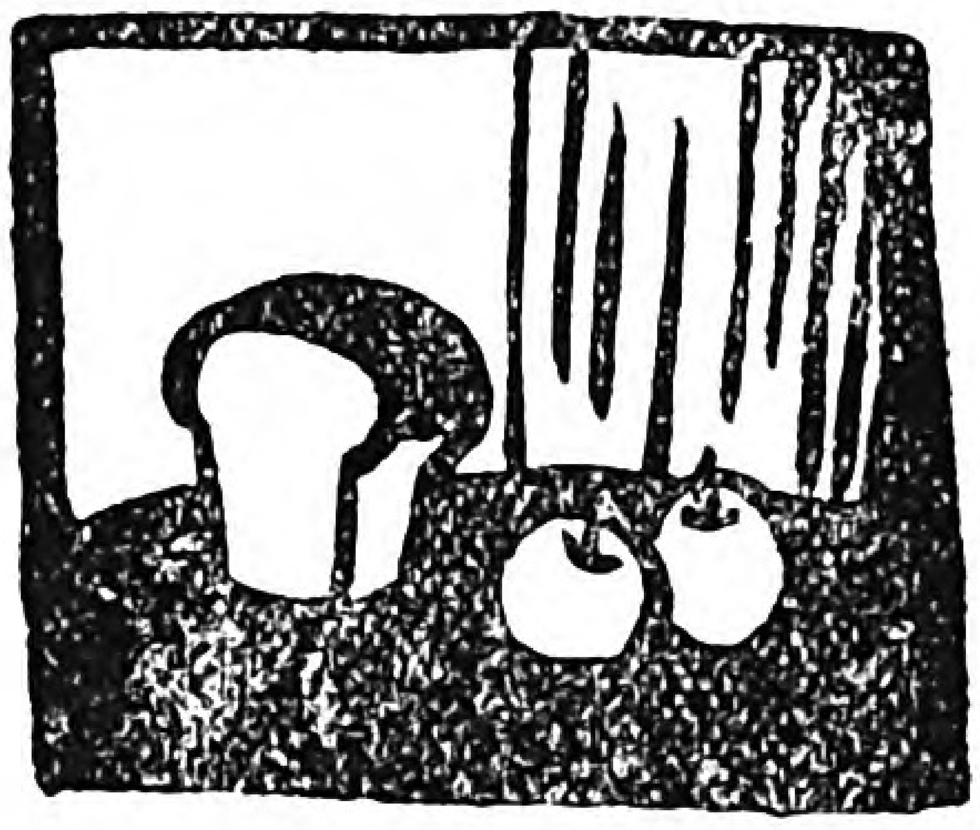
我々は生産と消費の自由を獲得する準備として、先づ農民が經濟的に團結し、一方に强權を搾取に對して徹底的に抗爭なすると同時に、他方に相互的、共同的、自主自治經濟の組織を發達せしめなければならぬ、我々は生産力の發達が共産社會を齎來せしめるといふ過程を信じないけれど、生産力の增加が生産及び消費の自由確立の最も重要な一條件である事を確認するが故に、我々の相互的、共同的經濟組織によつて、知識の普及と生産力の增加を圖らねばならぬ。我々、農民にあらざる人々も此の心、自治を欲求する集團或は個人と常に握手し、完全なる自主自治の聯合社會を築かんとするものである。この心、この願ひは萬人の等しく願ふところ、心に抱くところ、されば隣から隣へと己が心を押しひろげて、遂には完全に地球の全面を覆ふであらう！

## 論文、表紙繪、カットの募集

論文は女子の立場から見た時事に適切なる時評または女性生活に對する希望、暗示に富び隨筆の類を募集する。
表紙繪は清新にして印象的なるもの、象徴的にして鮮麗なるもの、其他强烈なるもの、優雅なるものを募る。
應募者はすべて女性に限る。

論文
枚數——八枚以内
期日——毎月十五日
謝禮——薄謝

表紙繪、カット
洋畫——六號大
日本畫——菊判四倍大
期日——毎月十五日
謝禮——薄謝



金子多榮子

# ロシヤの農村婦人

神近市子譯

ロシヤの婦人について眞實を見ようとする公平な視察者は、ガマレエブカかグラホブカか、ヴズネセンスクかマスロフ・クットの村落をどこでも手當りに選び、どれか一ダースほどの家に足を入れて見ることである。それらは凡てが土地によつて泥煉瓦か丸太のものであり、屋内は凡てが同じものであるだらう。卽ち、一室――多くて二室――大きなストーブが、最も多くの席を占めて、恐らくは床は土間である。不細工なテーブルと腰掛、汚らしい羊の皮を投げかけてある木製のベッド、色のあせた造花とけばけばしい刺繍をした布とで飾り立てゝある。隅の方の鍍金の聖像、そして天井からは搖籃が吊してある。少くも三人の子供はそこらにゐて――そしてあの忘れることの出來ぬ息詰まるやうな惡臭だ。

婦人達は、野良や屋外で勞働をしてゐず、河で洗濯もしてゐなければ、絲を紡いでゐるかパンを焼いてゐるか、子供が泣き叫ぶのを止めさせやうとして狂人のやうに搖籃を搖すつてゐるか、でなければ全然何もしないで重苦しくボンヤリとそこに座つてゐる。そして視察者の質問に對する彼等の答へは、こんなものであるだらう。

『おゝ、何もかも前にあつた通りですよ！ あなたがよい夫を持つたら、貴方は前にも仕合せだつたし、今も仕合せです。がさうでなかつたら、前にも打つ、罵るだつたし、今も打つ、罵るですよ――』

『さうです、離婚したらといふ話も、それは非常に結構ですが――けれど、どうして私が自分の子供を養ふことが出來ませう。さうなると、二人は一人より好いに極つてゐます。アリメンタ（離婚後男が妻子に拂ふ扶助料）ですか？ はい、私もそれは知つてゐます。――けれど、私が自分で夫がそのポケットには私に支拂ふものは何にも持つてはゐないことを知つてゐる時に、それが私に何の用をすることでせう。そして若しも夫が出て行つたとしても、或は又私がどこか他のところで土地が得られたとしても、どうして私が一人で土地を耕やすことができませう？ 一緒にゐれば、どうにかやつて行けるのです。』

『讀み書きを覺えよと云ふんですか？ そしてあなたは私共が何

時それをする時間があると思ふのですか――牝牛は乳を絞らなくてはならぬし、豚は飼はなくてはならぬし、水は汲まなくてはならぬし、赤坊は泣くし、別の子供は病氣だし――こゝでは勉強は子供だけがすればいゝんです。』

『さうです、子供達は學校に行きます――けれど彼等はそこで何を學ぶのです？　彼等は子供達を臺なしにしてゐます！　子供は前には自分達の親がいふ通りにしました、だのに今日は彼等は家に歸つて來て私共にすることを命令します。何といふ無茶でせう！　鞭ちでもしなければ、何一つ子供が覺へやうとあなたはお考へですか』

ある冬の日に、私はマスロフ、クットの一つの町を選んで、一軒々々に入つて見た。そして前に述べたことが、目覺めた農民大衆が私に云つたことであつた！

その次に私は市場に這入り込んだ。そして無駄話をしてゐた三人の派手なカーチフを被つたバーバ(農姉)達に、長い間踏み躙ぢられて來てそんなに澤山の權利を持つことは、どんな感じがするかといふことを訊ねて見た。

『おゝ、可愛いお方、それは皆阿呆らしいことですよ！』と一人が答へた。『少しも變りはありません――若しも神様が私共に一年中喰べられるだけの穀物を下されば、何もかもいゝのです――がもしも下さらなかつたら、あなたがいふその婦人の權利も、どうして私共を援けやうといふのでせう？』

私は、ソウホズ政府の農場で働いてゐるパトラチキ達のところに出かけて行つた。

『眞個にあなた方には、以前にあつたよりはいゝのですか？』

『何があなたにいくらかでも好いと考へさせますか？　私共はその頃は夜明けから日暮れ迄働きました――けれども私共は、何時もそれを續けてゐなくてはならぬといふこともありませんでした。私共は歌を唄ふ爲めに仕事を止めたり。日向に轉がつたり、眠いと思へば眠ることさへ出來ました。そして監督は少しも構ひませんでした――監督は自分でもさうしましたもの――けれど今はあの人達は私共を仕事に縛りつけます。私は三時に歸ります。家に歸ると私共は大抵は働かなくてはなりません。前には、私共はそれからは何も出來ないほど、遅かつたのです』他の二人は、クス〱笑つて、それに賛成した。彼等は、馬とそれを使つて働く男子が家族の中にゐる婦人には、多分前よりはいゝといふことを認めた――けれど彼等のやうな寡婦や獨身者には――土地は彼等がそれを働かす手段を持たないから、無意味であつた。

重い荷を運ぶ婦人、耕やし、枯草を苅り、收穫をし、穀物を扱き燒き、生命を造る營みの至るところの部分で必ず幾分かの役割を爲す婦人。野に出て男子と共に働き、ロシヤの心臟の鼓動である黄金の束を苅り、これを束ねることを手傳ふ婦人、太陽と風とに燒かれ痛められてストラダ――苦しみの時――に大地の果實の分娩を助け毎年々々彼等自身の果實を生み出す婦人は美しさのない苛酷な生物と化してしまつた。それらは長い苦しみではあるが、決して理想化されることはない。男と女とは同じ樹の異なる枝であり、同じ過去の所産である。それで彼等は多くの共通の特性をもつてゐる。彼等は虚言を云ひ且つ竊む。何故なら、それは彼等の日々の勞働が彼等に與へる僅かな見苦しい最低度以上の何かを彼等に得させる唯一の手段だからである。彼等は自分達の生活がそれにかゝつてゐる時には惡鬼のやうに働くであらう。が、彼等自身の僅かばかりの土地の

外で働く時には、彼等は怠惰でグズ〳〵してゐる。彼等は動物に對して非常に優しくて、反對に人間に對して信じられぬほど殘酷なことがあるが、又彼等はその丁度反對でもあり得る。彼等に通有性を與へることは、無要なことである。何故なら、彼等は凡てのものだからである。私は、娘が家に入れて置かないからと云つて「年老ひた病氣の父親が、家畜と一緒に吹き曝らしの小屋の中に住んでゐるのを見たことがあつた。けれども又飢饉期に若い農夫達が、彼等自身が無しで暮らさねばならなかつた時に、老人達に與へる一日分の食糧を投票で決めたといふことを聞いた。打つたり罵つたりするのは男ばかりではない。婦人は、あなた方が分つたらあなた方の血が氷るやうなひどい言葉の激流を吐くことがある。一度は私は農婦達が自分の夫を毆るといふことさへ聞いた。そして時によると、人々が云ふのであるが、ゼンアットデル(共産黨婦人部)に來て彼の妻から受ける虐待を訴へるのは男の方だといふことである。傳說も亦、祭日に火酒とサマゴンカ(家庭でつくる飲物)を皆飮むのは男だとしてゐる。けれども復活祭に　私は二人の年老いた茶呑友達がどの農夫にも劣らぬ凄じい有樣で、町を千鳥足でよろめいて行くのを見た。底の方には、彼等はシッカリした詰物を詰めてある。けれども何世紀となく育くまれて來た迷信と恐怖との層をはねのけるには、一世紀以上を要するであらう。そして男子よりも婦人はより多く尙ほ過去にとり附き、尙ほ敎會に群がり、僧侶が嘗つて彼等に語つた奇蹟や惡靈を信じてゐる。

マスロフ・クットの婦人達は　自分達の困つたことや隣家のことを四方にとり止めもなく話し乍ら、町を上つたり下つたりする。彼は自分達の家の正面に、日向草の種子を嚙み乍ら、この事あの事について泣言を並べ乍ら何時でも並べ乍ら、何時間となく座つてゐる。——そして物の改善を助ける爲めに集會に來ることを求められると彼等は輕蔑して頭を振る。この村のゼンアットデルのオルガナイザアのナタリヤ・グルーツドッは、黨の學校に學んで來た精力的な小さな婦人であるが、この婦人達に對しては、殆んど何も爲すことは出來なかつた。けれど彼女は失望してはゐない。

『私共は、年老つた人には出來るだけのことをしませう』彼女はかう私に語つた。『けれど、結局は彼女達に何かを理解させやうとするのは無理です私が望みをかけてゐるのは、若い人々です。』

けれど、こゝに於いてすら、何事かは出來た。昨年、彼等は始め



協議會休憩時間の二人のロシヤ農村婦人

て村のソビエットに婦人を選擧した——三人であるが、婦人は只一つの事にのみ役立つなどゝいふ猥褻なことを云ふ一團の嗤笑つてゐる中農達の反對を押して選擧した。不幸にしてこの三人はよく選まれなかつたので、殆んど仕事をしなかつた。そしてソビエットの中農達も彼等を助けることをしなかつた。今年は他のところのやうにソビエットに加はる婦人の數を増加しやうとするよりは、よい仕事をすると信頼ができる、別の婦人を三人探し出さうといふことが決定された。誰が最も適任であるかを協議する爲めに、代表者の會議と教師の會議と、母の會議とが召集された。私は村の讀書室で開かれた、代表者會議に出席した。こゝでソビエットの議長が、地方ソビエットの意義と職分との大略を語つた。村で文學を解する凡ての婦人の名が擧げられた。そして凡てが率直に批評された。

　マリヤ・ダビドーワについて、或る人は『あの人は隨分よく知つてゐる！』と、云つた——けれど別の者が『さう——あの人は隨分よく知つてゐるが又隨分よく飲むからね——私達はあんな人をソビエットに出したくない——』と云ひ出した。

　別の人に就て彼等はかう云つた『あの人は自分の家庭内の始末でさへ出來ないのに、村の世話が出來る樣な能力があるだらうか？』ナースチヤ・ステパノワの名が出た時には、贊成の呟きが起つた。

『あの人は好い働く女だ——あの人にしよう——あの人は又好い闘士だ。そして自分の考を男に述べるのに少しも怖れない。』

　ナースチヤは隅の方に坐つてゐたが、眞赤になつた。そして鋭どい音をたてゝ自分の指節を引ぱり乍らやり出した。

『けれど私は無學です。私は何にも知りません』彼女は反對した。

『心配しなさんな、あなたは覺えますよ——あなたは話が出來る。出來るでせう？　そしてその事が、こんなソビエットの會合では一番大切なことです。書き物をするには、別の人がゐます。』そして彼女の名が、候補者に立てられた。

　ゲニヤ、ユーコヴァの時には、彼女の父親が中農であつて、今年は中農はソビエットに選擧をせず乃至は選擧されないことになつてゐたので、非常な激論があつた。

『さう、けれどあの人の父親が中農であつたつて何だらう？　あの人は自分が教師で好い勞働者です。そして彼女は貧しい農民の利益を擁護するでせう』

　彼女も承認された。その頃に、ゼンアットデルのオルガナイザアであるナタリヤ・グルーッドワの名が來た。

『無論、私共のナタリヤは上げなくてはならぬ——あの人はあの人を除いた私共凡てを一緒にしたより多くの事を知つてゐる——それに誰が男子にあの人のやうに公平に振舞はせることが出來やう。』

　婦人達は、前以つて自分達の候補者の爲めに運動をして、村の凡ての組織に彼等を支持せしめた。舊ソビエットの成員との特別の會合に於て、凡ての人は共産主義者の議長を始めとして、婦人を慇懃に扱ひ、子供にキャンデーの片らを持たせる時のやうな風に、彼等を助けることを約束した。男達が笑つたり、戯談を云つたりするといふので、婦人オルガナイザアに咎められた時に、議長は『左樣、けれどあなた方は我々が婦人を眞面目にとると考へることは出來ません。どうです？』と、答へた。けれど、婦人をソビエットに選ぶことは、政府の政策であつた。それで投票日には、議長自身がその三人の婦人が選ばれるやうに有力なアッピールを爲し、婦人が政府の仕事に携はることの必要を力說した。中農の成員が選擧權を奪はれ

たので、婦人達は反對なしに選ばれた。そして彼女達は、今年はソビエットの仕事に理解ある有要な役割を果してゐる。

マスロフ・クートでは（プログラムに「觀物」が加へてないと）婦人を會合に出席させることが困難であるのに、次の村のアルチャンゲルスコエの集會所は、會合に來る婦人達を收容し切れない。三月八日の婦人デーには、彼等はレイヨン（といふ地方）中から皆やつて來た。集會は正午と定めてあつた。けれど婦人達は、或者は徒歩で又或者は馬で、遠きは四十ヴヲルスト（ヴヲルストは一哩の約三分の二）離れてゐるところから一日中絶え間なく到着した。會合が開かれたのは、六時過ぎであつた。そして婦人達は終日辛抱づよく待つてゐた。夜には集會所は詰め込まれたやうで、その上に數百人の婦人が外側の町に立つてゐた。一つ々々の村が協議會を祝賀し、自分の村の婦人達が過去一年間にした仕事について報告をする代表を出した協會組合やソビエットでどんなに彼等が働いたか、どれだけの人が讀み書きすることを學んだか、次の一年の爲めに彼等がどんなプランを立てたか、などゝいふことであつた。彼等の中の或者は、ハッキリした響く聲でよく喋べつた。が多くはつかへてしまつて、傍から教へて貰はねばならなかつた。そして一人などは終る前に氣が挫けてしまつて、演壇から泣き乍ら走り去つてしまつた。けれども、この事が現在かくあるのを見る事は、そのほの暗いホールの中に過去の退屈な生活を出はなれて、人生が自分達の爲めに何物かを有してゐたといふことを始めて學びつゝある、これら數百の婦人達の輝く眼を見ることは、それは一つの奇蹟であつた。

別の日は、三十人の婦人が農場を訪問にブリクムスリから着いたところだと云ふ知らせがあつた。彼等の代表は私に、二百人の婦人から成る彼等の代表者の會議が、この遊覽旅行に自辨することの出來ない人々を送る爲めに金を集めたといふ事を語つた。ブリクムスクは縣の都市の一種であるので、マスロフ・クートの村よりはその社會的等級に重要さを有つてゐた。そしてこの代表者の團體は、眞赤なドレスにカーチフをつけ、ヒラ〳〵する圓いリンネルの上着を着て、縮れた髪に長い金の耳飾りをした大きな身體の藥店の女主人から、黒い着物を着て可愛い小さな魔法使ひのやうに杖に倚つてトボ〳〵と歩く小さな年老ひた農婦迄、彼等の凡てを含んでゐた。この老人は七十歳を越してゐたらしく、ゴムの歯の間から聞き分けられないロシヤ語の流れを吐き出した。彼女の輝いた眼は、凡てのものをうけ入れた。

彼等の案内が濟むと、全部が茶を飲んだり私の問ひに答へたりする爲めにやつて來た。

私は彼等に彼等の町で過去十年間に婦人の生活に起つた變化の有樣を私に語つてくれるやうにと求めた。

團體の指導者である熱心な若い婦人は、明らかに智識階級の出であるらしく、澤山のノートをとり出し乍ら、私の問に答へる爲めに立上つた。

『あなたは、私共のところではソビエットの權力は、千九百二十年迄來なかつたといふことを知つて下さらなくてはなりません。それ迄はこの地方では内亂ばかりであつたのです。ソビエット政府は婦人に經濟的と社會的と政治的の全部の權利を與へました。それが認めてゐる‥‥』一人の農婦か手を振つて彼女を止めた。

『私に話させて下さい！』彼女はさう云つた。そしてその通りに話し始めた。



勞農婦人全露大會に於けるカザキスタンの代表者達

『第一に、同志、前にこのやうなことはあり得ませんでした！　考へて下さい――この多くの婦人が現に一緒になつて遊覽に出かけて來てゐるのです。この國では農家の女は、前には汽車にさへ乘つたことはなかつたものです！　まる一年、私共は組合に出たり集合に出たりしてゐました。今、私を御覧なさい。私は讀み書きの勉强迄しました――ポスターを見ても、私は自分でそれが分ります。そしてシベリヤに行つてゐる息子から手紙が來ても、私は自分の隣家の人のところに阿呆のやうに走つて行くことも要りませんのです！　それから、私はもつと何か別なことをあなたにお話しませう。私共はもう少しも恐くはありません。それが肝腎のことです。私共は自分の夫を恐れません。私共は自分がする凡ての事にあの人々の許可をうけることが入りません。そして私が一人の代表である以上、私はもう決して宗敎を信じません――私はこの敎會のする事が全部どんなに馬鹿げたことであるか、そしてこの長い年月、どんなにあいつ等が私共を馬鹿にして來たか知つてゐます。私は、こゝにはもう敎會に行つてゐる者は一人もゐないと考へてゐます。』

彼女は、若しも他の者が又話し出したがらなかつたら、何時迄も話してゐるであらう。産兒制限の問題の議論になると、彼等を止めさせる手段はなかつた。これについては、私の村落婦人についての何時もの經驗とは反對に、彼等は凡て敎へられてゐる樣に思はれた。私共が新しい道德を論じてゐる間に、藥店の淑女は私の所に摺りよつて來て、『さあ云つて御覧なさい、同志、若し私があなたの夫を奪つたら、私に對する貴女の態度はどんなでせう？』と云つた。

私が自分の問を終らないうちに、彼等はアメリカについての自分

達の間を始めた　彼等は、何時革命が起るか、そして私共がゼンアットデルの組織を持つてゐるかどうかを知りたがつた。彼等は、特に私共がロシヤに於ける婦人運動は　その周圍にフェミニイスティックな何物も持たないといふことをよく理解することを望んでゐた。『私共は婦人を男と對抗せしめやうとしてゐるのではないのです』と、指導者は辯明した『そして私共はあなた方がアメリカでするやうに、彼女が女であると云ふだけの理由で婦人を公職に選擧しやうとはしないのです。例へば、私共は中農の婦人には中農の男に對してのやうに直ぐに反對の投票をします。』

村落に覺醒が來る時には、それは何時も健全な形では出來ない。ゼンアットデル、劇場、圖書室、離婚法、及び農業改善法と竝んで紅や白粉がやつて來た。消費組合が更にもつと必要な物品を缺いてゐる時にさへ時折り提供しなくてはならなかつた。コスメチックを買ふ餘裕を持たない人々は、大根の汁と澱粉とを用ゐて驚くべき立派な化粧をやつてゐる。日曜や祭日には、高い踵の靴が村の通りの塵埃の中を活潑に歩いて行く。ロシヤに於いて建設されつゝある新しい秩序の土臺を爲す人間は　他の凡ての人間と非常によく似通つてゐる。それには何にも特に驚嘆すべきものはない。たゞ驚嘆すべきは、全ロシヤにわたる各村落に、新しい秩序が與へたところの最もよきものに贊同し、讀み書きすることを學び、託兒所をつくり、劇團を組織し、そして恐らくは又男子達に農業法改善の實例さへも示してゐる婦人が、(それが二人であるか二百人であるかは問題でない)かくされてゐるといふことである。

村落の婦人は、土地については男子と同じ權利を持ち　以前はそこに出ることを滅多には許されず口を利くことなど無論許されなかつた、村の集會で男子と同じやうに、一家を代表する權利を有してゐる。無數の農婦が自分の一家の頭として自分達の土地を耕してゐる。そして大多數が疑ひ深く引込み思案でゐる一方、自由に自分の考を語る人々も少なからず發見されてゐる。前には自分達に關係のない事には口を出さぬやうに教へられてゐた若い人々でさへ、好意ある注目を得るのである。昨年は十萬の婦人が、ロシヤソビエット共和國及びウクライナに於て村のソビエットに選擧されたが、千九百二十七年には、更にそれ以上すらあつた。そして百六十九人の農婦が、モスコウに於けるソビエット總聯合協會に參加した。婦人が投票に參加する率は、投票に必要な文字を解してゐる數の五分から九割の相違がある。けれどその數は毎年増してゐる。シベリヤの村のソビエットに於けるのみで、八千人の婦人議員がある、そして四十五のシベリヤの村は、婦人をソビエットの議長としてゐる。

彼等は、常にその地位に止まることが仲々に困難であることを發見してゐる。例へばアンナ・サラマトーワは、ウズネセンスクの村の議長に當選した。村の人々は、彼女の仕事を充分に賞讃することは出來なかつた。その地方の農夫で大きな家族を持つた妻に先立たれた一人の男が、その家政的の全部の才能を村の事に浪費するのは恥だと考へた。そして彼女に結婚の申込みをした。するとそれを彼女は承諾した。夫が自分にその仕事を廢することを期待してゐることを知つた時の彼女の驚きは、どうであつたゞら　。村のその他の者も總てそれを期待した。

『その荷車からお下りなさい！』と、彼等は云つた『あなたは結婚したから、もう獨立した人間ではありません。あなたの主人は食べ物が必要だ。だのに、あなたはどうして村を治めることが出來ます

か。』けれど彼女は自分の地位を去らなかつた。そして最後には自分の仕事と自分の夫も何とか持ちつゞけた。

次には、全ロシヤ中央實行委員會の委員であるフエドシヤ・オシツポヴナ・シユプローワがある。私は彼女の寫眞を新聞で少くも一ダース度ほどは見、そしてモスコウのゼンアツトデル會議の一つで彼女と話をした。彼女は何時も同じ簡單な百姓の着物をつけ、頭には白いカーチフを被むつてゐた。それはこの凡ての公けに知られた事によつて、少しも昔と替へられなかつたものであつた。彼女は五十歳で、シベリヤのアルタイ州から來る。私が彼女に自分の生涯について話をする事を求めた時に、彼女は餘り話しする事はないと云つた。


勞農婦人全露大會に於けるトルコ、ロシヤの勞働婦人と獨逸代表

『私は貧農の娘でありました。父は、早く死に、澤山の家族をのこしました。私が十四になると、母は私を修道院に働きにやりましたそこの聖人達は、私を裸足でそして殆んど裸體で、自分達の家畜を飼ひにやりました。私はそれが堪へられませんでした。それで逃げ出しました。そしてその後別の農家に奉公しました。私が十七の時母は私を四十になるムーヂック(百姓)に結婚させました。酒をのむと、彼は狂犬のやうに醜惡になつて、死ぬほどに私を擲りました。私は彼と別れたいと思ひました。けれど私の母はそれは罪惡だと云ひました。

『そこに千九百十七年が來ました――そして私共の村は何度も種々の人の手に渡りました。千九百十九年には、コルチヤツク軍が來ました。私は私共のボルセビキのムーヂツクを匿しました。するとそれを坊主が見ました。その後兵卒が來て、私を擲ちました。それ以來私は宗敎には用はなくなりました。私は貧しい農夫の爲めに働き始めました。彼等は私をヴヲロスト(町)の協議會の代表者に選擧しました。そして私は、一晩中泣いてゐました。世界のどこに、彼等は私をやりたいのか? けれど私がそこについて事情に通じて來ると、私の眼は稍々開かれました。彼等は私をオーエツト(郡)協議會に選びました! 凡てが私が始めて家を離れた最初の旅行に於いての事です。漸やく家に歸ると、私は勉强を始めました。そして毎晩二字或は三字を覺えました。最後に私はモスコウのソビエツト評議會に送られました。農婦達はあの人も私共と少しも變らない女だ。だのに、あの人はモスコウのウツシツリ(全ロシヤ中央執行委員會)で働いてゐる!』と云つてゐます。今は私は字が讀めます――私はもう文盲ではありません――そして私は歩ける間は、私共の農婦の爲めに働きませう。』

『あなたの仕事に對して、男達の態度はどんなですか?』私は彼女にたづねた。

『非常にいゝのです、と云はせて下さい! 彼等は私共の權威を尊敬し始めてゐます。婦人が時としてソビエツトで男子よりもよく働

くからです——彼等はどうしたら經濟的になるかといふことを前よりも解りました。始めは男子は私共の上に牡鷄のやうに臨んでゐました。何が婦人に分らう、と彼等は云ひました——あんた達が知つてる事は、壺や鍋のことだ！と、けれど今日は變りました。』

『そして、あなたの主な問題は何です！』

私共は澤山の問題を持つてゐます——學校はその一つです——それから私共の豫算はまだ貧弱です。次には私共はまだ亂暴者や馬泥棒に苦しめられてゐます——だのに私共の法廷は、充分に嚴しくありません。その他には——私共の農家の女も勞働婦人と同じやうに出産の時には四ケ月休養を與へられなくてはなりません。だのに彼等はその次の日には野良に出てゐます！　私共のムージックは、自分達の妻よりは、家畜の方を大切にします。』

農婦の活動が表はれてゐるのは、ソビエットだけではない。彼等の多くは、貧農、寡婦その他に援助を與へてゐる村の相互扶助委員會に於いて活動してゐる。五十萬以上の農婦が、消費組合員であり十八萬は手工協同組合の組合員であり、多數婦人が農業協同組合に加はつてゐる。これらの組織の男子の組合員に較べては、一人の人が一家を代表する習慣があり、男子がそれを尙ほ主張する爲めに、割合はまだ少ない。少數の婦人は裁判官となつた。私共は先頃その一人を途中で拾つた。彼女がそれで自分の受持區域を旅行して廻つてゐた千九百十年のフオード車が、壞された、彼女は私に準備としては九十六人の男と十六人の女と共に、ロストフで一年の講習を受けたと語つた。この講習には、小學程度の敎育を要するだけであつたが、ソビエット政府の政治原因に關する完全な智識を必要とされた。婦人は四人だけが講習を卒業した。試驗は、書籍の智識よりも常識を用ゐる能力を土臺としてあつたと、彼女は語つた。村に於いて彼女が出逢つた事件の多くは、扶養金に關するものであつた。

『裁判官たることは。容易しいことではありません』と、彼女は語つた、あなたは事件の凡ゆる方面を注意深く秤にかけなくてはなりません——それにあなたはソビエット法では、判例でやることが出來ません。凡ての事件が、その特別の事情によつて裁斷されなくてはならない——そしてどこに正義があるかを探し出すことは、いつも容易のことではありません——時によるとあなたの良心は、事實が證明してゐるやうに思はれる事より、もつと別の事をあなたに語つてゐます。そして社會の利益といふことは、無論何時でも眞先きに考慮されなくてはならないのです。彼女自身は、强制的手段よりは寧ろ道德的說得の信奉者であると說明した。が、屢々妻が夫に對する不滿を持つて來ると、夫は驚いて彼女のところに馳けつけて來ることがある。そしてその夫を說いて見て、彼女は一度はその事件を法廷に持ち來たすことなしには、和解にすることも彼を道理ある解決に贊成することもその何れも出來ないのであつた。

ロシヤに於ける新しい婦人の狀態を考へて見るに當つて、變化は都會よりも村落の方に遙かに後れて來ると云ふ事實と、農村婦人の大多數はまだ革命によつては殆んど變へられてゐないといふことよく頭に持つてゐなくてはならない。けれどこれらの力弱い大衆を何時か覺醒せしめることが出來るかどうかを訊ねる懷疑家には誰にもプリアンスリ縣のヴエルッエヴカ村の通信員によつて報道され近代のリシスツラタ・アキシンヤ・カラセヴアの話を聞かせ、勇氣を起さ せるべきである。

アキシンヤは、集會に出席して、ヴエルッエヴカの政治的のこと

に加はり始めた。彼女の家族は怒つた。が、時に彼女の夫シメオンは甚しかつた。彼はそれを忍べるだけ、彼女が演說しやうとする迄我慢してゐた。彼は酒を飲み、彼女を擲り、そして彼女に男の仕事に携はるなと命じた。彼女は暫時泣いた。けれども眞に涙を拭いてゼンアットデルに走つて行つた。半時間を經たないうちに、村の凡ての婦人が學校に集つてゐた。婦人達の集會が開かれた。

日が暮れ始めた。太陽は休みについた。けれども男達にはまだ休みはなかつた。子供達は喚き叫んだ。牝牛は乳を絞らねばならなかつた。豚は夕方の食事を求めて執拗に騷ぎ出した。どんな禍が落ちて來たのか？　女達はどこに行つたのか？　隣りの者は隣りの者の所に氣も狂はしく走つて行つた。『お前のとこのはどこにゐるのか？』——『ゐない』——『そしてお前の所は？』——『見えない』——『多分誰かゞ彼等を皆竊んで行つた！』——『不思議な事だ四十年、俺は太陽の下で暮して來た。そしてこんな事は一度もなかつた。』

夜になつた。終に男達はヴエルッエヴカの村の別の半分は、學校にゐると云ふことを發見した。彼等は火事にでも行くかのやうに學校に走つて行つた。シメオンも無論彼等と一緒だつた。彼等は學校をとり圍んだ。彼等は恐しい騷ぎをした。彼等は嘆願し又嚇した。

女達は、無氣味にも默つてゐた。

そこにアキシンヤが手に紙片をもつて出て來た。そして男達に怒鳴つてもそれは女達をどこにも連れ行くことは出來ないと云つた。——彼等は、その紙に書いてある事を聞かなくてはならぬ。靜かになると、アキシンヤが讀み始めた。

『結婚してゐる男性のヴエルッエヴカの村の凡ての村民に、結婚してゐる女性のヴエルッエヴカの村の凡ての市民から。最後の通牒。ヴエルッエヴカ村の市民たる我等の凡て結婚婦人は、困難な狀態の下に住み、我等の夫は我等を擲ち、我等は彼等から禮義ある言葉を聞かず、彼等は我等を家畜の如くに扱ふ故に、我等はこれ以上はこの種の侮辱に堪へることは出來ない。それ故にこゝに我等はこの最後通牒を書く。我等は家庭に於いて働き、我等の夫の援助者であることを承認する。しかし乍らその報酬として、我等は我等の夫の意志に全然委ねられざること、彼等は彼等の手をもつて左様に勝手に振舞つてはならぬこと又我等を『鬼婆』『すべた』『おひきづり』その他の口に出來ない名で呼ばざることを請求する。そこでこの事も亦我々は云ひ添へる——我々は彼等が凡てその名をこの紙に署名する迄は、こゝを解散せず、又我々の夫のところに歸ることをしない。』

少數の男は笑ひ出した。けれど婦人は眞劍で沈默を守つた。それで男達は、笑ひ事ではないといふことを理解した。彼等は婦人を罵倒し始めた。

アキシンヤは男達に行儀正しくする事を求めた。そしてその契約が調印される迄は、婦人は學校から去らないといふ事を繰返した。

男達は立つてゐるところで足踏みをし、盛んに惡罵をし。もう充分だと叫んだ。その後で、羊のやうに一人々々彼等はアキシンヤのところに行つて、慄へる手をもつて紙に署名した。文字を解さないものは、十字を書いてその代りとした。

夜半になつたその集會が解散した時に、シメオンはコソ〱と歸路についた。鼻の下で呟き乍ら。

『毎日何か新しいことがある。行くところに、何か新しい、何か變つたことがある。けれど、女房を擲らずに暮すのはどうしたらいゝだらう‥‥？』（セシカスミスの『ソビエット・シヤの婦人』から）



# 春の鏡

―口について―

柔かにものいひたまふ言葉には
柔かに心の波はささゆれて
いともしたしくわれながら
よろしき言葉口にする。

こまやかに話したまへば
心持花のごとくにほころびて
いつも明るき灯の如く
人をも照らし身も照らす。

こは食慾のためのみならず
またくちづけのためのみならず
人の心をつなぐ絲を
蠶のごとく吐きだすところ。

二

親しければぞものいはで
ただにこやかに顔を見て
二つの椅子もへだてつつ



生田花世

いとしづかなるこころよさ。

親しければぞものいひて
笑ひ聲などもらしつつ
二つの椅子をもちよりて
いとも明るきこころよさ。

いづれにしても心持よ
自由に浮ぶ春の雲
がらす戸ごしに眺めたまへ
今日こころよし春の空。

——ある女の會にて——

三

言葉と言葉まどやかに
一つの輪となり春の部屋を
いまこころよくめぐつてゆく
しづかにまたもにぎやかに。

ふと電燈の消ゆるやうに
大きい大きい時代の波に
この私たちの生涯も



さらはれたなら何とする。

言ひたいだけは今言ひませう
非常にいいことを話しませう
言葉がぴつたり行かなくも
笑つてうなづく雅量をもつて。

——言葉について——

四

人より人の中を往き
人のすがたに見るものは
われのすがたのありのまま
かへりみすればわれを見る。

憂きわれを見て憂しとなし
明るきわれをうれしとす。
かぞへあぐればはてしなく
咲きてゆくなり日日の花

うつるは白き櫻なるか
ふみにぢられしたんぽぽか
鏡は多し花も多し



多く廣きはうれしとぞ。

――海を見て――

五

吹く寒風にさからひて
街を歩めば
快しとぞおもふなる
いのちの波
身うちに
あたたかく
なみだつ。

おのれいままさに
一つの池
いのちの波
なみなみたたへ
思ひ出の木の葉
右寄り左寄り
波はあふれず。

――街を歩みし時――



ゲオルグ・カイザー

# 遠近

シャポー

巴里は十月も半ば過ぎてから、そのセゾンの計畫の實施にかかる。一九二三年の秋私の接した最初のアトラクスイオンは、スタニスラウスキーの藝術座だつた。五年後の今季アトラクスイオンは、――新聞雜誌に映じてゐるところだけから判ずると、アトラクスイオンと呼ぶほどのものもないやうである。第一國立オペラ座やオペラ・コミイクが五年一日の如く、――おそらく十年一日以上だらう、「ファウスト、」「アイーダ、」「タイス、」「マノン」「トスカ、」「お蝶夫人」を繰り返してゐるのが氣になつて仕方ない。歌劇や喜歌劇にはもう切り拓く新生面はないだらうか。それに比べれば演劇の力にはまだアトラクスイオンがあるといつていいくらゐである。

メゾン・ドゥ・ル・ウーヴルは今季面目を一新したさうである。但し一新したのは劇場內の裝飾がである。壁はきらきらする白に塗りかへられたさうである。リユーニエ・ポーは或友を顧みて、「ル・テアートル・サル・ドゥ・バンだね」と苦笑した、――かどうかは知らない。浴場小屋とでも譯したらいいのか。壁の色が五年前に何だつたか、はつきりは憶えてゐない。とにかく薄汚れのした感じではあつた。汚れをごまかす爲に大小の壁掛が張つてあつたやうでもあつた。何分狹い小屋なので地下室を遊歩場にあてゝゐた。其處には新刊の書物や文藝雜誌と共に、セザンヌやゴーギヤンのよい繪端書を賣つてゐる店があつた。店のお向ふは小綺麗な酒場だつた。酒場にはアルサス風の衣裳を着けた娘が一人で機敏に立ち働いてゐた。場內がどう新裝されたにしても、あの娘だけは昔のやうに白い頭布をつけ、赤いコルサージをきちりと合せてゐて欲しいと思ふ。

アーノルド・ベネットは此程新しい「ファウスト」を書き下した。近くヂエラルド・デュ・モリエ卿の手によつて、聖ジエームス座に上演せられるさうである。評者は句句がモダーンだ、いやウルトラ・モデルンだと言てゐる。が筋を讀んだだけでは、大してモダーンとも感じられない。登場人物及びだいたいの筋はゲーテ通りといつていい。違つてゐるのはマーガレットがおしやれなモガな點である。彼女は惡魔の甘言にのせられて一時ファウステイングの情婦になることを承諾する。が十九歳の少女は所詮八十代から四十代に戻つた學者の道伴ではあり得ない。抱擁がすむと老人は若い女の話の無味なのに倦怠を覺える。女は女でおいぼれに若さを蹂躙せられたと憤慨し始める。で結局女はもとのファイアンセの方に歸り、男は「汝自身を知れ」といふ惡魔の訓戒を嚙みしめながら、辛抱強く彼自身の老衰して行く姿を見つめることになる。

筋を讀んだだけで批評をするのは亂暴だ

アーノルド・ベネット



が、ゲーテの「ファウスト」がある以上、こんな新作を發表するのは少しふざけすぎてゐるやうな氣がする。

ピランデルロも此程新しい戯曲を書き上げた。題はまだ決定されてゐないが、多分「伯爵夫人一座」となるだらうといはれてゐる。とにかく美貌で、藝道に熱心な伯爵夫人を中心とした俳優の一團を取り扱つたものである。彼女は、榮冠をかち得ずして沒した或無名作家の戯曲を上演しようとする。がどの劇場も彼女の申出を受付けてくれない。一座のものは上演の場所を求めて旅に出る。サイデインニアに着いた時彼等は賑かな結婚の行列にぶつかる。で彼等は式の終るのを待つて、その人達に彼等の演技を観てもらはうとする。だがサーディニアの人達は劇と現實とを別にして見る目を持つてゐない。彼等は芝居に彼等の思ひ通りの結末をつけなければ承知しない。そこで大變な紛擾が起る。

ゲオルグ・カイザーの新作〝Joup d'Octobre〟がカメルシュピールで上演された。「十月の或日」、十月に何か特別の日かあるのかどうか筆者は知らない。何の故に此作がかう名づけられてゐるかといふことも、佛語の筋を讀んだだけでは解らない。或貴家の令孃がフランスの田舍町に住んでゐる。彼女は或日美貌の陸軍中尉と行きあつた。遇つたのは一二度ではなかつた。寶石商店の前で、教會で、そして劇場で、――つまり同じ男と一日の中に三回もぶつかつたわけだつた。で彼女は空想する、あれが私のフイアンセで、今夜私の部屋に訪れていらつしやる。その夜彼女はそつと寢室の戸を開けてみた。はひつてきたのは臺所に用のあつた肉屋の小僧だつた。結果は父を捜す赤ん坊である。令孃は相手はあの中尉だと宣告する。中尉も令孃の熱意に動かされて、では結婚しようといふことになる。ところが肉屋の小僧も默つてはゐない。彼は令孃の少なからぬ持參金を想ふと、自分の父權を主張せずには居られない。で彼は訴訟を起すことになる。輕く取り扱へばボードヴィル向きの喜劇だが、カイザーはこれに悲劇的な結末を與へてゐる。訴訟が小僧の勝ときまると、中尉はその劍の上に身を伏せてしまふのである。

サロン・ドゥ・ル・オートモビールは數年前からパリの年中行事に加つた。金持連や自動車會社がいろいろ目新しい型の自動車を並べて見せるのである。私はそのサロンで賞をとつたアントアンといふ男のことを思ひ出す。彼はかなり評判をとつた彫刻家なのだが、粘土をこねまはすよりは女の頭をいぢくつてゐる方が面白いといふので、トゥイラリーの傍に立派な美髪店を開いてゐた。「彼は鋏を持つてゐるから油斷するな。」と或パリジャンヌは私に注意した。つまり彼は彼の審美眼を滿足させる爲、甚だ無遠慮にじよきじよき髪の毛を切つてしまふからといふのだつた。

自動車のサロンと共に今年はサロン・ドゥ・ラ・ミュズイクといふのが創始されるさうで

ある。これは各國の作曲家並に音曲出版業者とはかり、その年の作品でまだ上演も上梓もされないものを集めて展覧するのださうである。サロンの開期中は各國の音樂者を招いて音樂の講演もしてもらふ由。

此二三十年來音樂會の、殊に管絃音樂會のプログラムにヴアグナーとベートーヴエンの名の見えなかつたことはないといつてよかつた。がさすがの巨匠達も走る時勢には追ひつきがたいとみえ、今季のパリの音樂會では殆んど全くヴアグナーやベートーヴエンのものは演奏しないやうである。がといつて彼等は何をもつてそれらに代へようとしてゐるのだらう。――そんなことを考へると、シヤボーはシヤボー自身小さな飛行機にでもなつてパリまで飛んで行つてみたくなる。

# 新らしい支那婦人の服装

笠千鳥

十月になるとすぐ毛皮の必要を感じ出しました、街上に婦人を見ることが、少なくなり中山公園や、北海などで見る美しいスタイルは、劇場、電影場、音樂會でのみ、見ることが出來ます。

去年あたりから、全く變つた支那服の型には、驚くばかりです、上海あたりはどうですか、北平では、ショウキンドに、支那服の仕立上りなどは、出て居りません、安物の出來合は市場などにありますが、上流の家庭では裁縫人を傭つてありますし、中流では、出入の裁縫人に、縫はせます。

最新のスタイルでも、全然各自獨特のもので、多くは洋式を取り入れて、外國人の洋裝店で、仕立させます。

袖は極短かく、せいぜい長くて二の腕まで夜會などでは、肩までのを見うけます。イブニングドレスの感じです、裾は膝まで、或は膝下二三寸位、でせうか、胴廻りはピツチリと、軀にあはせて、線の感覺をはつきりと見せます。

從來は、用布も、夏は紗、秋は紗に裏を附けたもの、冬は緞子や繻子に、毛皮の裏をつけて、ぶく〳〵な、たつぷりしたもので、袖も長く、丈も長く、たゞ大々と押出しの立派といふ、感じでした、着用の季節が、やかましかつたのですが、最近は、自由なもので、花絲革、五花革、綢子、花緞、などは用ひずボイル、ジヨセツト、ちりめん、など、軀の線を美しく見せるため、薄手のものを、用ひます、從つて、毛皮や綿はおろか、裏も附けません、すべてが洋服と同じです、隨分スマートな、良い感じのものを見受けます、寒さは外套を以て、凌ぎます、カラーだけは全く支那式ですが、これがまた、首の細い美しい人に、ぴつたりと合つたのは、かなりチアームされます、高さは二吋から二吋半位のもあります、從來のように、紐やボタンは附けませんで、右の横で合せ目の分らないようにします、そして、首の邊の單調を補ふために、寶石のブロウチなり、造花なりで、飾ります。

色彩も、濃厚なる花模様や、丸模様などは全く廢たれて、無地ものや佛蘭西式の、あつさりしたものが、よろこばれて居るようです無地ものでも、これまでの支那色の、濃厚なお納戸、桃色、紫、などは、野暮な田舍娘・りほか、見向きもしますまい、流行の色は、クリーム、オレンヂ、白、薄みどり、といつたものです、白は葬式着だとて二三年前までは、笑つたものですが、私の見たもので、白の地紋のあるきれに裾と袖口に、こまかい珊瑚で刺繍をしたものも、上品でした、ジョセツトで、袖付からばつと、小まかく襞を取つたのも見ました、黒のフランスちりめんで、袖はぐつと細く手首まであつて、カフスをつめて、赤でほそく縁を取つたもの、スカアトの一方で、細かい襞を取つたもの、袖口と裾を、二三寸づゝ位の、丸さに切り込んだものなど、全く自由で藝術味があります、用布は日本尺の、大幅七尺あれば充分ですから、かなり高價な布を用ひても、大してお金も懸らず、立派なものが着られます、外套は洋式です、襟と袖口と、裾に、毛を附けたものなど、形もよく防寒にもなるので、よく見かけます、ケープにちりめんの大幅物で、裾模様式の友仙模様のあるのを、着て居ましたが、日本からの輸入品ですが優美なものでした　日本の錦紗などで作つたのは、感じがよくつて非常にスマートです。何分にも小幅なのと用布が無駄になるので困ります。メリンスは大幅なのと、かなり柄の良いのがあるので、相當の人が着て居ますが、メリンスはメリンスの感じで、あまり上品で無いような氣がします。

靴も舊式の支那靴は廢れて、踵の高い、繻子緞子などの夜會式です。

髮は無論斷髮です、線の美をそのまゝ艶やかに油を附けて、オールバツクにしたもの、シングルに刈つたもの、前髮をさげたもの、ウエーブしたもの、襟足をポイント型ハート型にしたのも見ます、眉毛は細く長く描いて居ます、口紅はあざやかです。

不景氣のため、餓と寒氣に堪えられず、凍死するものが、一日に幾人があるといふこの北平で、目まぐるしいような流行も、多くはある一部の人の女のみでせうが亦一方に、これのみは、廢れさせたくない、良い風習があります、それは、愛國布といつて、木綿の濃藍色の布で作つた衣服を、男女の學生や一般の人が居て着ます、質素で堅實味があつて、大變良いものだと思ひます。

元來、支那服は非常に、合理的に出來て居て、一枚の着物で、カラーもあり、袴もありすこし活動には不便ですが、この大陸の寒さを凌ぐには、ふさはしい衣服でせう、零點下の寒天に外套が無くても、木綿の着物の裏に毛皮を附ければ、凌ぐことが出來ます、絹物に狐の毛皮を附ければ、輕くつて暖く充分防寒になります、木綿に羊の毛を附ければ安價なので、苦力でも着て居ます。

今年から、中山服着用の人達は、細いヅボンの下に、綿入の褌子をはくことは出來ず、日本のやうに安價な、メリヤス製品はなく、高價な外國品ばかりですから、この寒さを凌ぐことは、困難でせう、前述のモダンガールの服裝もこの一冬を越して見なければ、どんなものでせうか、結局北平では、スマートな服裝も暖かい時のみでせう、まあ、冬の内はブクブクしたものを着て、家の中に、籠つて居るより仕方がありますまい。

日本のキネマの女優が着て居る、寫眞を見ましたが、支那服の下が、袴でなく、褌子(くつ)といつてヅボンのようになつて居るのは、あれは、藝者か、下女で無くては着ぬもので、良家の人は、家庭内で用事をする時には、上着をぬいで、あんな形格で居ることもありますが決して、あゝいふ姿で人には逢ひません、モダンなスタイルだと思ふと、大間違ひです。

# 築地小劇場の「たのむ」と「大寺學校」

岡田八千代

改築後第一回に近松の「國性爺合戰」の通しを出した築地小劇場は、第二回に里見弴さんの「たのむ」と、久保田万太郎さんの「大寺學校」とを出した。

里見さんの「たのむ」は菊五郎の依賴に依つて書かれたものださうであるが、今度築地の演出を見て、この芝居が演出家不必要論者の六代目の手に依つて演出されなかつたことを私は喜ぶ。若し六代目の手に掛けられたとしたら、助次郎、かつ、爲吉は、兎もあれ其他の人物の統一は必ずとれなかつた事と思ふ。此脚本には細か過ぎる程のト書がある。ト書が細かい程そこに動かし難い演出區域があり、そして夫を統一する處の作者の意圖をも又尊まなければならないのだから。今の劇壇に於いて此脚本を、これ丈に演出出來たのは、演出家土方氏の力と此劇場の俳優なればこそである。演出家あつてこそこれ丈に演出出來たのである。脚本も里見氏の作中の逸品だと思ふ。最後に近く、爲吉が思はず助次郎と顏を見合せてから幕切れに至るまでの微細に渡る人間の心の動き、それから幕がしまるまでのこの作者の冴えたメスの用ひ方には思はず、爲吉と共に感激の涙を呑み込まずには居られなかつた。然し其メスの鋭さをあくまで舞臺に光らせた演出家にも私は頭を下げる。國性爺の演出とは數段の違ひがあつた。

俳優中では特に、小杉氏の爲吉、丸山氏の助次郎、秋子さんのかつ、島田氏の豫審判事の出來を賞め度い。中にも氣遣つて居たゞけに丸山氏を一等に擧げる、と言つても其他の御橋氏の警部の歩き方、大川氏？の檢事の白つぽい外套、絶えず長い八字髭を捻つてゐる工合、嵯峨氏の書記の煩さからぬ忠實さ、小宮新見の刑事、楠田氏の近所の男、何れも作者の「夫らしく見えれば好し」と言ふト書に如何にも當て適つて居た、そして、主要人物の芝居をこわさぬ程度での動作が、一樣に巧みに演出された。只三浦氏の巡査の白粉が濃く口紅の赤いのが氣になつたが、「被告内田——何と言つたけかな」と言つてポケットを探る邊、外で騷ぐ子供達を追つて來て、笑ひ顏で警部に報告する所などは少しもわざとらしい所がなくて好かつた。小杉氏の爲吉は、幕の開いた時、もう既に酒が廻つてゐる工合を巧に見せた。「土方殺すにゃ刃物は要らぬ……」節をつけて言ふのは、作者のト書では、かつの方の「雨の三日も……」の方が節をつけて言ふことになつてゐるが斯う替えても差し支へない。？……たんとそいつを聞かされたんだらう」で座布團を枕にして横になる所もト書にはない科だが好い動きだつた。助次郎が火鉢の側へ來るので一旦六疊へ行き、人々の後から爺を覗いて見る所、再び二疊へ歸つて「なアに構ふ事があるもんけえといふやうな顏」をして、わざとガチ〳〵火をほぢつたり音を立てゝ酒を呑んで、かつに目顏でたしなめられ「なんでえ」と言つた調子に居丈高になり思はず振り返つた途端に助次郎と顏を見合せ

ろあの瞬間は息も吐けぬ面白さだつた。丸山氏の助次郎は菊五郎が若し演つたら、犬は、我々が思ひもつかぬ新工夫もあつたであらうが、斯う迄野暮に、かう迄氣の利かぬ爺には決してなれなかつたと思ふ。――只一寸不注意だつたと思ふことは、壁にかけた半纒を見る時、刑事の顔ばかしを見ずに、自分の身に付いた繩の揺ぎが刑事に傳はらぬやうに用心する科がほしかつた斗だ、事件の調べになつて、段々と調子に乘る處、「おつかア水を吳れ」も極自然に出た。秋子さんのかつも、もし、多賀之亟、或ひは喜多村が演じたとしら、必すそこに舊派として、又は新派としての、或ろ傳統的の重さと言はうか立派さと言はうか、兎に角に、他の登場人物は一と際目立つ貫祿を見せてしまふに違ひない。そして、その立派さが、どんなにか此芝居の邪魔になろかしれない、もし夫が邪魔にならぬ程度に演出しやうとするのには、他の役にもこの俳優と同じ丈の貫目のある人を選まなければならないのだからこれは今の職業劇團としては一寸難かしい問題で今直ぐに實現し難い事と思はなければなるまい、私は今度の此築地での此芝居に登場する俳優全部が同じ力で同じ線の上で、働いた事を最も有難いと思ふと同時にどの人物も確かに同じ時代に生活してゐるのだと言ふ事をはつきりうべなはしてくれた事が嬉しかつた。表で騷ぐ小供の聲、どぶ板の響き、雨だれのしたゝり、降りみ降らずみの「じめ〳〵とした際氣臭い」午後それ等の效果も完全に出せた。舞臺裝置も水瓶が上に寄つただけで殆んど作者の指定通りに好く出來た、その上、流しの上の破れたれんじ窓から隣のひあはひにおむつの干してある工合など大變に好かつた。古けた襖紙の色、簞笥、茶だんす、火鉢、座布團其他の小道具、恐ろしく作者の細かい註文もあつたらうが何一つ此戲曲の空氣を破らなかつた。爲吉のこしらへは原作には半纒とあるが、羽織になつてゐた、然し此方が野暮臭くて好い。かつの廂の葉の古けた紺地の浴衣、褪めた桃色の綿甲斐絹(?)この裏の付いた黄縞のむきみやも好かつた慾にはあき子さん少し行儀が好かつた、私はもつと膝を崩して貰ひたかつた。

久保田さんの戲曲がペーパードラマ(此頃こんな言葉を用ふ人は少ないが、以前にはよく用はれたものだ)だと言はれたのはもう昔の事だが、そんなら、今、昔のものを見てさうかと云ふのに、決してさうではなかつたと言ひ度い、同時に、もし築地の樣な劇場が出來なかつたら、まだ暫くは、さう言はれてゐたかもしれないと言ひ度い、私は今度の「大寺學校」の築地の出の出來榮を見て、感激すると直ぐに久保田さんの殆んど脚本としての處女作と言つても好いだらうと思ふ「プロローグ」とその續編を讀んだが、かうしたものでも、築地なら必ず出來ると思つた、如何にも久保田さんらしい淋しいものだが決して紙の上丈の芝居ではない。久保田さんは決して舞臺で演れない戲曲を書いて居たのではなく演る俳優も無かつたし、興行にかける劇場もなかつたのだ。築地小劇場の四年間の努力、勉強强情は、やうやく信賴して好いものになつて來た、これは只演出家が豪いと言ふ丈ではなく、俳優が巧いと言ふ丈でもない、作者が場違いでない魚を投げ出し、腕の冴えた演出家がこれを魚に應じて料理し、その魚の本性と、料理人の腕を傷ける事なしに俳優が味をつけたので、そこで初めておいしく頂ける譯で決してこれは一時のまぐれ當りでも時のひよりでも無いそれ等の魚、包丁、味等を吟味する力を持つた築地小劇場の賜物である。私は今度の築地の二つの芝居を見て只面白かつたとは言へない。有難かつたと言ひ度い。

此劇で登場する俳優の中での逸品は友田氏

と汐見氏との大寺と光長との二老人であつた、以前から此御兩人は共に老け役は得意としてゐられたが、今度ほど深く、そして親しみのある上手さを見せたのは初めてゞある。そして夫は日本人が日本劇を見る親しみからでもあらうが、當代、新舊を引くるめて、此二老人をこれ丈に浮き出させる俳優は、一寸他には無いと思ふ、巧者に演るものはあるだらうが、外形や内容ともにこれ丈には先づ出せまい、同じ位の年輩であつて、しかも裝へも大して違つてるといふ譯でもないのに、二人は確かに違つた性格を見せてゐた、殊に最後の對話——これは作者の白も上手いが、二人のやりとり味——「しかし」といふ言が多くて少し氣になつたが——此邊は確かに戯曲で讀んだ時の想像以上の出來だつた、だん〳〵と醉が廻つて淨瑠璃が口に上るやうになつて來ながらも、そこに言ひしれぬ淋しさ——寸分も隙きの無い淋しさのたゞよひ。效果、照明共に好かつた話の絶えまにザーンと頭に染み込むやうな夜氣、そのやるせない淋しさが、此二老人によつて遺憾なく表はされてゐた。此二老人に次いで好く出來たのは伊藤晃一氏の高桑である二幕目でプログラムの製作に熱中してゐる腰を折られて憤然とし、活人畫の項目丈をゴシ〳〵と消してしまふ處、作者のト書に

「キビ〳〵と消す」とあるのに合はせては、ちと捨て鉢染みてゐたが、然し片倉が這入つて來て、瞬間、座の白けた心持、あすこへ行く手段としては此方が好かつたかもしれない、なかなか車輪であるのに少しも舞臺が騷々しくないのは豪かつた、序幕が着流し、次ぎが前垂れがけ、次が羽織袴、このこしらへも好い、「食べられてもよろしゆござんすがね。」の呼吸其他何處も惡くない。新見、楠山その他の三氏の不良中學生も上手い、小宮氏の佐々木も手先きが器用だと言ふのでセルの袴を穿いた何處かの洋畫研究所でも行つてさうなこしらへが好かつた。喜劇女形になるといふ柄にも適つて居た。東山さんのたか子と伊達氏の峰先生とは同じ位の出來だが伊達氏の眞面目さが好い、東山さんは日本の女になつた時は、足をもちつと内輪になるやうに氣を付けたいと哄笑した。文子さんのおわきはもつと顏を綺麗にこしらへてほしかつた。衣裳の行も合はない、山本さん、日野さん、村瀬さん、瀧さん等のおはつの御弟子は何れも綺麗だ山本さんのおしどりの鬘が目に付いた。東屋氏の岩井屋は少し老けてゐた。大川氏の新任の先生も好かつた、第一柄が適つて居たし大眞面目でありながら、何處か氣障な處、袂からハンケチを出して、「しかし、極めてしかし家庭的に」などの白が生きた、一番不可なかつたのは紀念會へ出る人物の中で隨分眞面目でないのがあつたのは事實だ、夫から餘興の琴は六段よりも「松竹梅」か「根引の松」のやうに手の混んだものゝ方にしたかつた、校長が急に行つてしまつたので後へ殘された峰と光長とが手持無沙汰に白ける處へ手に取るやうに聞えやうといふのに六段では餘り地道で不可なかつた、效果ではチヤルメラも先づ好し「はさみ庖丁かみそりとぎ」も、夜學の生徒の歸つてゆく物音に混る蟲の音、久保田さん特有の曇り日と夜との照明も好く、「二三軒の家を一所にした處」を見せた舞臺裝置等結構だつた、中にも二階の下り口の左手に棧を打つた開戸のある處、校長の部屋からは隣りのやうに見える夜學の教室、庭前の梧桐の葉に、前と後とに時を見せたのなども細かかつた。

# 伯林の花を訪ねるの記



ポルガトリ

ベルリンの女流畫家シャルラ・ハルツング女史と言つたのでは、親しみが感じられないでせうけれど、わが操觚界の新人黒田禮二氏の夫人と言へば『あゝさう』とすぐうなづける人。歸朝中の夫君を訪ねてはるばる來朝されいま本郷の文化アパートメントに住んでゐられます。ある日お訪ねしたら、『今日は、よくいらっしゃいました』と立派な日本語で迎えられ吃驚りしました。若い聰明なきびきびした方で、女人藝術を上げると、『こんな立派な雜誌を頂いても、私には讀めなくて殘念です』と珍らしげに頁をめくつて御覽になる。女人藝術の立場を簡單にお話して『獨逸にもかうした種類の雜誌がありますか』とお尋ねすると、『獨逸にはかう云ふ高級な婦人のみの、又は婦人の爲のみの雜誌はありません。その必要がないからです。何故なら婦人も男子と同じ權利と機會を與へられてゐるからです。ですから婦人のみの雜誌としては只流行の雜誌があるだけです。けれど日本のやうな國ではかう云ふ雜誌は大變必要です。マダム・ハセガワが女人藝術をお出しになつて、婦人に機會を與へ、婦人の力を伸して行かうとなさる御考へには全く同感です』とアクセントのないフランス語でお話になる。そこでお作品を女人藝術で御紹介したいとお願ひしました。

『繪ならみんな朝日新聞に行つてゐます。十六日(十一月)から、あそこで展覽會を開らきますので。展覽會に出すものより他、何にも持つて來なかつたんですよ。繪具や繪筆さへも持つて來なかつたんですもの』

けれどトランクの底から、二三册の雜誌を探し出して、それに出てゐる女史のスケッチを數枚見せて下さいました。線の豐かな、深い味はひを持つた畫風です。

『どんな畫家がお好き?』

『特別に好きといふのはありませんけど、ヴァン・ゴッホなんかはまあ好きです』

さう言へば女史のスケッチにはどこかゴッホの線の感じがあるやうに思はれました。けれど女史は誰かの畫に似るなんてことは大變お嫌らしいのです。こんなことを仰つしやつておいででしたから。

『獨逸の女流畫家はよく、カール・ホッファーの畫が好きで、その畫風を眞似ます。構想が小さくて、畫面の人物が少ないせいかも知れませんが。けれど私はどうも人の眞似が出來ないんです。眞似をしたものは本當の藝術ではないと思ふのです。私の藝術はあく迄も私自身のものでなければならないと思ひます。けれど、他人の眞似をする人は早く世間的に偉くなります。そして自分自身の藝術を創造してゆかうとする人は苦勞をする上に、若しかすれば何んにもなれないかも知れません。その代りう

まくゆけば素晴らしい藝術家として成功しますけれど。要するに他人の眞似でない獨自の藝術境を開らいてゆかうとすることは困難な道です。いま獨逸の女流畫家の中に、かう云ふ困難な道を辿つて成功した人が一人あります。それはケーテ・コルウイッチといふ今年六十歳ばかりの婦人で、繪のアカデミイの最初の婦人教授になつた方です。この方は木炭畫がお得意で、黑と白の色彩の獨自の畫風を持つてゐます。』

帝展を御覽になつたさうでしたから、その御感想を伺ひました。

『油繪は私達の國のサロンにあるものと同じでした。同じと言つても外形だけのことで、感情が缺けてゐると思ひます。何かしらぴつたりしないのです。日本畫は迚も立派でした。やはり日本畫に生命の躍動を感じました。私は日本の畫家が、新らしい感情と、新らしい材料を以て日本畫に精進されゝばいいと思ひます』

『日本で御製作なさいませんの』

『今度は、展覽會を開らくために、ほんの僅かな間のつもりでまゐりましたので大きなものは描きません。只ウルシュタイン出版會社出版のウフーといふ雑誌に日本のスケッチ通信を送る約束がありますのでスケッチだけは澤山したいと思ひます。』

『どんな方面の日本通信をなさるおつもり？』




『私の國の人々は、日本に對して非常に無知です。たまに知つてゐることは、古い日本の片影です。それは獨逸に限らずヨーロッパ人は一般にさうですけれど。そして日本に來ても古いものばかり探し出して、これが夢の國日本だと喜びます。けれど私は現代の日本をありのまゝに紹介したいと思つてゐます。殊に街上の日本をです。街で見得る凡てに私は非常に興味を持つてゐます。そこに本當の現代日本の姿があるやうに思ひますので』

『新聞や雑誌と御關係が深くゐらつしやいますか？』

『えゝ比較的。一九二五年頃にはベルリナー・ボェルセン・クリエー紙の繪畫附錄の主任をして居りましたので一週一度は必らずこの新聞にスケッチを出して居りました。二十六年の夏から冬にかけてはその新聞の美術通信員として、ロシアに旅行したり、イタリイ、スペイン等をも歴訪して木炭の寫生を發表しました。この他藝術雑誌ウフーや、流行雑誌等にも描いて居ります』

『展覽會には度々お出しになりますか？』

『えゝ、一九二五年以來毎年缺かさず獨逸全體のサロンとも言ふべきベルリン美術大展覽會に出品してゐます。その他ベルリンの新ら

しい畫家を糾合したベルリン藝術協會の終生會員に推薦されてゐますし、ベルリン女流美術家聯盟の役員にもなつてゐますのでこれ等の團體の展覽會には出品します。このほか私は全獨逸造形藝術家協會の終生會員にも推されてゐますが、この協會は職業組合のやうな役目を持つもので、例へば、繪の具類の購入等の便宜を計るもので、購買組合、消費組合といつたやうなものです。私の畫が初めて展覽會に出たのは、一九二二年のシェーネベルグ展覽會が開かれた時でした。その時私の油繪はたつた一枚しか採られませんでしたけど、思ひがけなく、私が小刀と鋏で黒紙を刻んで貼りつけた所謂鋏刻畫が澤山パスして大變な人氣を集めました。この時程嬉しかつたことはありませんでした。私は全く夢中になつて喜びました。元々私は木版畫に趣味を持つてゐてぜひやつてみたいと思つたのですけれど、戰役の獨逸で貧乏な私は材料の木を買ふことができなかつたんです。それで木版畫と同じやうな線を出さうとして安い黒紙を選んで鋏刻畫をつくつてみたのでした。



モスコウ、ツヨルスカヤ街の午後

この展覽會で以外な成功を得た鋏刻畫は、さらに意外にも當時獨逸に漫遊中だつた米國ロチェスター新聞の主筆の目に止つて、その推薦でロチェスター市のアート・ガレリイでこの鋏刻畫の展覽會を開らくことになりました。これが私の最初の個人展覽會です。かうして私はやつと一人前の畫家の仲間入りをしたわけです」

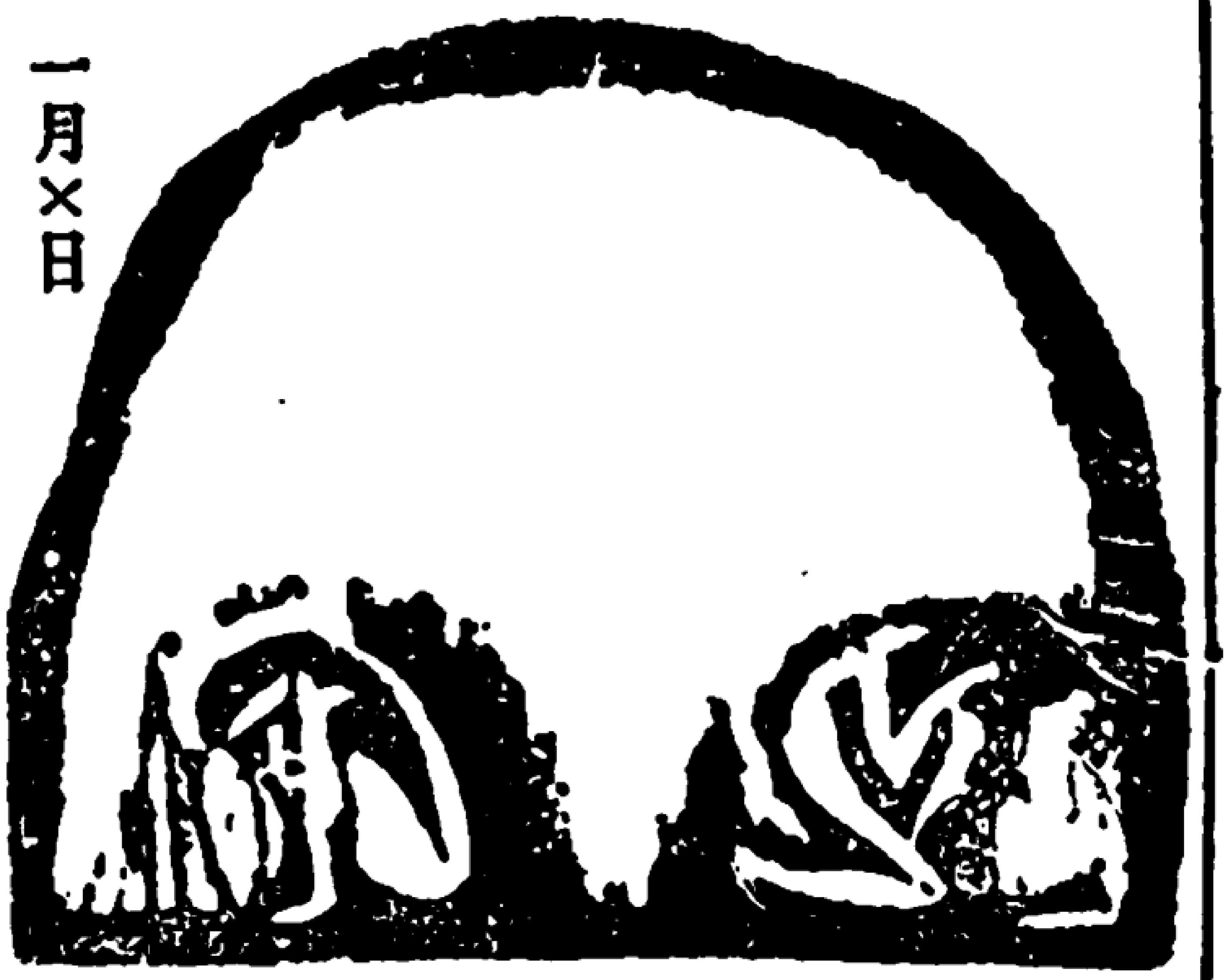
『畫は何處で御勉强になりまして？』

『私はベルリン兒ですから畫の勉强もやはりベルリンてす。女學校の頃から、彫刻家の叔父があつたものですから、その叔父から土のこれ方やスケッチの仕方などの手ほどきをして貰ひました。そして女學校が濟みました時、劇の背景に趣味を持つてゐたものですからベルリンの美術學校ライマン學舍に通ひ、カイネルや、ツェザエル・クライン等の教授にコムポジションや挿畫、裸體畫等を教はり、エステルレ教授の感化で油繪を始めました。そして大勢の生徒の中から私だけ、性が良かつたので、プロシヤ國立美術學校に推薦されて入學したのです。こゝではウォルフスフェルド、ゼンゲン等のクラシカルな教授の指導を受けました。この他ミユンヘンの畫家シユピーゲル教授の薫陶をも受けました。この學校が濟んでからフランスやイタリイにも繪の研究に行きましたが、私が本當に繪の勉强をしたのはベルリンです」

『マダムの畫の傾向はどうなんです？』

『私の畫の傾向ですつて？　それは一切批評家にお任かせしますわ。私はどう云ふ傾向で畫を描かうなんて思ひませんから。畫には型も流派もないと思ひます。私が摑まうとする途は新らしい姿のリアリズム―　たゞそれだけです』

女史は演劇にも非常な趣味を持たれ、繪畫フィルムの製作に從事されたこともあつたさうです。今度日本に來られて、日本の芝居見物をなさるのがお樂しみの一つださうです。一月にお歸りになるさうですが、いいお土産を澤山持つてお歸りになるやうに祈つてやみません。(宮月百合子)



# 古創

## ―放浪記―

林芙美子

一月×日
海は眞白でした
東京へ旅立つその日
青い蜜柑の初なりを籠いつぱい入れて
四國の濱邊から天神丸に乘りました。

海はきむづかしく荒れてゐましたが
空は鏡のやうに光つて
人參燈臺の紅色が瞳にしみる程あかいのです。
島でのメンドクサイ悲しみは
すつぱり捨てゝしまほうと
私はキリのやうに冷い風をうけて
遠く走る帆船をみました。

一月の白い海と
初なりの蜜柑の匂ひは
その日の私を
賣られて行く女のやうにさぶしくしました。

一月×日
、、、、、、
おどろおどろした雪空だ。

朝の膳の上は白い味噌汁に、高野豆腐に黑豆、何もかも水つぽい舌ざわりだ。東京は悲しい思ひ出ばかり、いつそ京都か大阪で暮らしてみやう…。

天保山の安宿の二階で、ニヤーゴニヤーゴ鳴いてゐる猫の聲を寂しく聞きながら私は寢そべつてゐた。

あゝこんなにも生きる事はむづかしいものか…私は身も心も困憊しきつてゐる。

潮たれた蒲團はまるで、魚の腸のやうにズルズルに汚れてゐた。

ピユン！ ピユン！ 風が海を叩いて、波音が高い。

からつぽな女は私でございます……生きてゆく才もなければ、生きてゆく富もなければ生きてゆく美しさもない。

さて殘つたものは血の多い體ばかり。

私は退屈すると、片方の足を曲げて、キリキリと座敷の中をひとまはり。

長い事文字に親しまない目には、御一泊壹圓よりと白々しく壁に張られた文句をひろひ讀みするばかりだつた。

夕方――ポアリポアリ雪が降つて來た。

あつちをむいても、こつちをむいても旅の空、もいちど四國の古里へ逆もどりしやうか、とても淋しい鼠の宿だ。

―古創や戀のマントにむかひ酒―

お酒でも樂しんでじつとしてゐたい晩だ。

たつた一枚のハガキをみつめて、いつからか覺えた俳句をかきなぐりながら、東京の澤山の友達の顔を思ひ浮べた

皆自分に急がしい人ばかりの顔だ。

ポオウ！ ポオウ！ 汽笛の音を聞くと、私はいつぱいに窓を引きあけて雪の夜の沈んだ港に呼びかけた。

青い灯をともした船がいくつもねむつてゐる。

お前も私もヴアガボンド。

雪々雪が降つてゐる。考へても見た事のない、遠くに去つた初戀の男が急に戀ひしくなつて來た。

こんな夜だつた。

あの男は城ケ島の唄をうたつた。

沈鐘の唄もうたつた。なつかしい尾道の海はこんなに波は荒くはなかつた。

二人でかぶつたマントの中で、マッチをすりあはして、お互ひに見あつた顔、一度のベエゼも交した事もなく、あつけない別離だつた。

一直線に墜落した女よ！ と云ふ最後のたよりを受取つてもう七年にもなる。あの男は、ピカソの畫を論じ槐多の詩を愛してゐた。

これでもかッ！ まだまだ、これでもかッ！ まだまだ、私の頭をどやしつけてゐる強い手の痛さを感じた。

どつかで三味線の音がする。私は呆然と座り、いつまでも口笛を吹いてゐた。

一月×日

さあ！ 素手でなにもかもやりなほしだ。

市の職業紹介所の門を出ると、私は天滿行きの電車に乘つた。

紹介された先は毛布の問屋で、私は女學校卒業の女事務員、どんよりと走る街並を眺めながら、私は大阪も面白いなと思つた。

誰も知らない土地で働く事もいゝじやないか、枯れた柳の木が腰をもみながら、河筋にゆれてゐる。

毛布問屋は案外大きい店だつた。

奧行きの深い、間口の廣いその店は、丁度貝のやうに暗くて、働いてゐる七八人の店員達は病的に蒼い顔をして、急がしく立ち働い

てゐた。

隨分長い廊下だつた。何もかにもピカピカと手入れの行きとゞいた、大阪人らしいこのみのこぢんまりした座敷に私は始めて、老いた女主人と向きあつた。

「東京から、どうしてこつちやいお出でやしたん?」

出鱈目に原籍を東京にしてしまつた私は、一寸どう云つていひかわからなかつた。

「姉がゐますから……。」

こんな事を云つてしまつた私は、又いつものめんどくさい氣持になつてしまつた。斷られたら斷られたまでの事だ。

おつとりした女中が、美しい菓子皿とお茶を運んで來た。

久しくお茶にも縁が薄く、甘いものも長い事口にしなかつた。

世間にはかうしたなごやかな家もある。

「一郎さん!」

女主人が靜かに呼ぶと、隣の部屋から、息子らしい落ちつきのある廿五六の男が、棒のやうにはいつて來た。

「この人が來ておくれやしたんやけど……。」

役者のやうに細々としたその若主人は光つた目で私を見た。

私はなぜか恥をかきに來たやうな氣がして、ジンと足が痺れて來た。あまりに縁遠い世界だ。

私は早く引きあげたい氣持でいつぱいだつた。

天保山の船宿に歸つた時は、もう日も暮れて、船が澤山はいつてゐた。

東京のお君ちやんからのハガキ一枚。

—何をぐずぐずしてゐるの、早くいらつしやい。面白い商賣があります。—どんなに不幸な目にあつてゐても、あの人は元氣がいゝ。

久し振に私もハツラツとなる。

一月×日

駄目だと思つてゐた毛布問屋に務める事になつた。

五日振りに天保山の安宿をひきあげて、バスケット一ツの深々とした私は、もらはれて行く犬の子のやうに、毛布問屋に住み込む事になつた。

晝でも奧の間には、ポンポロ　ポンポロ音をたてゝガスの燈がついてゐる。漠々としたオフィスの中で、澤山の封筒を書きながら、私はよくわけのわからない夢を見た。そして何度もしくじつては自分の顏を叩いた。

あゝ幽靈にでもなりさうだ。

青いガスの燈の下でじつと兩手をそろへてみると爪の一ツ一ツが黄に染つて、私の十本の指は蠶のやうに透きとほつて見える。

三時になると、お茶が出て、八ツ橋が山盛り店へ運ばれて來る。

店員は皆で九人居た。その中で小僧が六人皆配達に行くので、誰が誰やらまだ私にはわからない。

女中は下働きのお國さんと上女中のお糸さん二人。

お糸さんは昔の(御殿女中)みたいに、眠つたやうな顏をしてゐた。

關西の女は物ごしが柔らかで、何を考へてゐるのだかさつぱり判らない。

「遠くからお出やして、こんなとこしんきだつしやろ……。」

お糸さんは引きつめた桃割れをかしげて、キユキユ糸をしごきながら、見た事もないやうな昔しつぽい布を縫つてゐた。
若主人の一郎さんには、十九になるお嫁さんがある事もお糸さんが敎へてくれた。
そのお嫁さんは市岡の別宅の方にお產をしに行つてゐるとかで、家はなにか氣が拔けたやうに靜かだつた。
夜の八時にはもう大戶を閉めてしまつて、九人の番頭や小僧さん達が皆どこへひつこむのか、一人一人居なくなつてしまふ。
のりのよくきいた固い蒲團に、のびのびといたわるやうに兩足をのばして、じつと天井を見てゐると、自分がしみじみ、あわれにみすぼらしくなつて來る。
お糸さんとお國さんの一緒の寢床に、高下駄のやうな感じの黑い箱枕がちんと二ツならんで、お糸さんの赤い胴拔きのした長襦袢が蒲團の上に投げ出されてあつた。
私はまるで男のやうな氣持で、その赤い長襦袢をいつまでもみてゐた。しまひ湯をつかつてゐる、二人の若い女は笑ひ聲一つたてないで、ピチヤピチヤ湯音をたてゝゐる。
あの白い生毛のたつたお糸さんの美しい手にふれてみたい氣がする。私はすつかり男になりきつた氣持で、赤い長襦袢を着たお糸さんを愛してゐた。
あゝ私が男だつたら世界中の女を愛してやつたらうに……沈默つた女は花のやうに匂ひを遠くまで運んで來るものだ。
泪のにじんだ目をとぢて、まぼしい灯に私は額をそむけた。

一月×日
朝の芋がゆにも馴れてしまつた。
東京で吸ふ、赤い味噌汁はいゝな、里芋のコロコロしたのを薄く切つて、小松菜と一緒にたいた味噌汁はいゝな。荒卷き鮭の一片一片を身をはがして食べるのも甘味い。
大根の切り口みたいなお天陽樣ばかり見てゐると、鹽辛いおかずでもそへて、甘味しい茶漬けでも食べてみたいと、事務を取つてゐる私の空想は、何もかも淡々しく子供つぽくなつて來る。
雪の頃になると、いつも私は足指に霜やけが出來て困つた。
夕方、荷箱をうんと積んである蔭で、私は人にかくれて思ひ切り足をかいた。赤く指がほてつて、コロコロにふくれあがると、針でも突きさしてやりたい程切なくて仕樣がなかつた。
「ホウ……えらい霜やけやなあ。」
番頭の兼吉さんが驚いたやうに覗いてゐた。
「霜やけやつたら、煙管でさすつたら一番や。」
若い番頭さんは元氣よくすぽんと煙草入れの筒を拔くと、何度もスパスパ吸つては火ぶくれたやうな赤い私の足指を煙管の頭でさすつてくれた。
もうけ話ばかりしてゐるこんな人達の間にもこんな眞心がある。

二月×日
「お前は七赤金星で金は金でも、金屛風の金だから小綺麗な仕事を

しなければ駄目だよ。」
よく母がこんな事を云つてゐたが、こんなお上品な仕事はぢきに退屈してしまふ。
あきつぽくつて、氣が小さくて、ぢき人にまいつてしまつて、わけもなくなじめない私のさがの淋しさ……あゝ誰もゐないところで、ワアッ！と叫びあがりたい程、焦々する。
いゝ詩をかこう。
元氣な詩をかこう。
只一冊のワイルド・プロフオデイスにも楽しみをかけて讀む。
―私は灰色の十一月の雨の中を嘲けり笑ふモップにとり圍まれてゐた。
―獄中にある人々にとつては涙は日常の經驗の一部分である。人が獄中にあつて泣かない日は、その人の心が堅くなつてゐる日で、その人の心が幸福である日ではない。
夜々の私の心はこんな文字を見ると、まことに痛んでしまふ。
お友達よ！肉親よ！隣人よ！わけのわからない悲しみで正直に私は私を嘲笑ふモップが戀ひしくなつた。
お糸さんの戀愛にも祝福あれ！
夜、風呂にはいつてぢつと天窓を見てゐると、キラキラ星がこぼれてゐた。忘れかけたものをふつと思ひ出したやうに、つくづく一人ぼつちで星を見た。
老ひぼれた私の心に反比列して、肉體のこの若さよ。赤くなつた腕をさしのべて風呂いつぱいに體をのばすと、ふいと女らしくなつて來る。
結婚しやう！
私はしみじみとお白粉の匂ひをかいだ。眉もひき、口唇も濃くぬつて、私は柞鏡のなかの幻にあどけない笑顔をこしらへてみた。
青貝の櫛もさして、桃色のてがらもかけて髷も結んでみたい。
弱きものよ汝の名は女なり、しよせんは世に汚れた私で厶います。
美しい男はないものか……。
なつかしのプロヴアンスの歌でもうたひませうか、胸の燃えるやうな思ひで私は風呂桶の中に魚のやうにくねつてみた。

二月×日
街は春の賣出しで赤い旗がいつぱい。
女學校時代のお夏さんの手紙をもらつて、私は何もかも投げ出して京都へ行きたくなつた。
―隨分苦勞なすつたんでせう……と云ふ手紙を見ると、いゝえどういたしまして、優さしいお孃さんのたよりは、男でなくてもいゝものだ、妙に乳くさくて、何かぷんぷんいゝ匂ひがする。
これが一緒に學校を出たお夏さんのたよりだ。八年間の年月に、二人の間は何百里もへだたつてしまつた。
お嫁にも行かないで、ぢつと日本畫家のお父さんのいゝ助手として孝行してゐるお夏さん！
泪の出るやうないゝ手紙だ。ちつとでも親しい人のそばに行つて色々の話を聞ひてもらほう——。
お店から一日ひまをもらふと、鼻頭がジンジンする程寒い風にさ

からつて、京都へ立つた。

午後六時二十分。

お夏さんは黒いフクフクとした、肩掛に蒼白い顔をうづめて、むかへに出てくれた。

「わかつた？」

「ふん。」

沈默つて冷く手を握りあつた。

赤い色のかつた服裝を胸に描いて來た私にお夏さんの姿は意外だつた。まるで未亡人か何かのやうに、何もかも黒つぽい色で、唇だけがぐいと強よく私の目を射た。

椿の花のやうに素的にいゝ唇。

二人は子供のやうにしつかり手をつなぎあつて、霧の多い京の街を、わけのわからない事を話しあつて歩いた。

昔のまゝに京極の入口には、かつて私達の胸をさわがした封筒が飾窓に出てゐる。

だらだらと京極の街を降りると、横に切れた路地の中に、菊水と云ふうどんやを見つけて私達は久し振りに明るい灯の下に顔を見合はせた。私は一人立ちしてゐても貧乏、お夏さんは親のすねかじりで勿論お小遣もそんなにないので、二人は財布を見せあひながら、狐うどんを食べた。

女學生らしいあけつぱなしの氣持で、二人は帶をゆるめてはお變りをしては食べた。

「貴女ぐらゐよく住所の變る人ないわね。私の住所錄を汚して行くのはあんた一人よ。」

お夏さんは黒い大きな目をまたゝきもさせないで私を見た。

甘へたい氣持でいつぱい。

丸山公園の噴水にもあいてしまつた。

二人はまるで戀人のやうによりそつて歩いた。

「秋の鳥邊山はよかつたわね。落葉がしてゐて、ほら二人でおしゆん傳兵衛の墓にお參りした事があつたわね……。」

「行つてみやうか！」

お夏さんは驚いたやうに瞳をみはつた。

「貴女はそれだから苦勞するのよ。」

京都はいゝ街だ。

夜霧がいつぱいたちこめた向ふの立樹のところで、キピッキピッ夜鳥が鳴いてゐる。

下鴨のお夏さんの家の前が丁度交番になつてゐて、赤い灯がポッカリとついてゐた。

門の吊燈籠の下をくゞつて、そつと二階へ上ると、遠くの寺でゆつくり鐘を打つのが響いて來る。

メンドウな話をくどくどするより、沈默つてよう……お夏さんが火を取りに下に降りると、私は窓に凭れて、しみじみ大きいあくびをした。

——一九二六——



# 言葉・表現

八木秋子

マネキン・ガールといふものが百貨店（デパート）の飾窓（ショーウインドア）に現れることになつて、また一つ婦人の新らしい職業が殖えたといふ事である。人形のかはりに生きた女を窓に立たせて衣裳の廣告に役立たせるのださうで、新聞の寫眞で見るといかにも美容院好みの疑つた髪形に、胸高に帶を結んで立つた、婦人雜誌の口繪でよく見る女優の着付姿と何のかはりもない派手やかな姿態であつた。見て來た友達の話によるとその一人々々の衣裳には金百二十圓とか、金九十何圓とかの正札がぶら下り中には賣約濟の赤札も二三あつたさうであるが、顔といへばもとより人形を眞似るのだからいづれも白く美しいだけで、生きた表情といふものを見出すことは出來なかつた。たゞ、時々退屈を紛はすためにこの生きた人形はゆるやかに歩を運んでピアノに凭りかゝつて見たり、机の前に坐つて見せたりする――。私は飾窓の厚硝子の外に折重つたいくつもの寒さうな顔と、フットライトの上に浮き出た女の無表情な、しかし華かな立姿とを想像して見た。

人間は一個の商品にすぎないといふこの社會の理論がこれほど露骨に、これほど實感をもつて曝け出されたものはあるまい、寧ろそれは、さうした意味においてより効果的であるかもしれないが――日を趁うて範圍を擴めつゝある婦人の職業が次第に生産の方で不熟練的なものからブルヂョアの享樂に役立つべき種類のものに移つてゆくのは不思議はないとしても、資本主義の商業主義（コムマーシャリズム）がたうとう婦人をこゝまで利用するに至つた感を深くしないではゐられない、中には、人間が一個の商品にすぎないといふ言葉は娼妓や私娼にこそ適切でマネキン・ガールはなにも體を賣つたわけでも、醜業を強ひられるわけでもないといふ人があるかもしれない。成程その人たちは體を賣りはしない、併し高々四十圓やそこらの月給で自分の所有とは何の關係もない賣物の衣裳に美々しく飾り、終日店頭に立ちつくして後から〳〵と行きずりの男女から皮肉な眸や淫な嗤ひを投げられて、何とも感じないであらうか、三百人あまりの志望者の中から選りすぐつたさうだから定めし人形のそれのやうに美しいであらうが、顔が美しいだけにもつと悲慘な感じを呼びおこさせはしまい

か。

娼妓や私娼はある意味では無産階級の人達の慾望を滿させることに役立つてゐるけれども、これは全くブルヂョアのために存在してゐる外の何物でもない、美貌を衆人の前に衒る幾分の自負はあるとしても要するに店曝しものには違ひないのである。が、もつと苦痛を想像されることは、それより以上に人形といふ固形物に生きた人間がならなければならない、若くは裝はなければならないことであらうと思ふ。この點、人形芝居の人形とは逆にいつてゐるので、顏に表情を持たない人形も動きによつて生命あるものよりもより高い玄妙な美とこゝろを表現することが出來るのと反對になつてゐる。人間から表情や動作や言葉を奪つてしまふ、いひかへれば表現自由を完全に奪つて生きながらの固形した孤獨に置くといふことは、何といふ慘忍さであらう。私の想像にはこゝで、獨房の中にぢつと坐りつくす囚人の姿が泛んで來るのである。

愧づべき行爲も、それが公衆の面前で行はれないといふことではまだしも忍ぶことが出來る。モデルにしても、そこに在るのは製作者だけであり美術といふものが作り出す雰圍氣は職業意識の上からは彼女達をみづから卑めることをしないであらうし十分か十五分毎に與へられる休みの時間には彼女達は自由人である。その上日に日に自分が一個の藝術作品の形になつて再現されてゆくのを眺めるたのしみもあらう。婦人が衆人の前に姿態をあらはして呼びかけるのは宣傳の意味を含んでゐて何かしら生活が背景になつてゐるが、音樂家や女優やスポーツ・ガールなどは自分の有つ力を表現することに悅びを感じるし、講演者や殊に階級戰上に立つ辯士などは興奮と感激とを持つてゐる。物賣りや外交などにしてもいく分生産に關係ももてば自分達の階級に何かしらの關聯はもつてゐようといふものだ、正札つきのマネキン・ガールはどの意味から言つても私達に不愉快を感じさせ、さうしたものを新らしい職業として生み出した社會的の動機について考へさせずにはおかない。

たしかに近代人の表現は洗練されつゝあるし技巧も潑剌として自由でエキゾテイックな色彩を多分に帶びて來たことは事實である。と同時に内から外へと、街頭へと一切が押し出されてゆく。現代人はいまにラヂオをたゞ耳に聽くだけでは滿足出來なくなつて、マイクロホンの前に口を開けたり眉をひきつらせたりする放送者の顏や動作を電波で家々の室内にポッカリ映し出すやうな發明を、或はしないとも想像出來ないこともない、娼妓の人達が眼ざめて部屋着のまま街路へくり出して示威運動でもすることになれば廢娼問題などは立どころに解決されてしまふこと明かである。これは決して惡意をもつていふのではない。みんな醜いものも秘されたものも明るみへ、公衆の前へ出ればいゝのだ、現に上海の急進婦人達、革命運動に參加してゐる――は「廉恥打倒」とかいふ大旗をおし立てゝ全裸の示威運動をしやうとしたさうではないか、殼を破らうとする努力にはかうした思ひきつた行動の現れも强ち不思議ではあるまいと思ふのである。

私は近代人の意志感情の表現がどう變つてゆくかに就てこんなことを想像の上にのぼせる。ブルヂョアは表現技巧がもつと露骨になり誇張されて來るとともその煩はしさに堪へられなくなるだらうし、プロレタリアは物言ふ口を封じられて、ともに無言とまでは行かなくとも尠くとも言葉だけはずつと簡潔になり素朴になるのでは

あるまいかと。それは丁度十九世紀の終り頃帝政ロシアのあの陰慘な恐怖時代を思はせもする、「人民の中へ」といふ聲が耳から耳に囁かれてナロードニキの運動が全國に擴がつて行つた當時、ニヒリスト達は極端に簡潔な會話によつて意志を胸から胸へと傳へて行つた。――そこには一切の儀禮や虚飾は排斥され、彼等の簡潔な、しかし重要な言葉は眞實の響きと友情をもつてゐた――といふ。

私達の住むこの社會からあらゆる饒舌といふものが影を絶つた後のことを想像すると、とても美しい住みよい世界が彷彿と泛んで來る。映畫にしても發聲映畫(トーキー)などにはどうしたつて好感が持てないだらうと思ふ、靜觀の中にいき〱と奔躍するスクリーンの美は香り高い音樂のリズムに援けられてあゝした魅力をもつて來るものと思ふが、何にしても冗漫な言葉がすべて輕んじられて言葉の價値が尊いものとされるやうになれば、人の表情は從つておどろくべき潑剌さに生きて來て花のやうに咲くであらう。聰明な理智の光が湛へられて、互の感情は眉の動きにも肯くことが出來る。そして言葉は珠玉のやうに輝きを增して微風にさゆらぐ銀線のやうに爽かな、または海潮の莊重さを帶びて來るかもしれない。その時こそ眞に叡智から溢れ出るユーモアも生れやうといふものである。簡素なのは獨り言葉だけでなく文藝上の表現もさうなるかもしれない。これは私の想像ばかりであらうか。



# 捧ぐる言葉

## ―嗜好帳の二三ペエヂ―

尾崎翠

### カイゼル

あなたの出納係さんの靈魂巡禮を私は幾度も蟲眼鏡で見ました。何と滅茶滅茶な靈魂巡禮、それから眼鏡なしにしました。その眼鏡は何世紀の出來か、どうやら端嚴なものにしか合はないやうでしたから。

靈魂巡禮といふ尊い旅は昔から地上より天上へ高翔するお手本通りな道順を取るものと決め込んでゐましたら、まづあなたの穴だらけなペンで(お許し下さい、事實私に取つては穴だらけなペンだつたのです)ひどくどやしつけられてしまひました。

知識で頭だけ重くなつた果、惡魔にお側役をつとめさせて出發した博士樣　自我と愛慾のきづなに引かれて「奥さん」を道づれに出發した遊面の「よその人」もある中に。知識、愛慾、自我、それと聞けば昔からあらゆる人が頭を下げる出發點です。そして到着點は輝く天上です、そこにもつて來て出納係さんの巡禮。

偶然。ちよつとした機會。出納係さんの出發點はそれにすぎません。信用の深い銀行員だつた彼の前に伊太利の奥さんの腕輪のはまつた手がちらと置かれただけ。たつたそれだけのことです。それも手管なんかちつとも心得ない地道な奥さんが、金の抵當の腕輪を外すための。

出納係さんの道づれはメフイストでも「奥さん」でもなく、銀行から攫み出した六萬馬克の金です。伊太利の奥さんは彼について來ません。そして、奥さんを買ひ損つた彼は、その金で何も買ふことが出來ません。不幸な色男！

妻や母や娘たちのゐる彼の家庭。

自動車六日競爭。

踊り場。

救世軍の教會堂。

それ等の足の留め場で彼は何も買ふことが出來ません。そして彼の到着した處は「そこでどこへ行く」と彼自身に言はせた死です。

偶然に始まり、ゆくさきのない死に終る靈魂巡禮。

出納係さんの巡禮が泥棒の後の瀆罪か。それとも六萬馬克の金で後の未知の世界の麻酔劑を買ふためか。それともその兩方かとあなたは知らん顔でゐて、ちよいちよい謎をかけないこともありません。しかし野暮な！　私もあなたの謎に知らん顔することは好きです。そんな詮議だてより、出納係さんのいらつしやる道々を伴いて行つた方が氣が利いてゐて面白くもありますから。出納係さんは次から次と面白いところへ行きますし、ロマンチックなくせに（第一彼は繪の研究までしようといふ大きな息子を持つた伊太利の地道な奥さんを、モンテ・カルロから來た女と考へたぢやありませんか）ものごとに歯切れの好い觀察を下しますし、六日競爭を沸騰させるし、教會堂で金をばら撒いて懺悔臺から下りたばかりの會衆に激烈な金の奪ひ合ひはさせるし、といつた風です。そして最後に「見よこの人を」

ゲオルク・カイゼル！　彼の最後の唸りはほんとです。女の腕に見惚れて泥棒をし、永い旅で何も得られず、そしておしまひの天國もない人間こそ、この唸りを何かに向つて打つつける資格があるのです。フアウスト博士樣の端嚴な御昇天より、彼の短い唸りの方が痛い。墓穴の下の彼の死骸に牛蒡が生えたつてそれが何でせう。

## 佐藤春夫氏

あなたの螺旋形の頭と多角形な心臟を瞶めてゐましたら、こんな詩のやうなものが出來てしまひました。夜のことでした。

象牙の塔と地の上を往きつ戻りつ、
薔薇に戀するかと思へばひとりさんまをくらふ。
ロオド・バイロンの煙にお京が消え、その明後日は女誡扇綺譚。
縷説(るせつ)の舌が長いと思つたらいきなり諧謔のつばきが飛んだ。
感傷と嘲感傷、
お伽ばなしと愛慾篇、

遠い幻想と近い戀情。
東洋人の胸に佛蘭西風な鼻をつけ、
蒼白い夢かと見れば血の色のうつつ。

妙な一夜が時々私の屋根裏を訪れます。すると私の頭は私の部屋と同じになり（それとも私の頭の中にいつも王位を占めてゐる耳鳴りが、私の部屋を作り變へてしまふのかも知れません）あなたの二つの世界が代る代る消えつ浮びつします。螺旋形の頭のと、多角形な心臟のと。あなたは氣分創りですから（二つの世界をこめて）で、こんな詩のやうなものも作つてみたくなつたのかも知れません。

ともかく私をへぼ詩人にしたのは次のやうな夜だつたと思ひます。

私は夢を築くことの上手な老建築家と話してゐました。あの物靜かなお爺さんをつかまへて彼の事業を讃美してゐたのです。お爺さんはあの通りな人間ですから、話は私の一人舞臺のやうでした。途中で私はちよつと脇を向いてお茶で咽喉をうるほし、話を續けようと向き直つた時、老建築家の代りにひどく不景氣な影の薄い顏にぶつかりました。淸吉氏です。

淸吉氏の顏は、老建築家の事業の美しさで膨らみ切つた私の心臟を忽ち哀傷で塡めてしまひました。影の薄いくせに他の心臟の中味を急轉させる妙な作用を持つた男です。それで、淸吉氏が佗しすぎれば私も佗しすぎると云ふ風で、二人はすつかり話し込んでしまひました。（いつたい私には老建築家や淸吉氏に限らず、あなたの世界の人間とならいくら話してゐても飽きない癖があります。その時私はお喋舌りになります。眞直なお喋舌りや、三角形のや、螺旋形のもすこしは出來ます）話し込んでる中に、淸吉氏の不景氣な眉のあたりが私に秋風に吹かれたしよつぱいさんまや、都會の憂鬱を思ひ出させ、座はしめつぽくなる一方でした。その時耳の側で、退屈讀本の奴がいきなり大欠伸をし、欠伸の濟まない中に淸吉氏と私のあひだのしめつぽい空氣を洒落とばしてしまひました。昔の話とか、お孃さんがヒステリイを起した話とか、ダダイスト何とか――といつた風に一ダアスばかりも竝べて。

「惡黨め、話の中途の割り込んで來た癖に」私は內證で思ひました。讀本めが內證でなければ思はせない惡がり方をしてゐるので仕方がなかつたのです。そして私はやはり內證で淸吉氏の方を見ました。

何時立つたのか、佗しがりの淸吉氏は影さへ見えませんでした。その代りに讀本が二人分の席を取つて、苦笑とも嘲笑とも片づかない表情で、淸吉氏を探し廻つてゐる私のうろうろとした眼の行方をちやんと知つてゐました。

「ダダ、――ご存じですか、あいつを」

「あなたのやうな人間のことです」御馳走さまですね。」淸吉氏を何處にやつたのか、私は腹だちまぎれに言ひ放ちました。

「え。何か御馳走しましたか、わたくしが」

「その空つとぼけからして御馳走さまですよ。」と申し上げるまでもございませんが、私は淸吉氏が好きでしたね」

「ははあ。初耳に承はります。そんな御事情でしたら御立腹はもつともですが、あいつがゐなくなつたのは何もわたくしの所爲ではありません。お疑ひなら立つてお目にかけても好いくらゐです。ほらわたくしは魔法つかひでも何でもありません。とんと風のやうな奴で、それが失戀したてと來てゐるから、一つ處にじつとしてゐられないのですよ。電車で日課旅行をやつたり、髭を立てたり落した

り。困つたものです。――あいつはわたくしの、まあ、從弟のやうなものですが、そんな譯で、どうも、あまり、わたくしとは、肌が合ふとは言へませんでね」

時間は自分一人のものだといふ調子で清吉氏を惡く言つてゐる讀本の顏に、私はせめて一つくらゐ風穴を（出來れば彼の強い鼻柱にと思つて、まじまじと彼の顏を睨みつけてる中に、私の心臟は妙な狀態になつて來ました。何と惚れつぽい私でせう。何處か彼を好きになつてしまつたのです。しかし、これは私の惚れつぽさの罪ばかりではありません。最初の原因は彼の眉のあたりに在つたのです。從弟のやうなものだと言ふだけであつて、この惡がりの退屈讀本と佗しがりの清吉氏と、眉のあたりが似てゐました。風穴どころでなくなつて見て行く中に、似てゐるのは眉のあたりのみか、顏も、肩つきも、體の線も、それから多分（と私は思ひだしたのです）心臟の中味も、腦の襞の具合も――

「嘘つきめ、兄弟のくせに」と思つた時は、讀本はもう私の中に清吉氏と同じ位置を占めてゐました。

「ダダ」私は急き込んで言ひました。「お粥の國への爆彈です。ゾラ氏の孫弟子共の行列の中へ――」

「危いです」讀本は私の言葉の中途で苦笑交りに注意しました。「興奮なすつちや」

「でなかつたら飛行機です、その國から逃げだす」

「は、は、は。御勇猛ですな」

何と複雜な笑ひを持つた奴でせう。何もかもちやんとしまひ込んだ。一冊の著述くらゐは要りさうな。

私は默り込んでしまひました。彼の複雜な笑ひが私を失語症に陷らせたのです。地球の談面にぽつりと出來たダダの黒子が爆彈か、それとも飛行機か。それは失語症に陷つてその夜の私の知つたことではありません。それで私は失語狀態に陷つたまま退屈讀本の前から机に移り、一行毎に二つの世界を持つた、そして結論のない詩を書きました。

しかし、

これが私の一ばん好きな、一ばん美しい夜の一つの見本です。

**秋田雨雀氏より**

「女人藝術」毎號お贈り下されありがとうございます。大木さんの「賣淫制度について」其他を面白く拜見しました。然し小生の言葉が引合ひに出されてゐるから、一寸お答へするのが禮と思ひますので、このはがきに認めます。ソヴエットは革命十週年を期して「賣笑婦」と「家なし兒」の絕滅を計つてゐるでの、私のモスクワを訪つた時は、二つとも實際的に少なかつたのです。（賃金制度の有する限り、ある種の賣淫行爲の存在は免れないことです）ソヴエットの賣娼婦の激減は一、性教育、二、醫學的旣設、三、法律及び社會施設の三方面からの非常な努力の結果によるものである事は、三つ程の會合で小生は說明したつもりです。その點大木さんの言葉で充分盡きてゐると思ひます。小生も何か機會があつたら、その方面のことを何かで發表して見たいと思つてゐます。



岡田かよ子

# 長流記（その六）

山田邦子

お慶さんの來たのには事情があつた。一たん氣持の上の交渉とはいへ戀愛的の交渉を打ち切つた川端氏との交渉がまたもとにもどりかけた。自分にも譯のわからない氣持の訴へであつた。

「あの人に對して强い戀愛の氣持はどうしても持てないの、さればといつてあの人の外に心を許し合へると思ふやうな人もない....」

それから少し考へてからため息をつきながら

「川端さんは一そ二人が結婚してしまつた方がいゝと言ふの....私も迷つてね。....やつぱり結婚した方がいゝかと考へるし....」

その頃ではお慶さんも、その地方相手の名もない雜誌の編輯の仕事も行き詰りが來てゐてそこの主人と何となくおもしろくない氣持になつてゐた時だつたから、何んとか新らしい道を開いて行き度い時でもあつた。

「お慶さんはほんとに結婚する氣になつたのかしら....まあ....まあね....」

佐千子はお慶さんといふ人にあるべからざる弱音をきいたやうな氣がして、しばしば本當とも思はれぬ心のおどろきをした。

ところがその佐千子の方が思ひがけなく由井氏との間に、實に急轉直下の勢で婚約が成立する事になつていつた。

丁度英國のジョージ陛下が御即位の御大典のあつた時で英國ではその御大典の飾りの公花としてスキートピーが選まれそれまでそれ程名を知られてゐなかつたスキートピーは急に日本のハイカラ好みな人々にもてはやされるやうになつたのであつた。日英同盟の結ばれてゐた當時の事とて、日本でも此御大典を重大に祝賀したが、佐千子の勤めてゐた新聞社でも提灯行列をして同時に新聞の宣傳をも

しようといふ計畫がなつた。そして幾つもの大團體の申込がひきもきらず社内の空氣はにぎはつてゐた。その頃社員の一人であつた小山内薫氏が當夜行列の人々のうたふ歌を作つた。

戴冠ここに賀をおへて
ジョージ五世の御代は來ぬ
我が松が枝のよろこびは
アベエの鐘にかよふなり

ちかひも深きイギリスの
新大君の御代は來ぬ
アベエの鐘のよろこびは
我が松が枝にかよふなり

といふ氣のきいた歌でふしは「道は六百八十里」のあの誰れにでもうたひよいものと定められ多くの印刷紙は至る處にちらばつてゐる程にすられて當夜ねり出す日比谷公園の社員つめ所から來る人にくばられた。

初夏に近いたそがれの日比谷公園には人と提灯の波で目もくらむばかりであつた。佐千子は此人波のなかでも目につく程氣品の高い外國婦人——日本の老紳士と華やかなその令孃とが一緒である處の——その貴婦人に目をつけて、あの人を思ひ切つて呼び止めてその感想をきいてみたいとしばらくはその後をついて行つた。……と社員の一人で政治部にゐる吉田といふ中年記者が其日本の紳士と立ち話をしてゐるのをみて佐千子は喜んだ。吉田さんが近づきの人なら是非紹介をたのんでみやうと話のきれるのを待つてゐた。

物見高い見物は此貴婦人と日本紳士と令孃とをとりまいてもう黒くたかつてゐる。やがて一禮して吉田氏は歩き出さうとした、佐千子はあはただしく吉田氏に聲をかけて紳士への紹介をたのんだ、吉田氏は快く引受けてその人に紹介してくれた。外務省の役人で名高い人であつた。その紳士の紹介によつて連れの貴婦人はロンドンタイムスの前社長夫人といふ事がわかつた、夫人は故國への土産話に今夜の提灯行列を見物に來たのだと美しい笑顔でしとやかに愛嬌ぶかく佐千子に話してくれた。國へ歸つて今夜のにぎはひを傳へたならば英國民はどのやうに感謝するだらうと御社の新聞を通じて日本の方に傳へてほしいとも語つた。

その日おそく社に歸ると編輯室は「おすし」とビールで大祝賀の賑はひであつた。宮殿下が御微行で當夜の提灯行列を御覽に日比谷公園にお成りになつたといふので社員一同は興奮してやたらに盃をあげてゐた。

「長田さんもうおそいから何も別段の種もないでせう、おやすみなさい」

部長は勞れたやうに歸つて來た佐千子を見て聲をかけた。佐千子はいつに似合はず

「あります、いゝ種が」

ときつぱり言つてロンドンタイムス前社長夫人の傳言を花やかに書いて部長に渡した。はたして此記事は部長を喜ばせた。

「長田さん、すしをやりに來たまへ」

由井氏がかう呼んで佐千子の分を皿に分けてくれた、佐千子は此頃何となく自分をいたはつてくれる由井氏に好意を感じてゐた。

由井氏は時々自分の宿にも遊びに來るやうに佐千子にすゝめたので或る日佐千子は社の歸りに由井氏の宿を尋ねてみたが留守であつた。その後そちらの方に訪問する家があつてその歸りに寄つて見た時も留守であつた。

「由井さん、遊びに來いとおつしやるから私二度おたづねしたけれどいつもお留守ぢやありませんか」

或る時佐千子は例の記者だまりの廣間で大勢の記者たちと話してゐる時はいつて來た由井氏にかう話しかけるとどうしたのか由井氏は赤い顏をして答につまつた…簡單な氣持で言つた自分の言葉に氏は何故赤い顏をしたのだらう、何故答につまつたのだらう——佐千子は瞬間不思議な心持がしたけれどそれも長くは心に止まらなかつた。

その夕方佐千子が社を出ると誰れか後から追つて來るやうなので一寸立ち止まつて何氣なくふりかへると由井氏が佐千子を追つて來てゐた。

「長田さん、今日僕の處へ寄つていらつしやい」

其時佐千子は今日の由井氏の赤面して答につまつた刹那の心持を直解した。人のよい正直な由井氏は佐千子が二度たづわて二度とも留守であつたといふ事をまじめに濟まない事をしたといふ氣になつて答につまつたに相違ないと思つて佐千子は由井氏の不用意にあはした人のよさと正直な純な處のある心を好いた。——藝者遊びをする事があつても、亂暴な氣性があつても、赤職務の上の太々しさがあつても…

佐千子はその晩二時間あまり由井氏の處で話して歸つた。別段の話をしなかつたけれど——たとへば何故婦人記者などをするのかとか女性が一人きりでやりにくからうとかそんな事にすぎなかつたけれど、二人の心持が外の社員を越えてぐつと近づいてしまつた事を二人は互に默認し合つた。唇はもとより手さへふれる事もなくていとまごひをして歸つたのだけれど——

「寂しい時があつたら話しにやつて來たまへ、困る事があつたら相談に來たまへ」

「エ、有難う」

これで二人はおじぎをして別れたのだけれど孤獨に行き詰つた佐千子の心に一點の火がともされたやうなものであつた。…かうし

て由井氏と佐千子は二三度往復した後急轉直下に婚約してしまつた世間は躑躅の咲くころで佐千子の日記に白躑躅の花が押出されてそこに「私の運命もいよいよ定る」としるされた。

此婚約は縁があつて……といふより外にない……佐千子を取りまいたさま／＼の異性、地獄の底までもと追うた大谷氏……それ等の人々につひに答へる事の出來なかつた返事を由井氏に向つてしてしまつた。……物質から言つたらばそも／＼佐千子が家を捨て十圓足らずのお金をふところに無謀にも東京をさしてやつて來たその事の起りは勿論藝術家になりたいといふ夢のやうなあくがれ心からとは言へ其實行をあへてさせたのは一つの結婚を投げ出さうとする舊習に向つての強い挑戰であつた。……それは現代の人が聞いたら……否その時代でも舊時代の人々には解する事の出來ない事で、それは過渡期の一時期卽ち明治の末期に發現をみた若い女性の反抗ともいふべきもので、今の若い女性には考へられない不自由な壓迫が若い女性を盤石の力でおさへつけてゐた卽ち娘は親の示指した家にたとへばいやでも嫁入しなければならない、そして大方はみぢめな屈從の生活がはじまる。之にさからうものは相手にされぬ程きびしい無言の制裁が娘を威壓してゐた……佐千子に起つた縁談は普通聞いたら有難がるのが當然の上縁で、そこの家は名に負ふ田舍大盡で家の裏には土藏が七つも軒を並べてゐるといふ程の家であつた。世間は佐千子の幸運を羨んだ。然し佐千子はさうした田舍大盡の家の嫁というもの丶位置がどんなにみじめなものかを凡そ其地方の周圍の例で知つてゐた。さういふ家に限つてのやかましい家風さうした家の嫁が一日でものび／＼と暮せさうもない窮屈な家に納まつてしまへさうに思へない自分の性質を考へて佐千子はかたく辭退した處がそれが非常な周圍の怒を買つて彼の女に無斷で話をすゝめて無理押しに結納をするといふやうな事になつて佐千子はひどい反抗心をおこしてその頃の若い女性としては大膽不敵にも家を出てしまつたやうな譯で、舊時代の人はこれ程の縁を大した理由もなく投げ捨てゝしまつた佐千子の心持を解する事が出來なかつたし又現代の人々は佐千子程の無理をせずとも何とか解決の道を求められるので——親も解つて來たし社會も若い女性に同情する嫁といふもの丶位置もあがつてきた——樂な時代に進んで來たから現代の人々にも何故そんなに其事が投げ出したり反抗したりしなければならぬ程の自分と隔りのある事であつたかと疑はれるかもしれない。そこが前に述べたやうに明治末期の過渡時代の或る一時期に於ては止むを得ない女性の反抗の一現象であつたのだ。尤もそこには佐千子の場合には兩親と永年別れて成長した處から互の意志の疎通を缺いてゐる點も原因ではあつたが……。兎に角佐千子は空想を眞實に追つて金銀よりも尊い自己の自由發育を冀つてふみ出して來た道であつた。

然るに東京へ來て僅かばかりのぞいた藝術家の生活は佐千子をひどく失望させた。ロマンチックの美しい時代はすぎて自然主義のす

さまじい嵐は日本の文壇から詩壇にも影響し、デカダン派といふやうな一派の人々もあつて、荒んだ生活を自慢にするといふやうな悪風潮も流れてゐた、もとより日本の文壇といふものが夢や空想から醒めて現實に目をつけるもの、美しい一面許りを文筆に托すといふのでなしに、より眞に苦しい人生を寫し出し描きいださうとした處にほんとうの進歩があり發達があつたので。然し眞實にその苦しい道を通りほんとうに自己を戰はせてゐる人の數はむしろ少なくいたづらに風潮に乘つて泳ぎまはつてゐるやうな人々の利己的な無責任な戀愛沙汰は田舍出の佐千子の心を臆病にさせた。自分は藝術家とは結婚しまい。と佐千子はひそかに心を決めてしまつた。そこには田舍の生娘の純情もあつたし打算もまじつて……。捨てられるといふやうなみじめな目に逢はされる世界には近づくまいといふやうな……それで佐千子は却つて戀愛などを口にしたり讃美したり即ち戀愛などと特別にさはがない藝術家以外の眞實のある人と結婚しやうと唯漠然と考へて無茶な歩みを續けてゐたと言へば足りる。

佐千子が藝術家となりたいばかりで外をかへりみなかつた時に幾多の戀愛的空氣や縁談が佐千子をめぐつて勿體ない程の寵遇をひろげてみせたけれど、佐千子の心にそれにひかされるものがなかつた爲におしげもなくそれを受け取らなかつた。さうして實生活の苦しさにあえぎ孤獨の寂寥を感ずるやうになつて、まじめに結婚といふ事を考へだした時、ふとクルスのやうに彼の女の前をよぎつた由井氏と婚約が成立した。それを思ふと佐千子は我ながら首をかしげずには居られない。蟲のいゝ言ひ廻しやうをすれば由井氏はあやかりものとも言へる、もつと／＼戀愛の大家がいろいろに手をめぐらして捕らうとした彼の女を技巧もなしに素手でやつて來てふと捕つてしまつた……又一面から考へると由井氏は大へんなやつかい者を背負ひこんだ不幸な男であつて、普通の家庭的な婦人と結婚したならば何の風波もなしにいゝ御主人様で平和に暮された人が、文學などにあくがれる妻を持つたばかりに、それまでに考へてもみなかつた內的の動搖にいやでも連れられて不安な生涯を送らねばならなかつた――互にそれも緣といふより外はない。

嵐にこらへた鳳仙花が
風のない庭にホロ／＼と散る……

佐千子は或る時或る雜誌でかういふ詩の一くさりを讀んで淚をおとしてしまつた。

それはとにかく二人は此婚約を親に報告してその許しを乞ふ事にした。佐千子は父親は世を去つてゐたし、母親とは互に冷淡な氣持で音信もなく暮してゐたので親の代りに佐千子を可愛がつてくれてゐた親戚の一家に賴んでそれを母親に通じてもらつた。母親は一切をその親戚に任せて來たので話は無事に進んでしまつた。其家の小

父さんは氣の大きい人で日頃母親が冷淡すぎると怒つて佐千子をひゐきにしてゐた處から、その母親に對して一歩も佐千子にひけ目を見せまいとして

「逢ひましたよ其本人に、ちやんと私の處へ仙臺平の袴をはいてやつて來ました」

と立派に話してくれたが實はその仙臺平はもうよほど古びたものでひだのあたりはすぢ目ぎれのしたものであつたから佐千子は心で苦笑してゐた。

由井氏の方でも亂暴もの〻二番目息子が結婚する氣になつたのに大安心といふ形ですぐに承諾は與へられた。

「へえ、お前の處へ來る人があるかね」

と母親がつく〴〵顔を見て言つたと言ふ笑ひ話をもたらして歸つて來た。かうして二人の婚約は事もなく運んでしまつた。

もし由井氏が佐千子の爲に少しでも技巧を弄した事があるならそれは時節にもなくあひ服の新らしいズボンをはいて來た事くらゐなもので――それは或る時由井氏が非常にハイカラな縞のモーニングのズボンをはいて出社したので人の目をひいた。その日由井氏はなか〳〵瀟洒たる紳士に見えた。然しそれは實はあひ服のズボンでそれをはくには半月ほど氣候が早い時であつたけれど、佐千子との心の交渉がそれをさせた由井氏にしては大出來の技巧であつた‥‥佐千子は此ズボンのおしやれについては結婚してからも一言もそれに觸れて聞かないけれど其時の微妙な氣持はよく佐千子に觸れて來た結婚後初夏の時期が來てそのズボンをとり出す時佐千子は一人ひそかに由井氏をかへりみて唯一度彼の女の爲に身を飾つた無器用な幼稚な技巧を心のなかでおかしがつた。

「それでい〻わ、それだからよかつたのだわ、氣のきいた戀愛や技巧など知らない人！」

佐千子の婚約と前後してお慶さんも川端氏との事が右折左曲したあげくやはり婚約成立となつてしまつた。かうして初臺の丘の家で勇敢に藝術家として立つ爲に孤獨の道を歩まうとした二人は一年半程の後に前後して結婚生活に入る決心をするやうになつた。然しまだ時々は此話を打ち切つて今の生活をつゞけて修業しやうかといふ心がきざして來た。

# みちづれ

ヴィクトオルマルゲリット

望月百合子・譯



シャルラ・ハルツング

## 第一章——二

常用の琥珀の香水の香を先立て丶、ポオル・レンベエルは、非常にエレガントな風姿で笑ひ聲を立て乍ら入つて來た。

『ホホホホ‥‥あんた、あの人だと思つたの？‥‥私、昨日メトロ(巴里の地下鐵)の中で鍵を失しちまつたんだよ。手提も、金入れも一緒に‥‥おや！　セシルさん！　まあようこそ！　今日は！』

彼女は親しみをこめてマドモアゼル、セシルに接吻した。

多くの不同點が彼女とアニックの間にあるにしても、彼女はマドモアゼル、アルデイに對しては、妹のために盡してくれたことを感謝してゐる。若し八年前に彼女が大冒險を試みようとして巴里に來ることを選ばなかつたら、戰爭の眞最中、また丶く間になくなつてしまふ遺産の僅かばかりの金と、音樂の才とをもつて、實生活には全然無知の彼女が、巴里で獨りで貧しくてもやつてゆかうとして出

て來なかつたら、マドモアゼル、アルデイは彼女のためにも妹と同じやうにしてくれたであらう。

二人は各々の最近の消息などを手短かに話し合つた。マドモアゼル、アルデイのそれは、一瞬間で凡てが分つてしまふ程、明るい眞直な、泉のやうなその眼に似てゐる——そしてポオルのそれは彼女自身にも分らない程、複雑で秘密が多い。

彼女は何んでも消えてしまふ石盤のやうな灰色がゝつた青い落ちつかない眼をして、謎のやうな、何かしらぼんやりした表情を持つてゐた。

引きつめたブロンドの髪、黒いロープで一層乳白色に輝やく白い皮膚、瘦せて見える程——若し眞直ぐな線が流行でなかつたら、若し小さな恰好のいい二つの乳房が、絹のコルサアジをふつくりと持ち上げてゐなかつたら——ほつそりと背の高いポオルは、田舍者のアルデイの目には、妹と比べて大變相違して見えるのであつた。

年は五つしか違はなかつたけれど、二人の間には、お互の愛情の橋の下に、底知れぬ深淵があつた。ポオルは、自由な生活にも拘らず、僞善になる程心持ちがブルジョアであり。——アニックは心底からの平民で、自由の信念を徽章のやうに掲げてゐる。

呼鈴が鳴つた。今度こそ!....

けれど、急いで——同時に、彼女が愛を期待してゐた人に會ふことの喜びと、今迄自分の心に描いてゐた通りの其人でなかつたらといふ恐れとを抱いて——走つて行つたアニックが呆氣にとられてゐる間に、電報配達人は一葉の速達郵便を差し出した。彼女は見なれた筆跡を見て、神經的に封を切つた....

『リヨンに呼ばれて....お父樣がお惡いさうで....失禮しますつて....』

『おや〳〵!　私は婚約者とお晝を一緒にすることを斷つて來たのに....(彼女はぐつと反身になつてしなをつくつた)まだお話ししなかつたけれど....マルチネさんが私と結婚するの....たう〳〵あの人申込んで來たのよ』

『ほんと?』

『おめでたう?』

アニックとマドモアゼル、アルデイはびつくりしてポオルの傍に寄つた。そして、姉を照らすこの幸福を、妹は何とも知れぬ恐威を感じて不安に思つた....それは、義兄にならうとするこの、いかにも平凡な肥大漢に對する本能的反感か?　或は彼女自身に對する單なる不安か?

この汚らはしい話——ローザの——から起つた思ひがけない心の亂れは、彼女の不安を搖り動かした。いや、彼女にはそんなことは信じられない!　ピエールが、そんな亂暴な獸性に墮落することは不可能だ。まして、そんな惡いことをして體面を汚すなんてことが....いや、いや!　そんなことがあるもんか!　彼女が選んだ男だ

もの！　そして今、彼女は一氣にひどい中傷を拂ひ落して、ピエールを信じた。この點を彼女はいいかげんにしておくことは出來なかつたのだ。

『かうしたらどう？』とメレットが言ひ出した『私が案内しよう。ケエドルセから正午に出る汽車があるから、それでヴエリジイまで行きませう。そして森のレストランでお晝を食べませう‥‥森には一面に鈴蘭が咲いてゐますよ‥‥それは、ともかく、愉快な五月一日だらうよ』

『行きませう！』とアニックもポオルも贊成した。『そして大きな花束をもつて歸りませう‥‥』

もう既に、彼女達は、輝やく青空の下で、その花の香を呼吸してゐるやうな氣持になつた。

汽車中の混雜や、綠の伐採林の中の、春が爆發したやうな暑い太陽の光りで、疲れ果てたマドモアゼル・アルデイは、夕方直接ヴエルサイユに歸つた。二人の姉妹は、めい／＼香の高い花束を持つてランクリイ町とマヂエンタ街の角で電車を降りた。そこにポオルは友達のリリと佇んでゐた。

疲れたけれども愉快な彼女達は、休息の幸福に浸つてゐる民衆の喜びや、巴里の素晴らしい陽氣さにまざり合つた。からかふやうなそして好人物的な陽氣さと、心配のない寛ろぎの感じが、ぶらついたり、遊んだりしてゐる群衆から立ちのぼつてゐた。一つぱいの雜沓は緩やかな流れをして、廣い道をねり歩いてゐた。到る處に、男や女や子供の鈴蘭賣りがゐた。

『幸福をお買ひ下さい！‥‥』

一人だつてこの花盛りの鈴から希望を吸はない散歩者はない。横丁の家々では戸口に出て涼んでゐた。そして家そのものさへ、開け放した窓々から、こ宵のめざめるやうな甘さを吸ひ込んでゐた。

空がオパール色に霞む程暑かつた。步道の端までも、いつぱいの客で擴げられたカフエーのテーラスでは、忙しげなガルソン達の往來が、にせアブサント(酒)の香を撒きちらしてゐた。この臨時雇ひのオーケストラと、見物人とは、丁度劇場の樣々な平土間のやうな觀を呈してゐた。そこでは人々が、家族づれでゆつたりと腰を下ろして、他の人達がねり歩くのや、道も埋まるばかりの無數の顏の行列を見てゐた。

一臺のタキシイもない。そこゝに晴衣を着た運轉手達が女づれでゐた。そして彼等は通りすがる自用自動車を、マークを見ては品評したりした‥‥おとなしく、鈴の音をきくと、群衆は道を開けた。乘合自動車や自用自動車は客を乘せて往來してゐた。それは共同運轉聯盟の、五時から六時迄の一時間しか中絶してはならないといふ命令に從つて、運轉をつゞけたのであつた‥‥だから勞働者の權利

の主張と共に、萬人の爲の彼等の好意を認めなければならない。

國際的休業は、日曜日とかち合つて、その行動の效果を減されないために、翌日に延された。そして――プラス・ド・ラ・レプユブリックに集合された警察力にも拘らず、あれ程素晴らしい午後が靜穩に終つたので――この五月一日は、春の本當の祭禮であり、社會的要求のシンボルどころではなく、寧ろ活動的自然のシンボルであるやうに思はれる。到る所、土から芽に、行動から思想に人生の大なる勞作にと努力する勤勉な人と地との祭である。罷業の日ではなくて、寧ろ自然法則に一致してゐなかつた凡てを休止する日である。

『まるで七日十四日(建國祭)のやうだわ!』とポオルが言つた。

『それよりもつと愉快だわ、過去の代りに未來を祝福するんだもの……希望の熱情がアニックをゆり動かした。若い血はドキ〳〵と鳴つた……青春を本能の奔流に投ずる宇宙的精力の沸騰、大なるリツムの波動。愛する、創造する、あらゆる生物のアンビシヨン!……

この生れ乍らの母たる最大の要求を、何物も彼女から減じさせはしなかつた。マドモアゼル・アルデイの周到な心盡しのお蔭で、彼女の發育には、家庭教育の缺陷に依る今日の多くの娘達の發育のやうな誤りがなかつた。卽ち夫は事業か仕事に、妻は歡樂か苦惱に、これが家庭教育だ。ある女達の爲には事務所や客間、他の女達のためには荒屋や工場、そしてその他のみんなのためには町――アニックはかうした現代の教育から免かれてゐた。

『おや!』丁度ポオルが彼女の家の前に來た時、乘合自動車が止つた。『五時だ! 運轉が止るよ……一寸お上り……リリもゐるだらう……私は暫らくあのひとに會はないんだよ。あのひとちつとも家にゐないんだもの。』

アニックはリリを嫌つてゐたけれど、步いて歸ることを思ふといやだつたので誘はれるまゝになつた。けれど廊下にはいつた時、門番がポオルを呼び止めた。

『リリさんは明日でなければお歸りにならないと仰つてゐましたよ……』

『で、鍵は?』

『私は持つてゐませんよ』

『貴女に殘しては行きませんでしたの? さあ困つた! 私、自分の鍵をなくしちまつたのよ』

『行きませう。ビールでも飲み乍らカフエーで待つてゐませう……そして私の處へお泊りなさい。私は六時半にプルウサ夫人の處へ行けばいゝんだから。仕方がない、私、このままで行くわ!……亂れ髮で、埃だらけのまゝで』。

ポオルは唇をすぼめた。彼女はプルウサ夫人を嫌らつてゐた。第一に彼女は、プルウサ夫人が妹の親友であり、庇護者であるのを妬いてゐたから。それにこの夫人がオートイユに營んでゐる仕事が(私

生兒を生む娘達の救濟所）彼女の偏見に逆らふものだつたので。修道院にゐた頃からのくせで、同性への友情に傾いてゐた彼女には、結婚しないで男に身を與へ得るなんて云ふことは——まして法律を外にして子供を生むなんていふことは、考へられなかつた。これは彼女と、アニックとの果てしのない議論の題目だ……ポオルは、自由結合とその危險とは、罪の重いユトピアだ！ 私生兒といふ、この重荷を、この弱點を自ら好んで生れて來るのでもない子供に負はせるなんて、氣ちがひでもなければ出來ない！ と主張した。

彼女達はマヂエンタ街のとあるカフエーのテーラスに腰かけた。

『何んて暑いこと！』アニックは溜息をした。

『リリがゐなくて氣の毒だつたわね！ あのひとさへゐりや、家でお化粧をしなほせたのに』

彼女は一寸肩を聳かした。

『ありがたう。あのひとにはまたいつでも會へるわ』

彼女はリリに對しては、姉に變な感化を及ぼすので、いい感情をもつてはゐなかつた。ポオルはいつもリリに對して一人の朋輩以外の何ものでもないと、眞面目に熱心に辯解してゐたけれども、アニックはこの關係のために、姉が本當の藝術家になれなかつたり、あのマルチネのやうな男と結婚する代りに、ほんたうに愛する男との生活を築くことが出來なかつたりするのだと信じてゐた……

『あんたはリリを誤解してゐるのよ。あのひとは親切な娘だよ……まあ！ 笑つておいで……第一あんたはどうしても私つてものが分つてくれないんだよ！』

『でも私は、あなたを愛してゐるわ、それが肝心なことよ』

『いいえ、すつかり理解し合ふ時でなければ、本當に愛し合ひもしないんだよ！』

アニックは苦笑した。

『ぢやあなた、マルチネと一緒になれば迚も不仕合せよ。だつて若しリリとあなたがお互に持ち合つてゐる『理解』といふものが、あなた方の友情を證據立てるものとすれば、どの點から見ても、あなたの未來の夫とあなたとがお互に理解し合ふやうに出來てゐるとは思へませんからね！』

『分るものかね、あの人は、本當は、見たとこ程亂暴ぢやないんだよ。私は戰爭中、ブリダ病院でリンネル係りをしてゐた時に、金狼をすつかり馴らしたことがあるよ……そして一九一八年に縣の食糧補給係りになつた時にはアルヂエにまでも連れて行つたんだよ』

『だつて金狼は夫としての要求をしなかつたでしよう』

『ばかな』ポオルは赤くなつて呟いた。

安定のない生活からくる樣々な仕事や、歡心を求める男達が常にゐるにも拘らず——男性の要求の前にまづ好奇心と、それと同じ强さの結果を恐れる心を持つてゐた——彼女はどんな不意の場合でも羞恥心をもつてゐた。だから彼女は、最後のものゝ侵害からも、罪

なしに失ひ得ないと思つてゐた處女性を護ることが出來たのであつた。それは彼女が、至上の德として、同時にまた出世の最高の方法として自負する錯覺的關門だ。

かう云ふ錯覺のために、その出世を待つ間彼女は――モオリセットの店に助手として入つた時、そこのマネキンガールを勤めてゐたリリ・ブロンチエと共同生活をすることになつた。このコカイン愛用者の變つてゐるところや『それを除いて』といふ綽名やは直ぐに彼女を惹きつけた。それでもポオルは結婚――そこに彼女は、他の資力がないので疵なしに辿りつかなければならない――が、女性の全使命の論理的唯一の目標であると考へることに變りはなかつた。彼女はその半ばの成功の行きづまりに、この結末をしか、考へなかつた。そしてアニックがからかつたのを不快に思つた。

『私、ばかぢやないわ』とアニックは抗議した。『只私は、まちがつた計劃を恐れるのよ。少くとも私は論理的だわ』

『あんたはどうしてそんな理論を持ち出して私を怒らせるの！　そんな理論があんたをどこへひつぱつて行くか今に分るわ……え〻え！　私や、あんたが考へてゐることを知つてゐるよ。私が時代遲れだつて！　どうしろといふの私に？　私はあんたのやうに自覺した組織的な革命家ぢやないよ！　私は感情ばかりで生きてゐる人間だし……神經質な女なのよ……私のやうな生活をしてゐれば誰だつてさうなるよ……あ〻若し私に音樂がなかつたら……幸ひと音樂はあらゆることから私を慰めてくれる！……そして私を別世界につれて行つてくれる……』

固い意志をもつて、ポオルは常に樣々な流轉を通つてこの救ひの避難所に歸つてくるのであつた。たとへば――リリ、ブロンチエが賣子になると同時に、マネキンガールになつた彼女は、前より多くの收入を得るやうになつたけれども――根氣よく竪琴の敎授をつゞけ更らに勉强を始めた……才能があつたので間もなく彼女は、夜の歡樂境の最も優れたオーケストラから懇望される迄に進歩した。

眞珠仲買人のルイ、マルチネが彼女に目をつけたのは、かう云ふモンマルトルのあるレストランでであつた。彼は晩餐や、安物のダイヤモンドで容易に樂しみが買へると思つた。併しこの『穢な女』――その名は、いまは立派なコンセールのプログラムに表はれ始めた――に『え〻』と言ふことを、但し市長の前で――約束させる迄には、幾日も、幾週間も、幾月もか〻つた。たとへば、その代りに、針仕事も、モオリセットの客引もしなくていい！音樂も、それもおしまひだ！　少くとも公衆の前では、マルチネは彼自身の妻を、本當の家政婦を欲したのだ……

『私だつたら躊躇するわ、捨て〻ゆくものは知つてゐるけれど、何が待つてゐるか分らないんだもの』とアニックは言つた。

ポオルは深く溜息をついた。

『それや！……安心だよ。いつでも明日を恐れないことさ！……世

間のおもわくなんかは言はない‥‥そんなことを言へば馬鹿にされるからね、アナルシストのあんたに！　だけど！‥‥人並の生活に入ること！　夫や、子供や‥‥』

『愛しもしない夫！　そしてその夫に似る子供達‥‥』

『さうさ、だけど家庭！』

『家庭？　それは鎖よ！‥‥犬の皮みたいな夢よ‥‥あなたはそれを買ひもしない先に賣つてしまふのよ。いまにそれがどんなもんだか分るでせうよ‥‥』

この、大抵の女達の卑怯さ、生活に必要な金を自分で働らいて得ようとはせずに、男の勝手な意志に待つことしかしない服従は、アニックの悲しい驚ろきの一つであつた‥‥

『だけど、あなたは考へて見ないのよ！　今日、あなたは自由よ、明日、結婚すれば、後見人付になるのよ、女中‥‥それだけにもゆかないわ！　無能力者として、子供や狂人と同じ取扱を受けるのよ‥‥』

彼女は、姉に對して、また無數の他の姉妹達に對して、この盲目的な奴隷根性を怨んだ。殊に多くの破滅の原因である彼女達の無駄事を怨んだ‥‥男のために、女にとつてはうるさい、浮薄な男のために花粧をする女‥‥戰争までも含めたあらゆる産業が、廣大な近代的機械製造が、この氣に入られる機械のために、黄金の製造に變つてしまつたのだ！‥‥

戰争！‥‥眞珠の頸飾りが長くなり、スカートが短くなる爲に、母親達が息子達にさせたことを思ふ時、何百萬といふ人間の死を、このばかげた殺戮を仕出かさしたことを思ふ時、女達が母親が若し子供達を生命尊重の精神に、勞働と平和とを愛するやうに、正義を宗教とするやうに、育てようと思つたならさう出來たであらうに！‥‥さうではなかつた。彼女達は寢そべつてゐる犬共のやうで、鎖と共に鞭を受ける價値しかないものだつたのだ！‥‥

彼女は肩を聳かした。

『みんなが各々自分の幸福の主人なのよ。私は私の幸福を造るやうに努力しますわ‥‥だけどみんなが各々自分の不幸の主人でもあるのよ‥‥仕事をやめることを承知したりして、あなたの不幸を招かないやうになさい。少くとも、言つておきますが私は‥‥おや！　何が起つたんだらう？』

東の停車場の方から聞えてゐた騒ぎは忽ち激しくなつた。女工達だ！　二週間程前から罷業してゐた女工達で、解雇女工の爲に公けの示威運動——勞働取引所にC・G・T（勞働總聯盟）の代表者全體を集める内輪の集合の外に——を決行した唯一の團體であつた。

集合信號としてプウプル新聞とユマニテ新聞とを持ち、明るい色のブルウズを着、派手な帽子（四錢ばかりの花飾りのついた帽子と粗末な可愛い着物）を被つた集團は、物見高い人々が段々のやうにぎつしりと人垣を造つてゐる中を進んで來た。みんな、赤いリボン

で結んだ鈴蘭の小束を持つてゐた。この勇敢な百人ばかりの女工の一隊は、警察隊に取圍れて歩き乍ら、『仲買人をやつつけろ！…やつつけろ！』といふラムピオンの歌を唄つた。そして若し亂暴者が邪魔でもしさうになると『あの上にお登り！　そしたらモンマルトルが見えるよ！』といふ抗議的合唱が起るのであつた。折返して唄ふ場末町の歌は、元氣に、まるで挑戰かなにかのやうに、巷に滿ちた…嘲るやうなその聲は、街の大騷ぎを貫いて、物見高い人々の心に同情を呼びさますのであつた。

『可哀さうな娘達！　尤もだわ』とアニックは言つた。

『さうでもないよ…リリにきいてごらん。あの娘達は金が餘計とれゝばとれる程不平を言ふんだよ。私だつて、モオリセットの助手をしてゐた時は、一日九フランで滿足してゐたんだよだのに…』

『肉もパンもみんなに一樣に高くなつてゐるわ。で、いまあなた、マネキンガールとしていくら貰つてゐるの！』

『月、七百フランよ』

『そしてリリは？』

『千五百法。あの人は賣る方に關係してゐるから』

『けれどそれああの娘達とは立場が違ふわ』

　眞面目に、アニックは、餘りに少ない給料や、ブルジョアの虚榮心を滿すための彼女達の青春に同情した…古い金持も、成金も、一枚のロープに三千法を平氣で支拂ふ有閑階級であり乍ら、女工達が餓死しないために賃銀を增してくれと要求したとき、雎鳩のやうな叫びを發したのであつた。

　ひ弱い體を眞直に伸して、微笑を浮べ乍ら女工達の一隊は同盟事務所の方に向つて進んで行つた。彼女達の多くは苦しい貧しさのうちに育つても、パリジャンヌに生れ乍ら備つてゐる、雅さを持つてゐた。そして彼女達の青春は、奴隷的勞働にもめげず、美しさと朗らかな勇敢さとを發散してゐた。だからと言つてアニックは、ポオルのやうに、彼女達を下らないとは考へなかつた。寧ろその反對だ…

　行列はランクリイ町の角を曲つた。勞働取引所までのマヂエンタ街の群衆を、警官隊が追つた。ポオルはびつくりして叫んだ。

『おや！　乘合自動車が動いてゐるわ！もう休止時間が終つたんだわ、御覧！　プラス・ド・ラ・レプユブリックの方を…』

『いゝえ、他の自動車が動かないもの、あれはきつと市民組合の有志者よ、あの社會の救主とかいふ…あんなに狼狽てて！…氣をおつ…』

　彼女が言ひも果てないうちに、警官に追ひ散らされる群衆を避けようとした臨時運轉手は、その重たい車の方向を失つてしまつた。そして步道につき當つて、街燈をひつくり返し乍ら群衆中に突進した。忽ち悲鳴と大狼狽が起つた。夢中になつた人間の波は、椅子やコップをのせた卓子をひつくり返したり、客達を寄し倒したりしな

がら、テーラスに押し寄せた。

アニックは常の通り落ついて、ポオルをカフエーの内に引つぱつて行つた。物の壊れる音が引續いて起つた。その間に、すばやく一人の死人が隱され、三人の負傷者が附近の藥局につれて行かれた。自動車を圍んだ群衆は『始めて働らきやがつたんでもあるめえ?……へぼ貴族奴!……やくざ者奴!』と罵つた。そしていまや鐵拳が飛ばふとした時、警官の一隊が荒れ亂れた街を震撼させ乍ら押し寄せて來て、群衆を追ひ散らした。

このすさまじい勢の一隊は、勞働取引所からこちらの步道にそつて突進して、散步者も彌次馬も、誰彼の差別なしに追つ拂つた。大變な騷動がまき起つた。この時突如として、つなみのやうに道を蔽つて黑い渦卷が現はれた。押し合ひへし合ひ、巡査に撲ぐられる人間の大混亂だ。これは集合の歸りを警官隊が亂暴にもひつぱつて來た組合代表者達であつた。衝突は激しく、不意に起つて、直ちに大亂鬪になつた。鐵拳が飛ぶ、ステッキがひらめく、そしてやがて(猛り立つた警官側が拔劍したので)サーベルの襲撃に對するナイフの應戰になつて、さつきまでは穩かだつた勞働者と巡査とが、再び點火された永遠の憎惡のために、生命がけで戰つた。ブラウニングが發射され。敵味方の犧牲者が倒れた。

アニックは逃げ迷ふ混亂中に、血みどろの顏をいくつも見た。惡意のない傍觀者達や示威運動者達は出來るだけさう云ふ人々に道を開けてやつた。アニックは呆然としてしまつた。そして激昂した人々のこの野蠻な行動に對して全くの無力さを口惜しいと思つた。

惡鬼のやうな眼をした狂亂の一群に追ひつめられた老人がカフエーの中に逃げ込んだ。そこにゐた人達が席を開けてやつたが、老人はポオルに倒れかゝつた。そのとき、金色の頸紐のある帽子を被つた巡査が追ひついて來て、その老人の頭に拳骨を喰はせた。他の巡査達は、金で裏打ちをした靴で蹴つたり踏んだりした。

『何んてことです!』とアニックはその巡査の腕をつかんで叫んだ

『貴方が　下層階級の子の……』

『貴樣はがき共の世話でもしてゐろ!』と狂亂の獸は叫んだ。そして拳骨を固めて力任せに彼女の胸を突いた。アニックは倒れた。激しい痛みと同時に、又も額を何かで撲ぐられた。彼女に階級尊重を死の懲戒で敎へたのはそれは『下層階級の子』であつた。

アニックは氣絕してしまつた。



# みなみのくに

水谷靜子

島國の冬あたゝかし家々にめぐらす椿いまさかりなり

丘ぞひの椿あかるき花かげは水汲みかよふ女をりをりに

眼の下は海ただ靑し雨ながら畫を描く人に傘まゐらすも

前景の丘の起き伏し見おろしてつづく海べを人寫すかも

海とほくかよふ島もあらむ月の夜は島をめぐれる波の音高し

冬ながら芽ぶき明るき國に來つ旅にしなごむこころかなしも

あたゝかき國べとおもへこもりゐて書讀む夜は時雨來にけり

山かげに椿の花など拾ひゐし夕ひとゝきを汽船の音きこゆ

海ばらのま靑にひとつ浮く船のしづかにしまわるうねりかなしも

ここに見る伊豆の島山はるけくも遠來し旅をいまさらに思ふ

# 男性訪問

5

安部磯雄――八木秋子

――安部さん答へざるの記事――

**八木**　ながい御病氣で、ずいぶん大變でございましたね。

**安部**　全くひどくやられましたよ、今度といふ今度は……さあ、皆さん、ずつとこちらへ寄つて下さい。

**八木**　もうだいぶおよろしいのですか？

**安部**　何しろ長かつたので今だにはつきりしないのです。食事などもなるべく御飯をとらないやうにして、パンだのオートミールなどで我慢することにして、まだ要心深くやつてゐる始末ですよ。

**八木**　確かチブスで被居いましたのですね。

**安部**　腸窒扶斯のところへ厄介なことに肺炎を併發したのです。三週間のあひだといふもの意識不明で――病院に二ケ月、やうやく自家に歸つたと思ふと今度は腎臓炎が出て一ケ月、それから箱根へ行つて靜養すること二ケ月で、以來今日までにもう二ケ月の日子が經つてゐますが今以てこの始末なので、實に閉口してゐるわけなのです。

**八木**　ずつと御入院中奥樣の御看護でゐらつしやいましたか？

**安部**　はあ、何しろ看護婦といふのがやつぱり思ふやうにやつてくれませんからね。

**八木**　職業意識だけで……

**安部**　さうです。たゞ職業といふ氣持だけですね、氷枕へ入れる氷をよく碎かないから尖つた先で穴があいて、肩から何からびつしよりなのです。そのために感冒をひいてしまひました。而もそれが一番大切な時だつたのですからね。これでは不可ん！　といふので、以來家内と娘と付ききりで看護婦の監督といふわけでした。

**八木**　容易ならぬ御病氣だつたと感じないではゐられません、甦つた歡び！　とでも申すやうなお氣持がなさいますでせうね。

**安部**　全く命拾ひをしました。誰ももう駄目だと思つてゐたやうでしたから。この病氣をすると頭腦も體も生れ變つたやうによくなるといひますから、全快した上は思ひきり働き度いと思ひます。……これまでは、資本家の息子が親ゆづりの財産で生きて來たやうなものでしたが、これからは自分の力と皆さんのお力とで再生した樣な元氣で健康に充分氣をつけながら出來るだけの仕

事をやつて行きたいと思つてゐるのです。

**八木**　ほんたうに　今度の議會へはお出になられませうか？

**安部**　毎日ではありませんからね、傍聴の程度で出やうと思ひます。

（以下八木記）先生は、お話のあひだにもちよい〳〵素川さんと城さんの手許へ視線を走らせてをられる。そこで――實は――と「女人藝術」の男性訪問の來意を申上げると安部さんは、突如として向き直られた。

**安部**　それは困ります。今朝ほどの電話では別に雜誌の談話についてのお言葉がなかつたので、何か直接お會ひして話さなければならない相談でゝもあるのか、とかう思つたのですぐお出で下さるやうにお返事したのです。いま申上げたとほり健康のために纏つた談話は一切禁じられてあるので、個人的な話ならば格別、新聞雜誌に載るものはみなお斷りしてある關係上、どうも折角ですが……

漫談的なもので極く短い時間でよいのですが――と私は一生懸命にお願ひした。

**安部**　いや、私はどんな漫談であつても新聞雜誌に掲載される談話はすべて準備なしには致さないことになつてゐるのです。豫め斯く〳〵の問題に就ての意見を訊きたいといふ通知をいたゞいて――つまり問題を出して戴いて、更に御會見の日時を申上げた上でお會ひしお話するとになつてゐますから、突然のかうした御訪問には何と仰有つても、どうもお斷りするより致方ありません。誠にお氣の毒ですけれども、いづれ私の健康がもう少し恢復してから改めて、前以て問題をお送り下さつた上で御訪ね下さい

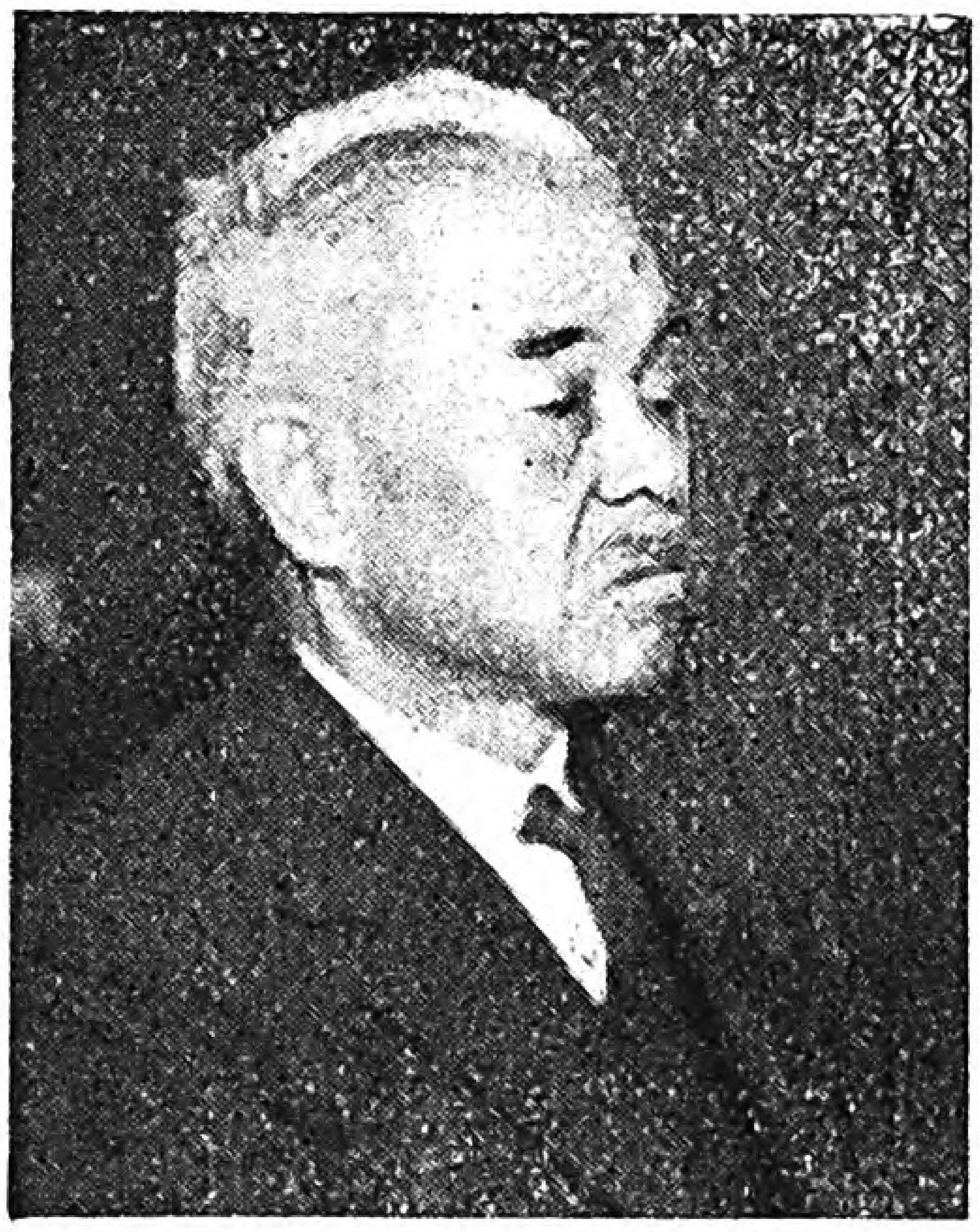


さうして安部さんは溫厚そのものゝやうなお顏で――まことにどうもお氣の毒だつた。と繰り返して言はれる。かうなつて見れば、前に手續きを踏まなかつたといふ落度がこちらにはあり、他の事とはちがつて、事安部先生の御健康に關する以上は何といつても唐突の訪問を詫びて引き下るより外はない。安部磯雄氏訪問の不成功に終つたといふ顚末を記す所以である。

　はじめ時雨さんの意見では、一月號の男性訪問は一方が詩人の西條八十氏であるから、今度は一つ方面をかへてあたかも政治シーズンに入る際ではあり無産政黨の合同問題も實際的に論議されてゐる時だから、紙面の内容を一層充實させる爲めに誰か無産黨代議士中の權威ある人を選びたい。それには黨主にして思想家、その上人格者である安部磯雄氏にお願ひしたらどうでせうといふ譯から安部氏に白羽の矢が立つたので、時雨さんは特に氏の「人格」に敬意を表する意味で御自分で出かけることになつてゐたのである。ところがその朝になつて時雨さんに突然の用事が出來たために私が代つてこの役目を引き受ける事になり……止むを得ず……前記の人達と電話でうち合せて出掛けた！　とざつとまあかういつた經過だつた。

　そこで「女人藝術社」はどうして安部氏を訪問する前に豫め電話で來意を告げておかなかつたか？

　最初電話で訪問の申込みについて御承諾の



あつた時長谷川さんはいつた。
「安部さんは談話といふことに非常な几帳面な八釜しい方だけれど、無産黨の方なのですものね、政治問題なら喜んでお話し下さる筈だわ」と、それは當然すぎるほど當然な言葉である。「無産黨の方だから……」その意味は私達に、他の思想家や學者や藝術家におけるやうな面倒な手續きを不必要と思はしめた事は、これもまた當然な話ではあるまいか。

道々、歩きながら安部氏に對して私はどういふ問を以てすべきかについて考へを纏めなければならないと思つた。來議會に對する各無産政黨の態度といふこともあらう。そのほか合同問題、ことに社民黨と極左の新黨準備會を除く中間、地方、極右的各黨が單一無産政黨結成を形づくる第一歩として合同の實際問題に直面しつゝある現在、社民黨のとるべき態度及び將來などに就て、また田中内閣の對支政策に就ての意見から自作農法案など議會通過の暗礁ともなるべき問題は澤山ある。その他にも政治問題としては既成政黨の將來の豫想。殊にいよ／＼反動化し無産階級に對する彈壓が露骨になつて行くであらう日本の政治的動向の下にあつて、如何にして改良主義的、民主主義的な無産黨の理想を政治の上に實現せんとするか、等、々、々々……

だが、こんな問題はあまりに常識的だ。婦人參政權その他婦人問題だつてさうだ。それよりももつとくだけた先生の產兒調節論はどういふ動機から生れたものかなど――

往時の基督敎社會主義者として活躍された當時の回顧も面白いだらう。堺利彦、幸德秋水、石川三四郎、内村鑑三、等、等、のいろいろなお名前が出て、その人達がまるで異つた道を歩みつゝある現在に就ての感想だつて面白いに異ひあるまい。

いや／＼、もつと遡つて米國でお若い頃つぶさに嘗めた勞働生活の頃のうちあけ話――またある。人格者といはれて謹嚴そのものゝやうに印象される先生は、いまこのお年になつて來し方をふり返つた時、果して……俺も若い時分ちつとは道樂の味も知つて、面白い思ひ出も殘しておくのだつた……と思はないだらうかしら？　否、ひよつとすると微笑ましい事の一つや二つなかつたともいへまい。

早稻田の恩人――否、日本のスポーツ界に輝くばかりの功績をのこした先生は、いま日本の青年男女の生活や感情に、スポーツがこれほどの影響をもたらした事に驚いてゐられはしまいか、これほどの享樂的な感情となつて……、野球の長い生活の面白い回顧談もあるかもしれない。

だが、かうなるとまるで「その頃を語る」式になつてしまふ。飛躍してひとつ「先生の片方のお眼はどうあそばしましたの？　そのお眼が先生の人生觀の上に何かの影響を……」といつた失禮な愚問も許されやうといふものだ。愚問？　さうだ愚問でいい。どうせ先生とは個人的に相識の私だもの、開き直つてペタンテイツクにややこしい問題でぶつかつて行くより、こゝはひとつ行き當りばつたりに體あたりといふところで――いや／＼何といつても向ふは安部先生のことだ、そこはあく

まで禮を失はない程度にやはらかく攝め手からせまつて行くといふのが賢い戰法かもしれない。愚問、愚問……

讀者諸姉よ。私はざつとまあかういつたやうな空想…「問題」を頭の中につめこんであの溫厚な安部先生の前に行つたのです。ちようど子供がクリスマスの前夜、たのしい夢をその靴下へ滿たすやうに…

一…二…と安部先生のあの溫顏、却つて先生にはおしあはせであつたでせうし、また私も救はれたともいへるでせう。——歲晩のある日の、カリケチユアから。——

しかし、先生のあの溫情と人格の故に、それに甘へて少しばかり私は言はせて頂きたい。

安部先生がいかなる場合にも公人として訪問を受ける場合には豫め問題を提出しておいてから來てくれといはれる。その言葉はまことに學者的な、よく言へば御自分の言論の責任を重んずる潔癖性を表はしてゐる。然しこれは純然たるブルヂョア的態度以外の何物でもない。苟も無產階級の代表者と名のつてをられる以上は常に何人にも會つてその政治的意見を發表し思想をプロパガンタする任務を有つてゐる事は自然であり、それは同時にまたカルトの役目も持つわけである。殊に一黨の黨首として政治的位置に立つほどの人ならば日常、いつ如何なる所においても新聞雜誌記者のインタギウを覺悟しなければならない。その場合、安部先生は突然だからとの口實で意見の發表を拒むのであらうか？

病氣にさはるから談話は出來ないといはれる。しかも私的な面接であれば懇談することは苦しくないといふ言葉である。若し安部氏にして眞にプロレタリアの意識を持つてをられるならば、私的生活の中にもまた意識は織りこまれてゐなければならない筈である。かうした私的と公的との面談の上に區別をつけたり、發表されることに意識的な用意を見せたりすることが、單なる學者とか思想家ならば、私は何も思はない。併しかりにも「無產政黨」といふ土臺の上に立つ人としての排他的な行動として表れる時、一言の抗議をおくらなければならないのである。（八木）

# 6 西條八十——英美子

英　私が先生の御指導をうけましてからもう十年にもなりますが、先生はちつともお變りになりませんのね。お美しい方として自他ともに許していらつしやる——

西條　それは詩の話でせう。ハヽヽ。それは詩ならば自他？　はどうですかね。

英　私が今日までかうして伺ひますのは、先生があまり美しい御容姿でいらつしやる故に、幸か不幸か無事に師弟の關係で來たからでございますよ。

西條　さういふことがあつたのでしたか。それは知らないですね。

英　先生がもしも女に御生れ遊ばしたら、さだめしすきのないおなりを遊ばすことゝ思ひますが、近代の女性觀にもきつと深い觀察がおありの事と存じます。可否は別として斷髮の流行は日をおつてふえてまゐりました。今後も盛になる事と思ひますが、先生

は斷髮についてどうお感じになりますか。

**西條**　私は大好きです。

**英**　私も若い方のは可愛らしくもあり又清新な感じがしますが、年をとつて四十五十になつての斷髮はどんなものでせうか。

**西條**　私はね、人間の要求で一番强いのは、若くなる事だと思ひますね、斷髮をするとどんな人でも若く見えますから、若く見えることは誰でもすきな事ではないかと思ひますね。斷髮にして段々年をとつて行つても、その頃は仲間が出來て來るから氣にする事はありませんね、



**英**　斷髮の型については？　例へば支那婦人のやうにかう、簡單なおかつぱなんかおすきでいらつしやいますの？

**西條**．（傍の斷髮夫人を顧みて）奥さん、色々型があるのですか。私はさういふ事よく知らないな。

**英**　フランスではずゐぶん色んな新しい流行もあるので御座いませうね。ヌエットさんの斷髮なんかも簡單なやうですね。

**西條**　あ、フランス人、詩人ですね、ノエルネット…　さうですね、私そんなこと細かにわからないですね、私は一體女の人ではまづ眼だけ見るのですから——着物なんか記憶に殘らないですよ。なり、かたちなんかも覺えてはゐない。たゞ眼だけ…

**英**　フランスにいらつしやる頃のお話を少し…外人は大變足に注意をしてゐるやうでございますが、非常に美しいとお感じになつたことおありになりますか？　よく外國作家は足をとりいれてゐますが、日本にはないやうでございますね、例へば卓の下で足で內證話をしたりなんか…

**西條**　ありますね。あのミッセの、ほら…「世紀末兒の告白」——子供が卓の下をのぞいてゐると男と女の脚がふれあつてゐるのを見て、性の眼覺めを感じるといふやうな…日本の作家にはさうした事をとり扱つたのはないですね。

**英**　お電話なんかかゝつて來た時朗らかな聲に魅力をお感じになる事もおありでせう。

**西條**　さうですね、二三人聲の美しい人を知つてゐるけれども、…私は聽覺はあまり銳敏ではない。耳の人ではない。早稻田で何年か講義を聞いたが、講義の時でも、山といふ事が出て來るとすぐ山のことを考へる。さうして考へてゐるうちに、講義が進んで行つてしまふ、そんなわけで私の詩には視覺だけが働いてゐますよ。フランスの詩人ユーゴーなんかも眼の詩人です。あの人の描くものは、眼でみたものが多いです。

**英**　先生は眼だけに心をおひかれになるとおつしやいましたが、總じて一重まぶたと二重まぶたとどちらがおすきでいらつしやいます？

**西條**　二重まぶたがすきですね。眼の表情が複雜になるからでせうね。

**英**　眼はとにかく心の窓ですから——でも一寸はれぼつたいやうなのは、仇つぽいぢやありませんか。

**西條**　えゝ、どうも…私は美しいといふ事

はあまり氣にしないですね。

英　でも先生はよく美しい方達をおつれになつて、あるおでんやさん（城さんの…）へお出かけになるさうではありませんか。

西條　あれは子供ですよ、いや子供ですよ。

英　いえ、子供の部ではなくて…お若い方と…

西條　いや、實はそんな事で私は違つたお孃さんなんかとつれ立つて歩くと評判ですが、若い方に訪ねて來られると話しがないので、活動寫眞や散歩に出るのです。惡い事をするのなら外へは出ないですよ。

英　でも先生、戀をすると足が丈夫になりますつてね。

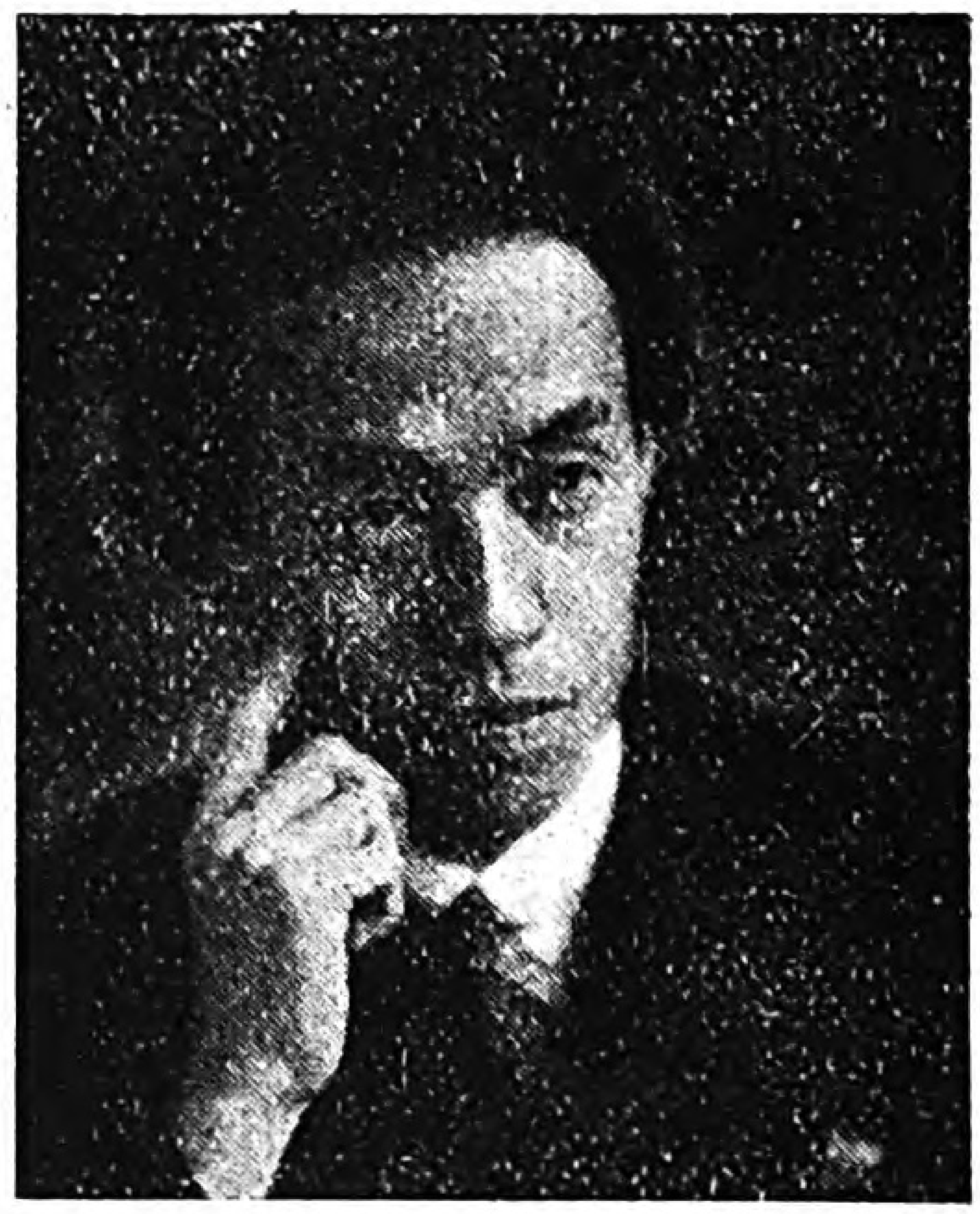
西條　それは昔のことですよ。

英　先生の詩の愛讀者はずゐぶんおありでせう、詩に憧れて訪ねて來る少女たちにはどんな氣持をお持ちでいらつしやいますか？

西條　私はね女の氣持で一番すきなのは十六七の乙女が偶像崇拜的な氣持ちで訪ねて來るこの純な氣持、それから細君になつてしまつて、どんなに打たれながらもついて行く氣持、この二つの氣持は女にとつていゝ氣持ですね。それがあるから女は成佛出來ると思ひますよ。男にはそれがない、男はもつと冷いですね。

英　男の方にはサディズムと云ふやうな氣分が幾らかどの方にもおありぢやないでせうか。奥さんをおはたきになつたことございますか？

西條　あります、がこの頃はあまりないですよ。まあ聞いて下さい。私の歌にこんなのがありますよ。



腹立ちて叩きはしたれしかすがに
　女の頰のやはらかきかな

英　まあ――さすが詩人でいらしやるわね、あたし、そんな方にならなぐられてみたうござんすわ…ホヽヽヽ。

西條　いや、どうも…

英　黒髪をお掴みになつたやうな事は？

西條　そりやありませんね。

英　奥様のおぐしがあまりお美しいから…

西條　いや、あの人は日本髮に結つたので、眞中がはげてゐるので敬遠したのです。だけども外國では、ホテルで隨分夜中に悲鳴をあげてゐるのを聞きました。

英　接吻が激しいやうに、さういふ事も强烈なんではないでせうか、その時、先生はお一人でいらしたでせうが、そんな氣配をお聞きになつて、あるものを、眼で見る以上にそゝられはなさいませんでした？

西條　自分にそんな氣持のあつた時は、そんな感能が働くでせうが――

英　ではその當時は餓えていらつしやらなかつたのでせう。

西條　さうかも知れませんね、私はそんな事はわからないですね、性慾のことはわからない。ロマンチックのものしかわからない。今でもお友達は娘ですよ。私はロマンチックですよ。

英　それが散歩になるのでございますのね、でも、私は十年間、先生と御一緒に散歩したことがございませんわね。

西條　それには私は遠慮する理由があつたんですよ。

英　とんだ所で藪蛇をつゝいてしまつて……では先生、お友達としての女性は？

西條　私は女性のお友達なんかありませんよ。男の友達も一人か二人ですよ。私は我儘な人間ですから、それがなほらないのでお友達が少ないのですよ。

英　そりやよく承知して居ります。先生の詩を拜見しますと、戀愛を歌つた詩が多いやうでございますわね。私、今日の前に八十なく、今日の後に八十なしと信じてゐますが——春と秋とどちらが戀をよけいなさいますか？

西條　私は春から初夏へかけて戀の詩が出來ますね（西條氏、巧みに戀を詩に逃げる）

英　數多い女性の中に、心中といふどたん場までいらした事がおありでせう、それを今日は承りたうございますわ。

西條　夫は打ち明けられませんね。相手が奥さんになりましたから、私が島崎藤村だつたなら節子の事はちつとも書かなかつた。

英　でも「靜なる眉」にもありましたのね。

西條　あれは何でもない、空想ですよ、九條さんだらうと、誰かゞ言ひましたが、あれは他人の奥さんです。その後ですよ、その問題が一ぺんあつたのは——

英　あの、とても深入りなすつた方があつてその方は結婚して北の方へいらしたとかいふのには？

西條　いや北の方へは行かないです。東京にゐますよ。私はその人の爲に非常に長い旅行記を未發表のまゝ破つてしまひました。

英　中々先生も正直者でいらつしやいますね

西條　私は自分を一度でも愛してくれた人の氣持は、守ります。藝術よりもその氣持を重んじます。

英　それは私どもにとつて非常にたのもしいわけで御座いますわ、この間ラデオで聞きましたがあの

ほれちやなるまい　わしやほれやせぬ、
ほれりや地獄の逆おとし、

あゝいふのをお作りになるお氣持は、やはりすつかり女になりきつて？

西條　あれは「苦樂」に發表したものですから大衆的な氣持ちで書いたのです。

英　家庭の伴侶としての御夫人は——美しく聰明な奥樣をよく存じて居りますから、別に伺ふまでもないやうで御座いますが、例へば、夜更けてお歸りになつた時など、いつまでも起きて待つ奥さんと、知らん顔をしてやすんでしまふ方と、どちらが

西條　私の處など、勝手な事をやつてますね。ゆうべなど歸つて見ると學生と活動へ行つてましたよ。

英　やはり男の方はその方が樂なお氣持でいゝんでございませうね。

西條　そりや、待つてゝくれない方がいゝですね。

英　何かで拜見しましたが、月に關聯した非常にデリケートな詩がございましたが——

西條　それは女の人で、溫泉場で知合ひになつて、山へ登つて下りて來た時、女が私の胸に映る月の光で、髮を直して行つた——その神經の細かさは實に細かであまり細かなので、交際へなくなつてしまひました。

英　ずゐぶんデリカなのね。私なんか男だつたら、いきなり抱きよせちやいますわ、先生は何もなさいませんでした？

西條　何も私しませんでしたよ、私は臆病なんですね。

英　ずゐぶん安全地帶なんですね。

西條　私は英さんのやうな情熱がほしい。岡田嘉子なんかも、英さんもその一人ですね　あゝ情熱がすきです、自分にないからでせうね。英さんが詩によつて生きて行かうとする情熱的の氣持ちはいつも尊敬してゐま

す。金にもならない詩集を出して、會を開いて、みんなに頭を下げて、その眞劍さは普通の人には出來ない尊い氣持ちです。

英　今までのお作の中で、心ゆくまでこの詩ならばとお思ひになつたのは？　勿論何れも粗略にはなさらない先生でいらつしやるけれど――

西條　えゝ、その時々によりますね。二十の時は二十の詩。三十の時は三十の詩を――「棕梠の葉」に書いた「頽唐」の詩なんかすきですね。（書架から華麗な西條八十詩集を示される）

英　あゝ、あの時代にお書きになりましたのね、先生はプロレタリアの詩についてどういふ御感想をお持ちでいらつしやいます？

西條　あゝいふ詩はつまり、あの人達の描いてゐる社會組織を來たさうといふ目的を持つた詩でせう。私は懷疑的な氣持を持つてゐるから今のコムミユニストの描いてゐる社會が來るといふ事についても疑問ですね今のプロレタリア詩は表面がアポリネルやラヂケや――立體派の詩で内容がプロレタリアの目的意識を盛つたものだが私はこの表現も平坦でなければならないと思ひますその時に難かしい理論を盛らうとするのは間違ひだと思ふ。十六世記のロンサールのやつた事から考へてみて社會主義のイデオロギイを露骨に盛つて成功したものはない

英　つまりその表現は平明でなければ……

西條　さうと思ひますね、例へば群集が燒打ちをする時のやうに、やれ〳〵といふ聲を出すものだと思ふ。慨念を露骨に出したのでは、その方の效果が薄い。感情に訴へて行かなければ――

英　私、先生の生活が大勢から見て非常にブルジョア的で、詩も少女に喜ばれる甘美なものを多くお作りになるので、心なき人が菓子製造業などと惡口をいふのも存じて居りますが、それは先生のほんの半面でございませう。私先生の爲めに非常に殘念に思ふのです。あのニコラエフスクの事件の詩なんか拜見しますと、實に愛國心が現はれ、それを美化され詩化されたものだと思ひます。あの事件をとり扱つたものは外にあれほどのものを覺えませんの、あんなのを默殺するのは殘念で御座いますわ、ほんとうに持つていらつしやる詩的情想なんか、知る人は知つてゐますが、知らない人はたゞブルジョア生活をしていらつしやるやうにとつてゐますのね。ほんの横顏だけ見て……

西條　僕の生活はブルジョア生活かなあ？

英　この間何かへお書きになつたのを拜見しますと、時代の惱みを、先生は美しく惱んでいらつしやるやうに思はれますが、――

西條　大體私が詩人である以上は、表現するものも詩でなければならない。詩の生命である韻律によつて思想なり感情なりを歌つて行きたい、「時代の嵐に惱むにも、美しく惱め」私はとり亂したくないですね。

英　それは詩人の言葉として有難い、いゝ事を伺ひました。詩人的立場から考へて心の用意が出來ていらつしやるわけですね。

西條　心の用意？……つまり完全にいへば、藝術でないものは書きたくない。私は物慾が多すぎる。私はもつと〳〵淸貧に甘んじて、勉強しなければならないと思ふ。

英　家庭婦人として、私などのやうに文筆にまつはつて行く事については？

西條　それはまあ、與謝野晶子さんのやうな立派な人もゐるのだから、容器が大きくなければ……私ならば文筆をとる人とは結婚しないですね。

英　では今日はもうこれでお役目御苦勞にして頂きませうか、ほんとうに色々はしたないことなんぞ伺ひまして……

# 誌上議壇

一、婦人の既成政黨並びに其黨人に對する態度の根本的討究…………（新妻いと子提出）
一、治警第五條改正問題…………（赤松明子提出）
一、同一勞働同一賃銀の問題…………（同　上）
一、婦人と「臺所の改善」について…………（菊池小夜子提出）

新妻伊都子　平林たい子
神近市子　長谷川時雨
金子しげり　生田花世
赤松明子　長谷川春子畫

**時雨**　今日は生憎日が悪くて、平塚、山川、山田わか、正田淑子、井手菊子、菊池小夜子の諸氏の御出席ないのが殘念です、來號には出て下さいます。軈て婦選案も通るでございませうし、それから辯護士改正法案も出て、いよ／＼女辯護士も許可されると云ふ時ですから、婦人議壇と云ふやうな頁を作つていたゞきたく願ひます。

**神近**　今日でしたか、全國婦人同盟から葉書が來まして、一大示威運動をやらう――そろ／＼政治季節になりますからね。それで物質的の援助をして貰ひたいと云ふことを……（新妻さんに向つて）來ませんでした？

**新妻**　いゝえ。

**神近**　ぢや私、金持ちに見られた譯ね。それで私仕方がないから、金が出來たら送りませうつて言つて置いたのです。返事をしなければ承諾したものと思つて、日限日に取りに來るつて言つて來たので……。赤松さんの方ではどんな風の計畫を有つていらつしやいますか？　それを發表して頂きたい。政治シーズンの實行運動はどんな事をなさいますか？

**赤松**　私達の方は共同委員會に入つて居るので、或る程度の牽制をうける譯です。今度民衆の大會に治安警察法第五條撤廢に關する件と云ふのを婦人部から提案する。それを來議會に、結社權、參政權と二ッ出して貰ふことになつて居ります。

**金子**　私の方もやつぱり赤松さんの仰しやる

やうに、共同委員會でやることになつて居りますから、それで掣肘をうける譯です。

神近　共同委員會はこの前のを繼續されて？

金子　さうです。この秋に今度の方針をいろ〱研究しまして、今議會に對する方針が確立したらしいから、共同委員會は矢張り存續するでせう。前議會の時は院内運動を主としてやつたんですが、今度は院外の方も大いに共同でやらう。さう云ふ場合は共同委員會は、總ての共同委員を組織してゐる各團體全部の賛成がなければ、共同委員會の名で以ては運動しない。一部分の賛成でなく、團體全部の名を連ねてやると云ふことに決めたのです。で、さしあたりの問題は、前の議會と、今度の議會と、婦選の問題からだけ見た相違は、政府案は公民權だけですけれども、政府案が出さうだと云ふ事だけの違ひなんです。ですからその違つた點に對してどうするかと云ふことを、ついこの間共同委員會で相談致しました。

神近　何回ぐらゐお集りになりました？

金子　この秋になつて三回か四回めでせう。毎月一回つつ臨時に集りますから。この間の時は、無産團體の方にも三つあるんですが、それ〴〵理由は少しづゝ違ひますけれども、政府に對して積極的に運動はしない。それに對しては、今まであつた方の婦人團體が出る、其の他からも出るやうにしたいと…云ふことで、結局既成婦人團體が、その方だけは聯合で政府案を出すやうに運動することになり、それから委員會の運動の方は一緒にやらう。請願デーをやらうと云ふことになつてゐるんです。街頭に立つて、さうして署名を澤山取らうと云ふことになつて居ります。政府案と云ふものは、今申上げましたやうに公民權だけですから、あとの婦選案と結社權の方は、矢張り前議會と大體同じやうに行かう、そのあとを政友會、民政黨或は無産議員團に出すと云ふやうに、各派からそれ〴〵、多少内容の相違はあるでせうけれども、出して貰はふ。いろ〱出る方が結局宜いからと云ふので…

神近　婦選獲得同盟として、請願はどこから出るんです？

金子　請願ではなく法律案です。法律案と云ふのは、代議士が出すから…各政黨の有志として出すと云ふやうな意味になるのでどこの婦人團體が出すと云ふ譯には行かないんです。請願の方はそれぞれ出す人から出す、それで各政黨の代議士中の有志から今云ふ參政權から結社の方はそれ〴〵出るだらうと思ひます。

神近　若しそれ〴〵の團體の圏内にない、大衆婦人がそれを補助するとすれば、どう云ふ風な形式で…

金子　實際運動をしてゐる人達の法律案が提出出來れば、法律案提出と云ふ方には、援助と云ふことはまア必要ない譯で、如何に大衆の婦人の意志が、さう云ふものの實現を望んでゐるかと云ふことを、輿論に起して一ッはつきりと社會にも、議會に對しても反映させる――と云ふ以外には大衆の…

神近　新妻さんの御提出の題目に移りませう既成政黨に就ての態度として、あなたのお考へをはつきりして置いて頂きたい――

新妻　私の考へ？　昨年からいろ〱あなたそれから平塚さん、山川さんだの書いていらつしやいましたから、是は餘程婦人參政權の運動者として考へなければならぬ問題だし、昨年それが唱へられても、解決した譯ではない、まだ運動方針を一定する事は出來ないでせうけれども、斯う云ふ方面に妥協して行かうとか、何とか云ふ處まで行つてゐなかつたと思ふんです。で別に私の意見と云つて此處に申上げる事もないので、




皆さんかいろいろお考になつた事を言つて下されば、そこに一ッヒントを受けやしないかと思つたものですから……

**神近**　結局去年は理想主義で、現實主義的でないと云ふことに歸着するんですね。このあなたの御提案を具體的に現すならば、既成政黨が婦選案を出した時に、無産側の政黨はそれに贊成して宜いか惡いかと云ふ事に歸着する——と云ふのぢやありませんか

**新妻**　さうです。今の議會を認める以上は…

**神近**　唯それに區別をつけて置かなければならない事は、婦選案が有産階級をパッスする時は、それに無産政黨の方で條件を付けて置く必要は、無産階級的でないと云ふ事を辯明する事になります。それをもつと現實に、自分逹の問題として、婦選獲得同盟で各個人々々で、既成政黨、無産黨を問はず援助すると云ふ事の效果ですね、それが私は現實問題ですから、その效果の如何に依つて決して宜いと思ひます。理想主義的に言へば、あの人達と緣切つた方が宜い…

**新妻**　それは私も贊成ですが、さうした事が果して出來得るや否やと云ふことを考へなければならない。例へば議會を認めて、今の多數の代議士に依つて贊成されなければ




遁らない——。それを我々は潔併的に、さう云ふ人達には頼まないと云ふことでなしに、良い問題ならば、さう云ふ人達を私達が又利用する……利用されながら、又利用する場合もあるのぢやないかと思ひます。

**神近**　實現すると云ふ過程から、それも必要だらうと思ひますね。

**新妻**　理想から言へば、無産代議士が多數あつて、出して行けば、勿論何にも云ふことはない、理想的ですけれども、今は不幸にして數が少い、その場合、參政權を早く得たいと云ふ場合に、それをどう云ふ風に利用するのか、所謂無産者として最も良いと云ふやうな方法を伺ひたいと思ひます。

**平林**　私、婦選案一般、つまり政友會の問題にしてゐる婦選案と、無産階級の問題にした婦選案と、その性質が非常に違ふと思ふんです。政友會の具體的の方針をよく知らないけれども。三十歳以上と云ふ風なことで……

**金子**　三十歳以上ぢやないでせう。今まで發表された所ではね。二十五歳、現行法の男の普選と同じ事になつて居ります。

**赤松**　行政審議會のは三十歳ぢやないですか？

金子　いゝえ、現行法と云ふことになつたのは、十月二十日頃の行政審議會で‥‥

平林　年齢の制限？　居住制限？

金子　それも男のと同じ‥‥

平林　二十五歳と三十歳とならば、二十五歳が宜いと思ふ。が併し居住制限で、無産者の多くの權利を‥‥この前の選擧の時でも分つてゐるけれども、非常に投票權を奪つてゐる。それで婦選案と云ふ風に云ひますと、それは婦人で政權を欲しがつてゐるから同じやうですけれども、結果から見ますと、ブルジョア政黨一般の支持です。自分自身を支持させる、さう云ふことに於ては、つまり無産階級に對抗する爲めなんです。そこで唯、婦選と云つても、無産階級は又ブルジョア政治と闘ふ爲に婦選運動をやるのであつて、唯婦人參政權を貰ふ爲にのみ、婦選運動をやるんぢやない。ですから唯、婦人に參政權をくれるからと云つて、婦人が唯喜んでうけても、それは婦人を解放すると云ふことにはならないでせうと思ふ。

新妻　私もさう思ひます。内容は違ふけれども參政權を得ると云ふことは同じになつて行くと思ふ。さうして例へば無産階級的な意味で以て貰つても、實際こつちに力が無くて、ブルジョア階級の人達に勢力があれば、自然さう云ふやうなブルジョアの方に、何かの機會に取られることは重々あると思ひます。さうしてみると、どつちにしても結果は同じではないかと思ふんです。

平林　併し結果は多分婦選案が通つたら、ブルジョア政黨を支持する婦人の方が多い‥

神近　それは多いです。唯かう云ふ現實方面があるんです。私もあなたの理想通り、今までそれで通して來たけれども、去年の普選で無産階級がどれだけ政治的に自覺したか――？　その點で今度婦人に與へられたら全く政治とか何とか云ふことを、ちつとも頭に置かなかつた婦人が、かなりの進度で飛躍的意識を遂げる。その點で私は理論としてはあなたの説に賛成ですが現實を無視した‥‥

平林　現實を無視してはゐないと思ひます。

神近　實際として現れる形を、公平に私が云ふと、無産階級の立場でもなく、ブルジョアでもない恰度中間を歩み寄つて妥協する形で通るだらうと思ひます。議會を通る時は‥‥

平林　結果は大抵豫想してゐます。婦選案が通つた時は必ずブルジョア政黨を支持する婦人の　が多い‥‥

神近　そこで赤松さん大いにやつて頂かうではありませぬか。

平林　それは多いと云ふことは、私考へてゐるが、唯無産階級的立場からの婦選運動は、婦選案を通すことばかりが目的ぢやない、階級闘爭です。現在の日本の情勢で、婦人がブルジョア政黨を多く支持する結果になつても、無産婦人は無産婦人獨自の要求をスローガンとして、どこまでもやつて行くのが闘爭だと思ひます。

時雨　選擧權を今度婦人が貰へば、男よりも割に投票に行くと思ひますか。

平林　赤松、神近、新妻(同時に)さアそれは分りません。さうは行かないと思ひますね。

時雨　でも、それを持つたら非常に喜ぶでせう分つてる人でも、分らない人でも喜ぶ人が多いと思ひますが――。

金子　さう云ふ觀方は長谷川さんばかりでなく、ほかにもさう云ふ事を云ふ人があります。女の人が一人前になつたと云ふ意識を持つただけでも‥‥

時雨　唯正しく投れるか投れないかは分らない。それは皆さんがよく敎へる餘地が、大變ある所ぢやないかと思ひます。その人達

にちやんとした意識を持たせる事が、皆さんの使命ぢやないかと思ひます。

**新妻**　婦選獲得同盟のやうな會が、それに一生懸命仕事をして、一日も速く獲りたいと云ふことには賛成なんですが……

**神近**　その批判を加へるならば、實行運動に移つて行くのが……

**新妻**　所謂ブルヂョア意識と、無産階級意識の差だと思ふ、獲ると云ふことには同じことになるんですね。

**平林**　質の違ひですね。あらゆる制限が有るのと無いのと……

**金子**　つまり私の方の團體でさう云ふことを……赤松さんのしていらつしやる團體の意見としては、無産政黨に依つて提案されて、婦選が實施されるまでは、それが通るまでは、既成政黨から出して貰ふのは不賛成だと云ふ風な意見を聞いたことがあります。現實の問題としては、何年待つても無産政黨の手で通して貰はなければ……

**神近**　多數の婦人を無産階級的にすると云ふことから考へて、その點からは赤松さんのお説に賛成です。非常に現實的に考へやうとしはじめた時……

**赤松**　つまり政友會から出すその時に、無産政黨としては、やつぱりその修正意見なら修正意見を出して、之を無産階級的に立場をはつきりさして置いて、さうしてその既成政黨から出たのに、積極的に賛成しないで、それを絶對に反對すると云ふ立場をとつた所が仕方がない。いくら不賛成だと云つても通してしまふから、その時に無産階級婦人が、投票を間違ひなく行使する爲に、ふだんから教育運動に主力を注ぐと云ふことが、私達の當面の問題だと、さう云ふ風に考へてゐるんです。政友會から出るのは、積極的に反對すると云ふのでなくて、積極的に應援しないと云ふだけです。無産政黨からは、無産階級的な婦人参政權を出して、無産政黨の婦人としての態度をはつきりとして置く必要があると思ひます今の處は教育運動に主力を注いだ方が効果が多いと思ふ私の意見です。

**時雨**　此の運動は何れ通りませうが、通つた時に、資本家や何かが、分らない女の方が多いと、それを利用しやしないでせうか。

**新妻**　それは傀儡に使はれますよ。

**神近**　資本家が、それが見極めがついたから、はじめて通すのですよ。

**時雨**　そこが一番むづかしい所ですね。

**新妻**　ですからつまり……無産階級の方から云へば、傀儡に使はれては困るが、そこの處を利用して獲らなければとれない。

**金子**　現實の問題としては、どれだけ現在の婦人大衆が、現實の問題として、既成政黨で通して貰つたから既成政黨に行くか、その點はどの程度まで見極められて居るか、私には分らないんです。

**平林**　さう云ふ問題がありますから、政友會でも民政黨でも、通してくれる政黨なら何でも宜いと云ふことは、言へないと思ひます。餘計無産政黨でなければならないと云ふことになるんです。

**新妻**　それが去年大分問題になつたので、所謂既成政黨の個人を支持するか、或は又婦人参政權を提案して居る所の政黨を支持するかと云ふ事が、大分問題になつたんです。

**赤松**　無産政黨で通さうと云ふのは徹底婦選で、民衆黨では三十歳以上と云ふことになつて居り、工場勞働者は二十五歳とか三十歳とか云はれてゐますが、さうすると工場の中では選擧權の無い人が多い譯で、年の若い人が多いので、選擧權を持たない人の方が……

**時雨**　五十歳以上の人間よりも、十八歳の人

の方がよく分るのに――。

**神近**　一番若いのは勞農黨の十八歳‥‥

**平林**　十八歳はロシアだけです。

**時雨**　女學校に入ればもういゝ譯ですね、十八歳の人に分らない事は、五十歳の人には尙ほ分らない――

**神近**　實際には政治なんて極く簡單なものなんですね、十八歳で十分分ります。是は一緒に治警第五條改正問題に一寸觸れましたから、今度は次の同一賃銀の問題、それに移りませう。理論としては、同一勞働に對する同一賃銀と云ふことは、言つたゞけで分つてしまつてゐますから、現在赤松さんの實際に携はつていらつしやる狀態を伺ひませう。

**生田**　私なんか本當に何も知らないんですから、聞かして頂きたい――

**神近**　小ブルジョア婦人、職業婦人は現在では稍々同一勞働に對する同一賃銀を貰つてゐる。原稿料とかさう云ふものでは‥‥

**金子**　原稿料では同一だけれど、例へば女敎員‥‥數の多い者から云へば小學校の敎員その敎員の初任給と云ふものは、男のそれと比べて大變違ふ。

**時雨**　私の知つてゐるある社長から每度聞く事なんですが、婦人の勞働は駄目だと云ふんです。一種の道樂には宜いでせうが、どうも婦人を使ふと、夜遲くなれば歸さなければならなかつたり、送つて行かなくちやならない。私、何も送らなくたつて宜いぢやありませんかつて云ひたいけど、婦人を使つてゐる人自身が仰しやるから、その點に就て、さうぢやありませんて言ふことが出來ないんです。女は感情に走るからやりにくい、もう一息やりたい事も、婦人が入つてる爲にある時間で止さなければいけないなんて、いろ〳〵仰しやるんで‥‥

**金子**　その問題は同一勞働に對する同一賃銀が、根本問題になつて來るだらうと思ひます。若も同等の賃銀を與へてゐるとしますね。その場合には男と同じだけの働きを要求なさい。それならば夜も送らないでも宜いでせう　どんなに夜遲くなつても宜いし、朝も家庭があるからと云つて、遲く出て來ることをお許しにならなければ宜いと思ひます。それで態度は徹底する筈だと思ふんです。さう云ふ風にして女の人を使つてみた上で、體力の相違から女は駄目と云ふやうな結果が今日の婦人として現はれて來るのは當然だと思ふけれども、世の中には同じ雇主にしても、女と男と云ふものを、本質的に區別をたてゝ置いて御覽になる方があります。この問題は、丁度今開かれて居りますが、每年小學校女敎員の大會、その大會の時の議題を見ると、自分達の地位や權利を擁護して行かうと云ふやうな議題とそれから如何にすれば今の小學校の女敎員として、好い敎員になられるかと云ふ、二ッの案が必ずあるんです。是は數年前に非常に沸騰した問題ですが、女敎員の部分勤務の可否と云ふことがありました。女は或時は奧さんになり、或時はお母さんになり、さうして又或時は純粹の先生となつて勤めて居られる。その時この境遇の變化に依つて、勤務狀態を部分的に改めて行かうと云ふ考へ方――一口に言へば、部分勤務と云ふものは、所謂母性に從つて編みだしたものでせう。それに對していつでも男敎員と同じだけ働いて、同一賃銀を得やうとする所謂男女同權的な考へ方、この二ッがいつも大會の問題に出るのです。で、さう云ふ場合、家庭を持つて子供の有る女敎員達は、部分勤務を支持します。さうなれば、自分達は、本當に母である事の方が先であつて、それから第二の國民の指導者であるから、

指導者であることはその次に來る問題で、母としての本當の資格を得る爲に、部分勤務にして貰ひたいと云ふことを主張しますし、比較的若い女教員達は、やつと男教員と肩を並べる所まで來かゝつてゐるのに、初任給なんか隨分差をつけられてゐるんだから、その上にさう云ふハンデイキヤップを持出せば、尙ほ男の方に地位を奪はれる事になるぢやないか――今はそんな時機ぢやないと云ふので、大變議論が沸騰します。

**神近**　片つ方は現在以上の位地に昇らうと云ふ、片つ方は家庭的にもつと進まうとする運動ですね。

**新妻**　同一賃銀と云ふ問題に就て考へることは、今の職業婦人は、金子さんのお話になつたやうな家庭持ちは少い、所謂お孃さんがお嫁に行くまで稼がうと云ふやうな人が多いですから、非常に地位を壞すんです。三十五圓で地位を保つて行かうとする者より、三十圓でも宜いからと云つて、入つて來る者が多くなると、同じ使ふならば安い方をと云ふのがブルジョア心理ですから、どうしても三十圓を採る、私は二十五圓で以て勤めると云ふやうなことで、自然に賃銀が下ると思ひます。勤めたならば己は職業婦人になるんだ。と云ふ意識があれば壞しはしないがどうも、それが無いのです。だから同一賃銀を求めるならば、勤める人がさう云ふ意識を持つて行かなければならないのぢやないかと思ひます。

**神近**　それは婦人の組織が出來てゐない處では非常に困難でせう。職業に就く前に、どうして自分達が生活の爲にこんなに稼がなければならなくなつたのか、どうして賃銀が安いのかと云ふことをはつきりと意識すれば文句は無いけれども、――そこへ行くと無產階級的の人にはさう云ふ意識があるですね。

**新妻**　それは有るです。所謂職業婦人と云ふのが一番困るんです。

**神近**　最近には非常に少くなりはしないでせうか、一時的、腰掛的な職業婦人と云ふのが……

**赤松**　平林、少くはなりましたね。

**神近**　私達の階級はどつちかと云へば職業婦人ぢやない。工場勞働者に入るですね。丁度中產階級の上と、中產階級の下と云ふところ――

**平林**　工場の女工さん達は、政治的の要求なんて云ふ事に對しては、割合に氣をつけないのですね。併し同一勞働同一賃銀に對する問題なんかになると、非常によく贊成して、さう云ふ事の爲めには宜く鬪ひますね。

**金子**　此の問題は男の人達に、割合最近まで本當に分らなくてゐたですね。そこに女の人達は特殊的な地位があつて損をします。

**時雨**　同一賃銀の事で一生懸命になれば、しまひには婦選なり、政治的の事にも熱心になつて來る譯ですね。みんな一ツの步みですからね。

**金子**　小學校女教員の二ツの流れの中の一ツの方と云ふのは、餘程皆さん方が興味を持つて下さる問題ぢやないかと思ひます。同一勞働に對する同一賃銀と云ふことは、是は分り過ぎた當然なことですけれども、つまり女の人を母性として扱つて行くと云ふ形の上では似てゐて意味はまるで違ふ、その二つが非常に混同され易いので、無自覺なと云ふか、階級意識を持たないうちは、女は母性として生きるのが幸福な、當然な生き方と云ふやうな、自己味嘆的な氣持と云ふか、同一勞働に對する同一賃銀に反對しても、母性の立場の方を守らうと云ふ問題が出て來るでせう。現實の問題として……さうしてもう一つは、本當はどう思ひます

か、割合にさう云ふ無産階級的な考へ方から見て、勿論當然のことですけれども、唯言葉が的るかどうか女權主義的な考へ方からも、さう云ふやうな態度に出てる運動なり何なり支持なさいますか？

平林　同一勞働に對する同一賃銀は勿論支持します。女が姙娠したり、子を生んだりする事の爲に、休むのは當り前の事で、その爲に休んで特に男性より賃銀が安いと云ふ譯はないと思ひます。同一勞働に對する同一賃銀と、母性保護的制度と云ふものと、兩方要求しなければならぬと思ひます。

金子　さうでせう、今のやうな場合には兩方要求して宜いと思ひますね。所が實際問題として困つていらつしやる方があるので伺つて居るんですが、兩方を要求すると云ふことは、既婚者である女敎員が、どつちへ贊成して宜いかまごつく――。

時雨　同一賃銀の方に贊成して置いて、特殊の人の問題を拵へてはいけないんですか？

赤松　それでいいと思ひます。同一の仕事に對しては同一の賃銀を拂つてさう云ふ婦人に對しては、特殊の制度を拵へて差支へないでせう。

金子　理論では宜いが、現實の問題として、小學校の先生にはかなり既婚者が多いんです。中等學校の敎員よりも、小學校の先生の方が無産階級だと云ふことがはつきり分ります。そこへ部分勤務と云ふことが許されるともつと、本當に働きたいと思ふ女敎員でも・・・・

神近　さうなつて來ると、産兒調節の問題が起つて來るのでせう！　人間がかなり意識的な生活を始めてゐる處に母性に對する重大な事だけ、自然的に放任されてゐると思ふんです。それをロシアの人達は、餘程意識的に行つて居る。例へば自分の個人的活動を阻められる虞れがないと云ふので、學生中に子供を生んでしまふと云ふことがあつた。學生時代に子供を生んで、育てゝしまつて、學校を出たらば自由に社會的に活動をしたいと云ふのです。

金子　産兒制限の問題になれば、勿論贊成するけど・・・・

時雨　殊更にさう云ふ職に就かうと云ふ覺悟をした人がね。

金子　東京から割合に近い縣の話ですが、産前産後の休養が最近制定されたでせう？　それで女の先生は損だ、使ひにくい、煩雜だと云ふので、女の先生を減らして行かうと云ふ方針で實行してゐる人もあります。

神近　資本主義の社會では仕方がないですねさうなつて來ると婦人の失業と云ふことが考へられる。

金子　看護婦、タイピスト、女工と云ふやうな、女性でなければ出來ない技術、或は女性の方に適してゐると云ふ職業は、その點が餘程違ひますが、小學校の先生は女性の方が宜いと云ふやうに、確立してゐないから、男性に取つて代られると云ふ當面の問題にブツかる。

新妻　鑛山の深夜業だの、婦人の入坑なんぞもそれと同じ所に行くと思ふのですよ。理論としては禁止しなければならないけれども、當面の人間になると生活に困つて來るですから・・・・

神近　一部分だけ解決しやうとすると非常に困難です。一般論から考へて來なければ・・

平林　失業問題は別に考へるとして、それはそれで通さなければいけない――

時雨　女敎員が休む場合、雇つてゐる校長の方から云へばさうですが、さうでない時は、失業者の方からみて救つて宜い譯ですね。失業の問題から見て、その期間を救つて上げても宜い。他の女性達が・・・・

**神近**　さう云ふ事は姑息です。

**金子**　新妻、それは、救つてることは限りがないと思ふ。

**時雨**　體でなくても、その間の生活の補助が出來ると云ふやうな組合は、出來ないものでせうか。

**神近**　進んだ外國では、保險があり法律があつて、その期間、つまり最長産前四週間、産後四週間休養が取れる。その間前同様の手當をうけて、子供の手當まで受けてゐます。進んだ國家ではさう云ふやうに出來てゐますが、日本のやうに後れた國では……赤松さん、この問題で、あなたの方ではどう云ふ風な具體案を持つていらつしやいますか？　組合の中では、この問題をどう云ふ風に……

**赤松**　重要な問題だし、又最近にもだん〳〵盛んになつて來てゐる運動なんで、氣が付いて書いたので、別にそんなに……

**神近**　例へばストライキの利用に擧げられたと云ふことがありましたね。最近の問題でゝすよ。女工のストライキの……

**赤松**　今年の大會に同一勞働に對する同一賃銀の問題が出て、それが可決された――

**金子**　今まで可決されてゐないと云ふ點に、興味を持つてゐたんです。

**赤松**　婦人自身の問題として、婦人勞働が本當に自覺して來たと云ふ、他の團體はどうか知りませぬが、最近の著しい現象だと思ひます。婦人自身の立場から出したと云ふことが、私達非常に重要な事と考へて居ります。

**新妻**　是は組合がもつと發達して來れば、組合でも出來る問題でございますね。

**神近**　では此の問題を打切りまして、菊池さんが、婦人の臺所の問題に就て提案していらつしやいます。之をとり上げますか。

### 菊池小夜子さんの提案

――婦人と「臺所の改善」について――

プルジョア雜誌でよく「臺所の改善」とか「生活の改善は臺所から」と申して、臺所改善號などを出します。また、封建的婦人觀からは、臺所は婦人の生活のすべての如く思はれ、また今日でもプルジョア的敎育と、宣傳とにわづらはされて、臺所、もしくは家庭經濟の改善によつて、あだかも生活が改善されたり、この苦しい生活苦から解放されるかの如くいはれて居ります。

しかし、臺所の改善といひ、消費經濟の改善と申せ、すべてこれは改善の餘地あり、節約の餘裕あるプルジョアの家庭にのみ申されうることで、私はむしろ臺所からの婦人の解放、いな臺所そのものゝ徹底的な改造なくては、婦人の地位の改善はないと信じます――卽ち、臺所に終日生活をことゝすることを餘儀なくされてゐる様な社會を根本的に改造することでありませう。だから婦人はこの不愉快な家庭の臺所から解放されるために、模範的な設備ある食堂、飮食所、洗濯所、育兒院等々、をつくらねばならぬでせう。しかしプルジョア社會にこれを期待することは決して出來ません。それはこのプルジョア社會を變革し、婦人と勞働者――働くものに正當な權利と幸福を與へる社會をつくることによつてのみ可能なことでせう。

**新妻**　實際問題として、ほんとの無産階級の人は解放されて居るでせうね。

**神近**　簡易な食堂などが出來てね。

**新妻**　あの地形搗の女の人が家へ歸つてお菜を作るか何うか、又歸る途中で目刺を買つて行つて燒くとか、煮豆を買つて行つて食べるとか大して煩雜なことではない。また亭主もやりますよ、あゝ云ふ人達は。

神近　食事だけではない、洗濯もしなければならず、繕ひもしなければならない。

赤松　大衆はまだ解放されて居ないと思ひます、よく意識した人でも本當に奥さんを解放しては居ませんね。

新妻　それは山川さんのあれ程言つていらつしやる家庭でも、何うしても御客樣でもいらつしやると餘計な事もしなければならないわと仰つしやいますよ。神近さんでもさうでせう。（笑聲）

金子　何しろ此の方は（神近さん）臺所事業主義なんですから……

神近　それに子供がありますと何うしても男よりは女がね……。共同臺所、共同洗濯皆贊成ですが、唯私が何時も考へるのは、日本の此の私共の社會で、其の基本的な形でも宜いから何う云ふやうに之を始めるかと云ふことです。消費組合と云ふやうなものは、工場勞働者のある處でなければ實際には成立しないですから、可能性はあると思ふですが、私達みたいに分散して住居して居る者の地域的組織を何う云ふ風にするか其れを考へるですが、其事に就て誰か考があつたらどうぞ……

平林　赤松さんの處にも消費組合があるでせう？　私達の處にもありますが、勿論小さい團結ですから、旨く行つて居ませぬけれども兎に角洗濯をやつて貰つたり縫物をして貰つたり、經濟的には違ひはしませぬが、ほんの初歩的のものだけ出來て居るのです。

神近　それは好いですね、出來てゐるですか。

平林　消費組合家庭會と云ふので出來て居ます、家庭消費組合聯盟には私共西郊共同社と云ふですが。

新妻　消費組合でも御洗濯や縫物が出來ればいゝですね、日用品の販賣と云ふことになると、消費組合で小資本でやつて居るものと、大資本でやつて居る市の市場と云ふものと、どつちが安くなるかと云ふことになると、消費組合が何處まで發達出來るかと云ふ杞憂があります。

金子　さうなると、消費組合運動を助ける場合に、何う云ふ風にしたら宜いだらうと云ふ問題に打つかるですが、一般に奥さんお内儀さんに「消費組合にお這入りなさい、斯う云ふ好い事がありますから」と言ふだけの事實がないとね。

新妻　それからもう一つは、今のお洗濯とか縫物と云ふのも、やはり勞働に對して相當拂はなければならないことになると、勿論縫ふ方にも謝禮しなければならぬ。勞働賃銀を拂はなければならないと云ふと、可成りの費用になると思ふ。

神近　さうなると、組織してみたところで、小ブルジョアは左樣な理由から消費組合に加入する可能性は少いでせう、一定の收入を得て、其中から少くても分に應じた洗濯費でも炊事費でも出すことの出來る階級だと思ふ。

金子　出すことの出來る機關が備はらなければならぬと思ふ。

神近　こゝはプロレタリア階級の生活を非常に強力なものにして、プロレタリアの進出に依つて他の社會全體が救はれなければならない、今は小ブルジョア、ルンペンは問題の外に出す、……も少し進んで無産階級的意識が旺盛になれば、少々の利害は棄てゝ、大衆的利益に合流するのが理想です。

新妻　今の職業婦人が三十圓位しか取つて居ないとすれば勿論プロレタリヤですから、其人達の生活も、晝間長い時間勤めて非常に苦しい生活をして居ながら、縫物などは外に出せば宜いが、やはり女で針を持てるが故に、夜一生懸命に縫ふと云ふことは、

やはり拂へないからではないでせうか。

平林　それはさうです。

新妻　それは本當に針持てる悲哀だと思ふ。つひ五十錢でも一圓でも出すのが苦しいから縮つてしまふ。理論としては改めなければならぬと思つても。

神近　小ブルジョア階級で、生活に餘裕があつて、他の慈善團體に反感を持つやうな階級が、も少し意識が進展して行つた時には、小ブルジョアがプロレタリア階級を助けると云ふ一つの形になりはしないでせうか、理想論ですが……

新妻　さうする爲に、プチブルを輕蔑しないで、引付けるやうにしなければならないではないでせうか、ところがプチブルは又あゝ言ふからと言ふので逃げやしないでせうか。

神近　それが本當の人はさう言はれることは當然だと思ふでせう。

新妻　ところが、神近さんはさうお思ひでせうが、極左の連中の人達になりますと、プチブルと云ふことを言はれることは迚も輕蔑されたやうに考へる。

神近　さう云ふ時代はもう過ぎ去りはしないでせうか。

金子　私も其れは過去つて居ると思ふ。

神近　其の自覺なプチブル階級に與へたと云ふことで、意識の轉換に關する目的の大部分は果せて居るではないですか。

新妻　それはまだ〳〵……私達例へば寄附を募りに行く時「何だプチブルが」と言ふ、聞いた人が又それを告げる、さうすると出さなくなる。さう云ふ時に何もさう輕蔑しないで貰ふものなら貰つた方が……

神近　貰ひに行く人は癪に觸ると云ふが、プチブルと言はれる位、私でも言ふかも知れん。

平林　皆んなプチブルでせう、此處にプロレタリアは居ないやうですが……

（多勢發言　笑聲）

金子　記錄に殘して下さい、皆んなプチブルだつて云ふことを……

神近　腹を立てると云ふ人と腹を立てないと云ふ人のある事も記錄に殘さなければ……

新妻　では私は腹を立つことにして置きます

時雨　プチブルとかプロレタリアと云つて、區別はつけるが、プチブルが當り前ではないんですか、皆其處迄行くのが……、生活程度がそれより低くなる事を望む譯ぢやない、皆高くなる事を望む、プチブルなんてものはそんなに大したものではない……

新妻　意識だけですよ。

金子　今の世の中で使ふ言葉の中には、正しい定義で以て解釋せずに、ひよこ〳〵使ふのがありますから……

時雨　あのハイカラと云ふ言葉を、當てつけに用ひたと同じですね。

神近　他に何か問題があれば……

時雨　今辯護士法案も出ることであつて、其處にあります（話題として提出されて）けれどもこんな問題に就てですね、陪審法があつても、男ばかりの處で女が立つて何處まで話せるか、だから辯護士よりも先づ陪審員の方に女を入れるが宜かないかと思ふのですが。

新妻　それは結局婦選案がパスすれば……、あれは公民權に入るですか、陪審員の被推薦權……

神近　それは婦人參政權と前後して與へらるべき權利の中に含まれて居るですね。

金子　一體どんな辯護士が出ると思ふかと私聞かれましたが、恐らく女でも隨分金の取れる商賣だと思つて出る人があると思ふ。

神近　花井さんの娘さんが其の支度をして居ると云ふことですね、鳩山一郎さんのお孃

さんですか、辯護士にならなりたいと言つて居られる・・・

時雨　北村兼子さんもやはりそれで京都の學校を出て居られる、開地さんと云ふ人が矢張り・・・・

新妻　一つ金子さんに伺ひたいのは、家庭裁判所と云ふのがありますね、あれは何う云ふ風になつて居るでせう。

金子　別に專門的に研究して居りませぬが、是は度々日本の法律家でも論及されて居る問題で、今迄に相當政府なんかでも、近く實現しようではないかと云ふやうな聲も聞いて居ります。

時雨　今民事の方でも家庭裁判は無いのですか。

金子　二三年前から度々そんな風に傳へられて居るんですが、それはございませぬ、此の前「文藝春秋」の座談會で穗積重遠さんを取卷いて話された、少額裁判所と云ふもの――小さい民事訴訟など五十錢なら五十錢納めれば檢事が裁いてくれる、民衆的のあゝ云ふものが必要だと云つてゐるんですが、家庭裁判所と云ふものも或意味で其れに似通つたもので、慰藉料の請求とか云ふことでも、大きい事になつて訴訟と云ふ途が女の人などに立てないから、そこで必要になると思ふ。

時雨　方面委員と云ふものが出來たでせう・・・あれで可笑しな例があるんです、或人が非常に借財して、爭が始終あるので方面委員の手に渡つた、さうすると誰か友達の名を言へと云ふことで、私共さほど深い間柄ではなかつたが、名前を言はれて、私共が友達ならいゝと云ふので、方面委員の手から此方に廻つて來た、さうして嫌やでも手形に裏書しなければならないことになつて拂ふ可能性が無いからこそ長年ごた〳〵して居たのだから、今度は私共の方を相手取つて直ぐ差押が來る。それを拂つたんですが、是は可成り迷惑ですね、唯拂はせれば宜いと云ふ頭からやられるんだと。それと同じで、家庭裁判のやうなものも頭の固い人や損得の利害一點張りでやられると、隨分可愛さうな人が出る。さう云ふ時には何うなるでせう。

新妻　さうなると審判委員ですが、さう云ふものも必要になつて來ますね。

時雨　唯家庭裁判だけでやられると泣寢入になるやうな事になつて、却つて有つて困る事はないでせうか、さう云ふ時は何う云ふ風に・・・

金子　家庭裁判の時は、陪審員で、皆兎に角收まりがつくやうな組織があります、はつきり申上げられませぬが、可成り審判所なんて名前はやかましいですが、そんなに裁判的のものではないやうです。

時雨　もつと示談的にする方が主で・・・・

金子　さうです、女の人が審判員にもなつて、相當の年配で世の中の事を知つて居る人が大抵圓く收まりがつけられるやうです。

新妻　それならば早速相當の人で社團法人か何かで以て、民間でする事が出來るでせう。

金子　民間では人事相談所と云ふものがあります、そんな程度のものでせうが、民間のものでは何だか權威がないやうに思へる、審判所なんと云ふから少しは違ふでせうが普通の相談所など幾らも調停的にやつて居る事實はあるでせう。

新妻　併しそれは小さいものでせう、もつと大きい聲を擧げれば、民間でも相當大きいものが出來るではないでせうか、日本では民間の仕事で大きいものはありませぬね、外國などでは隨分ありますがね。

金子　警視廳の人事相談所など隨分女の人に利用されてゐるらしいが、・・・女が審所か

ら解放されたら、さう云ふやうな愚痴も訴訟もないかも知れませぬが、其處迄行く迄に色々の現實問題としては、駈込んで助けを求める——昔の鎌倉の尼寺みたいなものが女の人に必要で、民間でもやらうと思つて居る、やるならお金を出すと云ふことを言つて居るのも聞いたことがあるが‥‥

神近　これで今日集つて居た議案も大體一通り盡しましたから、最後にほんとの雜談として、近い將來に婦人政黨と云ふものが出來るだらうと思ふが、其の場合の事を皆で想像して、噂話をして會を閉ぢようではありませぬか。

金子　神近さん出來るだらうと思ふですか。

神近　出來やしないかと思ふ。勿論無產階級の運動に加はつて居る婦人達は無產政黨に吸收されるだらうと思ふ。併し有產階級の中で一つ位出來るだらうと思ふ、何うです。

新妻　私も當然出來るだらうと思ふ。善惡可否は別ですが、出來ることは出來るだらうと思ふ。

神近　此處でお名前は言へないが、其時のリーダーと云ふやうな意識を以て着々と準備をして居ると云ふやうな人がありさうなことも聞いたことがある。だから其れはきつと出來ると思ふ。例へば吉岡彌生さんとか、右傾の方のブルジョア階級の婦人達で自由思想家の一團がやはり其處に入りはしないかと思ふ。

斯う云ふ事が考へられる、金が目當で婦人政黨が出來ると云ふやうな事は、それは決して無いと思ふが、極く無意識に金とか利便とかの手段として出來ると思ふ。

金子　さう云ふ事は無いとは言へませぬね。

平林　無產政黨には嫌や、既成政黨に這入つては惡いから新に作ると云ふ人があるです

神近　自由主義者の右に寄つた人、自由主義者の左の人は、社民あたりに入らないが‥

赤松　私共無產階級の人には割合少いですが幹部意識と云ふか、あの人がやつて居るから自分が入つて居るのは嫌やとか、さう云ふことで、新にやると云ふ人があるではないかと思ふ。

時雨　さう云ふことで出來るでせうね。

神近　それは無意識ですがさうなりませうよ、例へば「貴方の御贊同を得なければ」と、其時の內閣なら內閣からやられると惡い氣持はしない、誰だつていゝ氣持ですからね。

新妻　それは有るでせうね。代議士になりたいと云ふやうな人は少數なものでせう。

赤松　婦人政黨を作つて三人位代議士を出すとキヤスチングボートになつて、と云ふことを言つて居る人もある。

金子　さうなつて來ると、婦人政黨も澤山出來て來ますね。

金子　婦人參政權運動の過去に於て、一人一黨主義で人の拵へた會は嫌やだから一人で一つの會を背負つて立つて行かうとしたのと同じですね。

神近　暴徒なら暴徒で叩き潰す目當てもあるが、其處が一番仕末が惡いと云ひますね。

金子　婦人有權者聯盟などの動き方は、何の政黨を支持するでせう。

神近　それは昨年の婦人同盟の態度でせう、大體に於て其の線上にあるではないですか私達はやはりさう思ふ。

時雨　大政黨が出來ませうか。

新妻　大政黨にはなりますまい、既成政黨と
金子　無產政黨とに取られてしまつた殘り
神近　が‥‥

時雨　質の上で大政黨と云ふのでない、數の上で‥‥

新妻 神近　出來ないと思ひます。數の上で‥‥

新妻　ほんの知識階級の自由意識を持つた者

が集まるに違ひないと思ふ。やはり運動の仕方で可成數は集まりませうけれど……

神近　可成り婦人達でも無産階級的になりましたから、さうすればリーダー格の人——つまり赤松さんのやうな人が努力なされば可成り其數を喰止めることが出來ませう。

時雨　で其の婦人の政黨が、お金で動くでせうか、感情で動くでせうか。

神近　金ですよ、さうなると今迄よりもつと

平林　金、金と云ふやうになりますよ。

時雨　女の人は感情で動かされやしないかと思ひますがね。

神近　感情より金が強いと思ふ。最初は感情かも知れぬ、併し實際問題となると、金でなければ、自分も動かされないし、人も動かすことは出來ないでせう。

時雨　女の政黨と男の政黨とは、何方がなにし易いでせう。

新妻　女の方が仕末が惡いかも知れぬのね、ですから其處に吾々の使命がある譯です。

神近　若しさうなつて來れば、金子さんなり市川さんなり、婦人問題研究の方は皆資格がある、政治的訓練を經ていらつしやるですが、さうすれば社民黨に行きますか。

新妻　皆別々です、皆違つた思想を持つた者が……併し私共何方しても無産政黨ですよ

時雨　無産政黨の側では何の側にいらつしやる？

新妻　今の狀態では、或意味に於て準備會に賛成です、大衆的に今の時代で向いて行かなければならぬと云へば無論大衆黨に賛成します、今のところ直ぐ這入るかと云へば、もう少し研究して這入りたいと思ふ。

平林　どうせ合同するでせうから。

新妻　それは無産政黨二つ位になりませう、一つにはなりますまい。

神近　赤松さんの方で若し婦人候補者を出すと云ふことになると、相當數が揃つていらつしやるですか。

赤松　代議士ですか。

神近　え〵、婦人代議士が出る時、敎育を受けた方があるですか。

赤松　選擧權を貰つて被選擧權があれば、女を立てなければならぬ。

新妻　それは出ますよ。

神近　現實問題と理想問題とが其處にこんがらかりますよ。

赤松　女の代議士を立て〵女の代議士でやつて行つたがよいと思ふ。

（多勢發言）

時雨　女の代議士が出たとすれば——よく議場で喧嘩や毆り合をする、あの喧しい連中が靜粛に女の云ふ事を聽いて居るでせうか

新妻　どうでせうね。

赤松　政黨々々に依つて邪魔するでせうね。

金子　どの政黨に入るか考へるのに骨が折れますね。今のやうに既成政黨があると、何の政黨に入るか隨分苦勞が要ります、早く合同するとい〵。

平林　其性質がもつとはつきりして來ると、何れが無産階級を代表して居るか分るが‥

生田　どれかに入りたいと思へば、出來るなら間違ひたくないと思ふから、隨分考へなければ……

新妻　無産政黨の婦人の方達は大いに努力して宣傳しなければならない。

生田　私位の程度が婦人に多いではないですか、間違ひたくないから一生懸命に耳をすまして居るんです。（多勢發言）

擔當速記者佃事務所員
大野優子
佐藤秀子



# 社會時評

大木耳子

## 一、日支交渉の決裂

矢田上海總領事の南京訪問によつて、一時は正式交渉とまでこぎつけたと思はれた日支間の交渉が、また濟南事件にからむ撤兵期の明示で行詰つて、この問題は又一時的に打ち切りの有樣となつた。

新聞は、支那側の强硬態度を國民政府の對內事情によるものであるとしてゐるやうである。卽ち國民政府の右翼派が、全體會議を前にして大衆の意向を無視して日本との協定をはかることの自黨に危險なことを看取して、日本に對して强硬な態度を持して自派の利益となるやう內政の局面を展開しやうといふ報道である。

これは、ある部分信ずべき點もないことはないと思ふ。國民黨に左翼と右翼とがあることも事實であるし、この二派が常に鬪爭してゐることも事實であらう。しかし國民政府側のさうした支障のみを數へて、この交渉の根本にひそむもつと大きな支障が實に日本側にあることを見落すことは出來ないと思ふ。

後れて資本主義制度を受け入れた國家であり、統一ある國家としての實力を最近まで備へることが出來なかつた支那は、先進各國の帝國主義的侵略の餌食となつて、久しくその重い桎梏の下に苦しんで來たのであつた。が今日國民政府の下に統一の事業略々成り、民族としての自覺の上に在つて周圍を見わたした時に、國民の眼に先づ映じたものは、自國がいかに世界の凡ゆる帝國主義の蹂躪するところとなつてゐるかといふことであつた。

昨年は長江筋に於ける英米、特に英國の帝國主義に對する反抗が著しかつた。今年は國民軍の北京進出と相俟つて東三省の獨立問題となり、遂に日本が出兵を斷行するに到つた爲め、支那民衆の日本の帝國主義に對する反感は甚大なものとなつた。

支那の要人が外國の雜誌に發表したものによつて見れば、日本政府は多くの御用記者と御用辯士とを買收し、英米各國に於いて滿洲を殆んど一個獨立した國家であるが如くに宣傳し、莫大の費用を投

じて南滿洲鐵道會社の存在を明らかにし、それをもつて日本の滿洲に於ける權利の保有を止むを得ざるものとして認めさせるべく努力してゐるといふことである。

日本全國に數倍する肥沃の曠野は、日本の帝國主義者の流涎措かないところのものであらう。しかしそれを領有するといふこと〻、日本の無產階級の利益とは、何等の相關々係はないものである。寧ろ日本の帝國主義の毒爪があるが爲めに、日本の無產者階級の亞細亞大陸への進出がどんなに拒まれてゐることであらう。私共はこのヘッキリとした事實をよく頭に入れ、かの帝國主義者が稱へる對支强硬論を、眉に唾きして聞くべきである。

## 二、脅かされる者は誰れか

御大禮がすんで世間の奉祝氣分が薄れると、歲暮の巷は遽かに强竊盜の跳梁によつて平靜を亂された。每日强盜の記事が、新聞紙面を賑はした。

昭和三年十月十六日の『朝日新聞』は、强盜に關する驚くべき統計を報じてゐる。この統計は警視廳刑事部から出たもので、比較的信賴に足るものである。

| | | |
|---|---|---|
| 一月 | 五十五件 | (檢擧 十八件) |
| 二月 | 五十九件 | (同上 五十三件) |
| 三月 | 四十八件 | (同上 三十三件) |
| 四月 | 四十四件 | (同上 二十二件) |
| 五 | 三十六件 | (同上 四十四件) |
| 六月 | 四十件 | (同上 五十五件) |
| 七月 | 二十三件 | (同上 十四件) |
| 八月 | 五十一件 | (同上 二十一件) |
| 九月 | 二十三件 | (同上 五十六件) |
| 十月十五日迄、 | 二十二件 | (同上 十三件) |

これを見て驚くべきことは、この平和を裝ふた東京に、每夜平均多い時には、二件位の强盜があり、少い時でも一件はあるといふことである。そして總件數四百の中三百四十一件は檢擧といふことになつてゐるが、これは警視廳の體面といふこともあることを考へれば、市民の信賴をつながんとする一種のプロパガンダであつて、實際はそれほどに逮捕されてはゐないのではないかとも考へられるのである。しかしそのことは別として、この統計は私共に何を考へさせるであらうか。

獨り東京市のみのことではない。この平和を裝ふ私共の社會全體の背後には、多くの不幸な人々がある。極く少數の人が每日富を增大して行くのに反比例して、これらの人々は益々貧窮のどん底に逐ひやられる。特に關東の大震災以來、人氣がなんとなく殺氣を帶びて來てゐるやうに感じられるにも拘らず、富める者と貧しい者との距離が甚しく、量の上に於ても質の上に於いても增大しつ〻ある。そして貧しい者は、既にもう生命をさへも脅かされてゐるのである。であるから、この貧しいもの〻中の或る人々が、强盜となり夜盜となるといふことは今日の社會の缺陷が然らしめるところであつて、大して驚くべきことではないのである。

どの社會でも、その社會に於いて每日うまいものを喰べ、每日樂しい痛快な生活を送るのはその社會の支配階級だけなのである。それで支配階級に生々とした生命力がある時期に於いては、あま

り××××のやうなものも起らなければ、强盗の横行といふやうなこともないものである。しかしその階級が老衰期に入つて——最後の段階に近づいて社會全體に一種の遲緩作用を生ずるやうになると、人間の諸機關が直ちに何等かの故障を生ずるがやうに、モダーンガールとかモダーンボーイが銀座街頭を横行する一方、×××××の如きものや强盗が横行することになるのである。

東京に於ける毎夜に亘る强盗の横行事件は、これを一言にして云へば、老衰期に入つた資本主義社會の一病弊の具體化に外ならないと思ふ。

## 三、一團の女流教育家について

今回行はれた御大禮に際して、數名の女流教育家が叙勳の恩命に浴することゝなつた。曰く、鳩山春子、曰く、山脇房子、曰く、嘉悦孝子、等々の一團の人々である。これらの人々は、日本の資本主義制度の勃興期に當つて、よくその潮流に棹さして婦人の地位を高め、又婦人の教育の爲めに長く努力して來た人々である。

良妻賢母といふ言葉は、この一團の人々によつて提稱され贊同されたものであり、明治大正にかけての婦人教育のモットオであつた。それは實に日本の全女子教育制度を風靡したもので、この主張には弓ひく者はなかつたのであるが、時勢はこゝ四五年の中に轉換した。

今日の女學校に於いてその賢母良妻の教へが、實生活に於いていかに蹂躙されつゝあるか、學校も卒業後の生徒の行動について如何に無神經たることを餘儀なくされてゐるかそれは豫想外であると思ふ。

以前は、これらの人々の女學校は卒業後の生徒の職業に干渉を試みるやうな時代であつた。賣笑婦、女給、女優ですら森律子の如くに問題となつた時代があつた。その當時の社會的體面から云つて思はしからざる職業につくものとか、とかくの噂ある者は卒業生の名簿から除くとか又は學校によび出して訓戒を與へるとか、ともかく何等の制裁が與へられたものであつた。しかし資本主義が老衰期に入ると共に、學校はその種の道徳上の義務に堪へなくなつた。

今日ではこれらの人々の經營關係する學校ですら、社會に對する道徳的の義務は名ばかりで、これらの人々も一種の學校といふ企業の經營監督者といふ地位に落されてしまつた。何故かと、完成された資本主義社會にあつては、教育家と雖どもその意味に於いてのみしか生存の餘地はないからである。

とまれ、現在は如何であれ、今日迄の段階に日本の婦人を導いたといふ彼女達の功績は決して小さきものではない。今回叙勳の御沙汰を崇つたといふのもその故であらうと思ふのであるが、しかも一方から考へて見ると、これらの人々の時代も既に過去のものであり、私共はこの人々の存在によつて今日少しの利益をもうけないことを感ずるのである。

日本の資本主義勃興期に當つてかうして最も活動した人々は、次々に次の世代の人々にその社會の耳目としての地位を讓りつゝある。そしてそれに代つて社會主義的見解をもつ新しい婦人達が、來るべき社會を率ゐる指導者として登場するのであらう。

そして今年はかうした機運が愈々益々濃厚になり行くであらうし、又さうさせることが私共の一の重大な役割であらうと思ふ。

# 婦人彙報

△**婦人辯護士の誕生**

辯護士法の改正に絡んで『婦人辯護士法』の制定が愈々來る第五十六議會に政府案として提出されることになつた。遲蒔きながら何れは我日本の法廷にもいかめしい法服を纏ふた婦人辯護士の辯論が聽かれることになるであらう。

△**妻の新權利**

夫の愛情を奪ひ家庭を破壞する『他の女』を殺害した場合それを無罪とする不文律が最近米國ケンタキー州の巡回法廷で適用された。同州では妻を奪つた『他の男』を夫が殺しても有罪と認めぬ不文律が早くより行はれてゐるとのことである。

△**大西洋横斷の女性**

この間飛行船ツエッペリン號が歐洲から米國へ大西洋を横斷して世界の人を驚かしたが、その時その飛行船にはただ一人の婦人が乘つてゐた。それはドイツ人のドラモンド・ヘー夫人である。夫人は世界で初めて飛行船で大西洋を横斷した女性であるとニユーヨーク・タイムスは報じてゐる。

△**明大女子專門學校**

女子に專門的な法律經濟の知識を授けるため豫ねて計畫中の明治大學女子部設置案は、このほど文部當局の諒解を得たので十一月三日正式に發表した。法政經濟の女子專門學校は最初の企てであるから、かなり一般の期待を惹くであらう。新設される女子部は明治大學專門部の一分科として差當り法律經濟の二科に分け、高女四年終了者のため豫科一年を設け、本科は高女五年卒業者及び同資格者を入れ卒業すれば大學部に無試驗入學を許すといふ。

△**看護婦專門學校**

築地聖路加看護婦專門學校では在米中のトイスラー博士から八十萬圓の贈與を得ることになつたので、同校長ジヨンソン女史は大喜びで『白鳩のごとく優しく美しい人々がここから生れると思へば、ロックフエラー研究所からのこの八十萬圓より生ずる美果は人類愛を至上に導くものです。』と語つてゐた。因みに同校は現在生徒三十五名を百五十名以上收容し得るやう校舍も講堂も來年建築される。

△**人見絹枝女史の活躍**

女子スポーツの大家として自他共に許してゐる人見絹枝女史は最近ますます活躍ぶりを示してゐる。先般、東京市社會教育課と東京日日新聞社主催で上野自治會館の講演會で『オリムピックから歸りて』と題する女史の熱辯は滿堂の聽衆を感激させた。

△**女流歌人の大同團結**

女流歌人の親睦をはかるためにこの春創立されたひさぎ會第二回會合が二十日日本橋三共のエンプレスで開かれた。席上で、今後會員中に不幸のあつた時に弔慰金を送ること來年度の仕事として明治の女流歌人の評傳を作ること、この二つの相談が纏つた。

△**關東消費組合の佐藤絹子さん**

日本で一番古い消費組合たる府下大島町二丁目の關東消費組合聯盟本部で、佐藤絹子さんはまだうら若い身をもつて婦人に消費經濟の實際を示すために日夜熱心に活動してゐる。いまでは、本部になくてならない働き手であると。

△**女學生盟休**

小石川區竹早町東京女子師範學校、同第二高等女學校の女生徒たちは田中校長が同校教諭五名を休職處分したことに不服をもち、田中校長排斥を企て二十日同校生徒約千名は一齊に授業を受けず、原宿に集合して明治神宮參拜に出かけた。學校當局の狼狽は勿論、時節柄女生徒の盟休といふので、かなりの注目を引いた。

△**孤兒の母クリマンス・ヴエルネ女史**

社會事業功勞者として表彰された佛人クリマンス・ヴエルネ女史は今年八十一歲の高齡で明治九年日本に來て以來、孤兒保育のために半生を捧げてきた稀れにみる篤志家である。日本へ來てからの女史は横濱センモール會社經營の孤兒院である仁慈堂に入り、同堂が菫女學院と改名されて府下高井戸大宮前新田に移るまで五十餘年の永い年月を一日の如く同學院の孤兒と起居を共にし、あらゆる困難と闘つて可憐な子供達の保育と教養に半生を捧げてきたのである。

△**アルヘンティーナ女史來朝**

スペイン舞踊界の名花として世界的にその名を知られてゐるアルヘンティーナ女史は、東洋巡演の途につくことになり明春一月二十六日から五日間帝劇に來演と決定した。我が樂壇も舞踊界も純粹のスペイン舞踊には久しい以前からあこがれをもつてゐることゝて定めし一般フアンは多大の期待をかけて待ちわびることであらう、と。

△**インドの女流詩人來朝**

現代インドの生んだ最も優れた

女流詩人――といふよりも寧ろインド獨立の聖雄ガンヂーの後繼者で、曾てインド國民議會の議長に選ばれ、今春更に人口百萬を超えるボンベイの市長に推されたサロヂニ・ナイズ夫人は今夏印度事情紹介のため歐米歴遊を志し目下米國各地の旅を續けてゐるが、來月歸國の途日本へも立寄るとの報がある。

△モボ、モガ恐慌の國

享樂の都ブダペストでは最近國民堅張令がしかれてゐる。うつかり若い女に街頭で話かけでもしようものなら早速御用だ、カフエーでも料理店でも嚴席を缺くものは片端からお灸ダニューブ河畔で裸體で日向ぼつこをしてゐても『おいこら……』と來る。ブ市のモボ、モガが目下大恐慌であるとのことである。

△日本婦人聯合常置委員會

ロンドンの國際婦人協會聯合委員會と連絡を取り、婦人運動を圓滑にするため東京に日本婦人聯合常置委員會を設置する案は、九月以來キリスト教女子青年會日本同盟が主となり各婦人團體の間に相談が進められ、教育、衛生、政治及職業、社會事業、社會運動の五部に分けて組織研究をしてゐたが、各部とも具體案を得たので、來る二十三日午後三時から神田猿樂町一〇同盟會館で協議會を催しいよ〳〵最後の成案を得る筈である。尙ほ各部に所屬する團體は

△教育部

全國小學校聯合女教員會、女子青年會學生部、日本幼稚園協會、その他各教育家個人

△衛生部

日本赤十字社看護婦會、全國産婆會、その他

△政治職業部

婦人參政權協會、婦選獲得同盟、婦人參政同盟、各勞働婦人の全國的團體

△社會事業部

少年保護婦人協會、愛國婦人會、二葉保育園、親隣館、友隣園、救世軍婦人部その他、

△社會運動部

基督教婦人矯風會、禁酒同盟女子部、佛教女子青年會、女子青年會日本同盟、佛教各派婦人會婦人平和協會、女子青年團其他

△職業婦人共濟會

職業婦人が病氣災難等に遭遇した場合に悲慘な境遇に陷るのが多いので、これに對し相互扶助的共濟機關として東京聯業婦人共濟會が設立された、發起人は淸川とき子、松崎きく、石木きみゑの各女史で、事務員女給に至るまで職業婦人と名のつく一切のもの全部を網羅する方針の下に目下盛んに奔走中であると。

△痛ましき犧牲

鬼工場主の犧牲とされた痛ましい事實が暴露された。北海道生れ田岡きくゑといふ十四歳の少女が茨城縣下館町周旋業高島久四郎の手で、昨年十月群馬縣佐波郡諸村大字今泉機織工場戸頃愛次郎方に傭はれたが、酷使のあげく、左膝に腫物を生じたのを醫師にも見せずうどん粉を貼つて就業させてゐた、苦痛に堪へかねるのを酷使し二ヶ月餘一室に監禁して虐待し衰弱の結果瀕死に陷つたので、愛次郎は周旋人高島方の留守宅に同女を置去りにして逃走した。同女は顔面その他に生傷を負ひ大腿部は腐爛し頭髮は根元からむしられて、見るに堪へない有樣であると。

△看護婦の專檢合格

今秋の專檢合格者は受驗者六百二十餘名中合格者は僅かに四十八名に過ぎなかつたが、その中東京に於ける合格者十四名の中三名の看護婦がゐる。一人は兒玉きみさんで鐵道病院に看護婦を勤めながら苦學をつゞけ、一人は柏木あき子さんで赤羽橋濟生會病院の看護婦となり勉强をつゞけ、一人は川口なみ子さんで同濟生會病院に住み込み苦學を續け、三人とも見事に合格の榮を擔つたのである。

△母乳を賣つた松田解子さん

プロレタリア作家として前途を囑望されてゐる松田解子さんは、東京自由勞働者組合の幹部大沼渉氏の夫人で、時計會社精工舍柳島工場へ保姆に傭はれて働らいてゐるが、このほど精工舍の重役宅の赤ん坊が消化不良のため母乳保有者を探してゐるのをきいて解子さんは、プロに課せられた運命に甘んじて一日五百グラムの母乳を一圓で提供することにして、十日間に五千グラムのお乳を提供した。それで赤ん坊の病氣がすつかり癒つたといふことである。その體驗を解子さんは目下創作にして書いてゐられる。

△職業婦人社の新計畫

御大典紀念として「聯業婦人の家」を造るべく、奥むめお女史は各方面へ助力を勸誘されてゐる。木造二階建で、閲覽室、ホール、共同炊事場、洗濯場、簡易宿泊所、食堂、應接室、事務室、賣店を設け、よき教室、よき慰安室、よき休息所とする計畫である。

## 編輯後記

宇宙に漂ふ地球には陸と海とのただ二つである。そこに生けるものとして兩性に分つとき全の女性はただ一つである。神經的な分裂は當分考へずにおきたい。その意味であたしは洋々たる希望をもつて「女人藝術」第一の新春を祝福する。（時雨）

新年の言葉はまづもつて月次なおめでたうにはじまる私もおめでたう、あなたもおめでたう、そして私達の『女人藝術』も。このおめでたうといふ言葉こそは、極めて鈍い善良な響をもつ舌ッたるい感じをもつ。實は時代はそんな鈍い善良な言葉を冷笑してゐるのだ私達はそれを知らないわけではない。しかし鈍い位、善良な位、心をのんびりと伸ばして、又新しいスタートを切るといふ事にも一種の面白味がある要するに速かなる才に老いず、遲く確かなる歩みに於いて、あなたも私も、そして『女人藝術』も出來得る限り、多くの明るい樂しい光陰を滿喫したいつもり。もともと『女人藝術』は同人雜誌とはこと異ふ。同人雜誌ならば尖鋭單調の一路をえらぶであらうしかし、この『女人藝術』は、同人雜誌的戰鬪法を超越する。そこに『女人藝術』のおめでたいところもあり、居心地のよい所もあり、成長してゆく可能性もあり得るのではないだらうか、『女人藝術』おめでたう論、かくの如し。（花世）

今年はナンだつたから來年は！と、來年といふよもやに惹かされて來たのだつた。年でも明けたら世の中がガラリと變りでもするかのやうに：：だが、世の中は變りつゝある。動きつゝある。「女人藝術」はたゞ「女人」といふ意味よりも社會性を有つ唯一の女人の雜誌である事に誇りを感ずる。その動きは生田さんのいはれる樣に住みよい程度の緩漫なテンポであるとしても、また雜然とした思想傾向であるとしても：：その故にまた未來の自由な成長が待たれるのではあるまいか。「女人藝術」は批評家によつてその藝術性ばかりでなく社會的價値を批判されるであらう。おめでたうといふ新年の言葉はこの意味で申します（八木）

一九二八年と一九二九年に跨つて編輯後記を書かなくてはならないが、私の氣分はもう千九百二十九年に於ける『女人藝術』の發展にどうお手傳ひしたらいゝかにかつてゐる。その緊張した氣持は平素でも持たないわけのものではないが、新年を前に控へると一層引締つてくるやうである。それはてうど戀愛し合つてゐた女性が初めて異性と家庭生活を持つ時のやうな狀態である。讀者にお願ひしたいのは、私たちにこの氣持をさらに緊張してゐないかのやうに見える程緊張させる事にお手傳して頂きたい事である。この新妻の氣持を世話女房の氣持にまでさせて頂きたいことである。新年に際して妻君たる私たちは夫たる讀者にお誓ひする『私たちは貴方を愛します。貴方がたも私たちを愛して下さい。そして新妻の緊張ぶりを主婦の緊張ぶりにしませう』と。でもその邊にあるヌカミソ臭い主婦ぶりは發揮したくも發揮させられたくもないが：：（かど江）

私は例によつて自慢を二つさせて頂く。そのAは龜高文子女史の表紙です。恐らくどの雜誌にも負けない立派なものだと。十幾年前からの文子女史讀者の私は一人で嬉しがつてゐる。そのBは宇野氏の創作。新年に際して、この名篇を見出した事を、どうぞ皆樣もお喜び下さい。この「蒼ざめた家」に出て來る丘を、歩き乍らある秋の日宇野氏は私に、「きつといゝものを書く」とお約束して下すつた。論文には雷鳥女史のが頂ける筈だつたが、間にあはなくて殘念でした。（しづか）

又來たお正月！實際又と云い度い新年ですけれど、然しこの新らしい一年はどんなに進歩的な素晴らしさを私達に齎る事でせう？胸を張つて期待をより偉大なものにしやうではありませんか（素子）


### 女人藝術定價表

| | 定價 | 送料 |
|---|---|---|
| 一部 | 四拾錢 | 一錢五厘 |
| 六部 | 二圓參拾錢 | |
| 十二部 | 四圓五拾錢 | |

△誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい
△郵便切手代用は一割増の事。

昭和三年十二月十七日印刷
昭和四年一月一日發行
（每月一回　一日發行）

發行者　長谷川時雨
編輯者　素川絹子
印刷者　生田花世
印刷所　日清印刷株式會社
東京市牛込區左内町三十一
發行所　女人藝術社
電話牛込(84)一七八九
振替東京七一五八二五

大賣捌　東京堂　大東館　北隆館　東海堂

# 子供のための劇場

會員券當日は小劇場にて・前賣はプレーガイドにて！

一、忘れられた人形 ―一幕― 岡田八千代作

二、そら豆の煮えるまで ―一幕― スチユアアトヲオカア作 小山內薫譯

# 芽生座臨時公演
クリスマス臨時

三、サア、デュヰッド王冠を冠る ―一幕― そら豆の煮えるまで續篇

無産者兒童の慰安興行資金募集の爲め當日劇場休憩室に於て文藝家畫家新舊俳優諸氏揮毫の色紙短冊の頒布會を催します

臨時 A券壹圓五十錢
會員券 B券九拾五錢

十二月 二十五日晝（一時・四時）夜六時―九時
二十六日晝（一時―四時）

築地小劇場ニテ

## 芽生座事務所

電話高輪二一九一二

東京市芝區三田小山町一番地

振替東京七一七三二


婦女界連載
原作……細田民樹
監督……池田義信
栗島すみ子主演
愛人
野田高梧脚色　浜村義康撮影
深刻な社会相の描写は自ら陳套なる長篇とはその選を異にし、これが映画化は最も至難とされたもの！
茲に遂に蒲田独特の珠玉篇として出づ、幸いに期待あれ!!
野寺正一　岡田宗太郎
押本映治　奈良真養
島田嘉七　吉村秀哉
木村健児　土方勝三郎
山内光　河原侃二
東栄子　岡村文子
八雲百合絵　花岡菊子
大競演
松竹キネマ特作映画

昭和三年十二月十七日印刷納本
昭和四年一月一日發行　毎月一回一日發行
第二卷第一號
定價金四十錢

月刊

# 平凡

定價・五十錢

## 大好評の新春號

**特大長編**

菊池寛氏
加藤武雄氏
吉川英治氏
大佛次郎氏

**連載長編**

三上於菟吉氏
佐藤紅緑氏
岡本綺堂氏
葱洋平氏

東京市麹町區下六番町
振替東京二九六三九
平凡社